

県道遊佐(停)藤崎線

下長橋遺跡

発掘調査報告書

1989

山形県
山形県教育委員会

県道遊佐(停)藤崎線

しも なが はし
下 長 橋 遺 跡
発掘調査報告書

平成元年3月

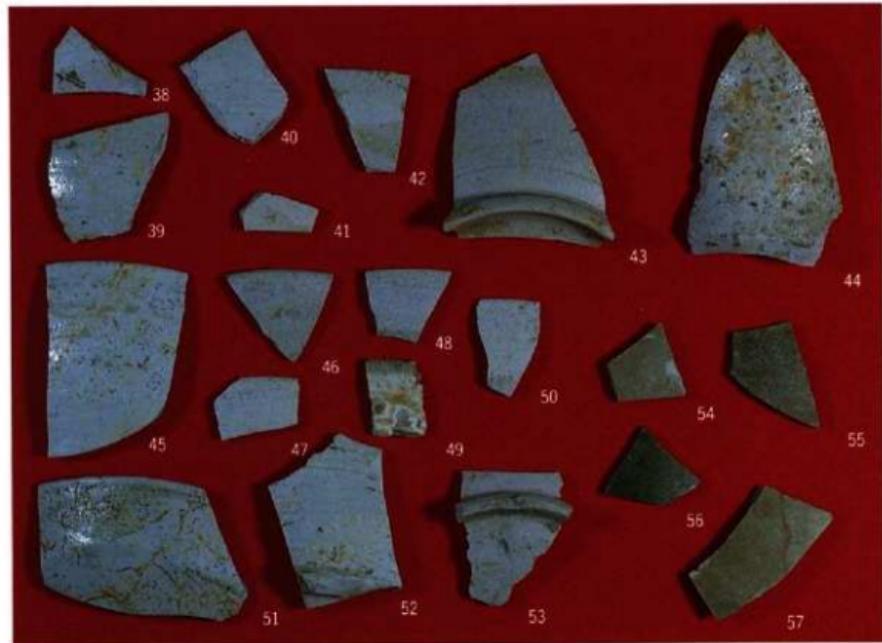
山形 県
山形県教育委員会



緑釉陶器 (1)



緑釉陶器 (2)



灰釉陶器・青磁



E U824出土遺物

序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和63年度に実施した県道遊佐（停）藤崎線八走踏切除却工事に伴う「下長橋遺跡」の発掘調査の結果をまとめたものです。

発掘調査では、平安時代の中頃の大きな建物跡をはじめとする遺構や、多くの遺物が発見されました。これらの遺構や遺物から本遺跡は当時の一般的な農耕集落とは異なった、公的色彩の強い性格をもつてることが明らかとなりました。また、遠く十和田カルデラから飛んできた火山灰や、古代の地震の跡も見つかり、古代の人々が天災に遇いながらも、力強く生き続けている様子を窺い知ることができました。これらは、本県の歴史を解明するうえで、大きな手掛けを与えてくれる貴重な資料となるものと期待されます。

これらの文化遺産は私どもの祖先の歴史を語る資料として、かけがえのない財産です。これらを保護し、未来へ継承していくことは、現代に生きる私どもの重要な責務です。

山形県教育委員会では、このような立場で文化財の保存と活用を推進していく所存です。

最後になりましたが、調査にあたって多くのご協力をいただきました地元の方々、遊佐町教育委員会、山形県土木部、そして、ご指導頂きました関係各位に感謝申し上げるとともに、本書が研究と埋蔵文化財の保護・普及の一助になれば幸いです。

平成元年3月

山形県教育委員会

教育長 木場 清耕

例　　言

- 1 本書は山形県土木部の委託を受けて、山形県教育委員会が昭和63年度に実施した県道遊佐（停）藤崎八走路切除却工事に係わる「下長橋遺跡」発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は昭和63年5月30日から同年8月12日までと同年11月15日から11月22日までの延べ59日間行った。
- 3 遺跡の所在地は山形県飽海郡遊佐町大字小原田字道の下3-1外である。
- 4 調査体制は下記のとおりである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 主任調査員 佐々木洋治

現場主任 渋谷 孝雄

調査員 辻 広美

月山 隆弘

事務局 事務局長 後藤 茂彌

同補佐 土門 紹穂

事務局員 佐藤 大治 長谷部恵子 長谷川 浩

- 5 発掘調査にあたっては遊佐町教育委員会、山形県土木部道路建設課、庄内支庁建設部道路計画課、庄内教育事務所など関係機関のご協力を得た。
- 6 本書の作成は渋谷孝雄、辻 広美が担当した。遺構図は主として渋谷が、遺物の実測図は主として辻が、また、遺物の写真撮影は黒坂雅人と渋谷が行った。本文の執筆は渋谷、辻の協議を経て、第V章1の(4)、(5)と2の(1)特殊埋設遺構の土器、土器埋設ピットの土器を辻が、その他を渋谷が分担した。挿図の作成にあたっては栗原皎子、小沼未子、田村操江、平井あや子、武田弘美、相沢千代子の補助を得た。
編集は阿部明彦、渋谷孝雄が担当し、全体を佐々木洋治が統括した。
- 7 図版1の航空写真は伊藤和三郎氏、火山灰の屈折率のデータは山形大学教育学部阿子島 功氏の提供による。阿子島氏には地震跡、火山灰、基本層序の理解について、現地調査ならびに報告書作成の過程で種々ご教示を賜った。厚くお礼申しあげる。
- 8 現地調査と報告書の作成にあたって、つぎの方々からご指導とご助言を賜った。記して感謝申し上げる。柏倉亮吉、加藤 稔、酒井忠一、川崎利夫、佐藤徳宏、矢部良明、平川 南、船木義勝、岡村道雄、宇野隆夫、斎藤孝正、西井龍儀、山本正敏、池野正男、関 清、宮田進一、松島吉信、高橋與右エ門、柴田陽一郎（順不同 敬称略）

目 次

I 第2次発掘調査に至る経過	1	1 遺構	91
II 遺跡の立地と環境		2 遺物	91
1 遺跡の立地	2	VII 火山灰の分析	
2 歴史的環境	2	1 鉱物組成測定結果	92
III 発掘調査の経過	4	2 考察	92
IV 遺跡の概観		3 火山ガラス屈折率測定結果	93
1 遺跡の基本層序	7	VIII 若干の考察	
2 遺構と遺物の分布	8	1 遺構群の変遷について	93
V 東区の遺構と遺物		2 火山灰の降下年代	94
1 遺構	13	3 遺構群と土器の年代	95
2 遺物	48	4 地震の時期と特殊埋設遺構	96
VI 西区の遺構と遺物		5 遺跡の性格	97

挿図目次

第1図 遺跡位置・分布図	3	第17図 E U824・825	39
第2図 調査区位置図	5	第18図 E U826・1023	40
第3図 基本層序	7	第19図 土器埋設ピット	43
第4図 東区遺構分布図	9	第20図 S A10平面・断面図	44
第5図 西区遺構分布図	11	第21図 S X1105平面・断面図	45
第6図 S B 1 平面・断面図	15	第22図 落込み断面図	46
第7図 S B 2 平面・断面図	17	第23図 土器実測図(1)	49
第8図 S B 3 平面・断面図	19	第24図 土器実測図(2)	50
第9図 S B 4 平面・断面図	23	第25図 土器実測図(3)	52
第10図 S B 5 平面・断面図	25	第26図 土器実測図(4)	53
第11図 S B 6 平面・断面図	27	第27図 土器実測図(5)	54
第12図 土壙平面・断面図(1)	29	第28図 土器実測図(6)	55
第13図 土壙平面・断面図(2)	31	第29図 土器実測図(7)	57
第14図 土壙平面・断面図(3)	32	第30図 土器実測図(8)	58
第15図 溝状遺構断面図	34	第31図 土器実測図(9)	60
第16図 E U822・823	38	第32図 土器実測図(10)	61

第33図	土器実測図 (11)	62	第45図	土器実測図 (23)	79
第34図	土器実測図 (12)	64	第46図	土器実測図 (24)	80
第35図	土器実測図 (13)	65	第47図	土器実測図 (25)	81
第36図	土器実測図 (14)	68	第48図	土器実測図 (26)	82
第37図	土器実測図 (15)	69	第49図	土器実測図 (27)	83
第38図	土器実測図 (16)	70	第50図	土器実測図 (28)	85
第39図	土器実測図 (17)	71	第51図	墨書き土器実測図	87
第40図	土器実測図 (18)	74	第52図	土製品実測図 (1)	88
第41図	土器実測図 (19)	75	第53図	土製品実測図 (2) 石製品 実測図 (1)	89
第42図	土器実測図 (20)	76	第54図	石製品実測図 (2)	90
第43図	土器実測図 (21)	77	第55図	土器実測図 (29)	91
第44図	土器実測図 (22)	78			

図版目次

図版1	東区完掘航空写真	図版13	S X1105、11月調査区全景
図版2	遺跡近景 西区遭構検出状況	図版14	出土土器 (1)
図版3	S B 1 完掘他	図版15	出土土器 (2)
図版4	S B 2 完掘他	図版16	出土土器 (3)
図版5	S B 3 完掘他	図版17	出土土器 (4)
図版6	S B 4 完掘他	図版18	E U822・823出土遺物
図版7	S B 5 完掘他	図版19	E U825・826出土遺物
図版8	S K26・28・34・37	図版20	E U1023、S P992出土遺物
図版9	E U822・823	図版21	土器埋設ピット出土土器他
図版10	E U824・825	図版22	墨書き土器 (1)
図版11	E U826・1023、S P102・104他	図版23	墨書き土器 (2) 土製品
図版12	S P466・930・976・982・992	図版24	石製品 火山灰

附表目次

表-1	溝状遺構一覧 (1)	35	表-5	土器計測表 (1)	98
表-2	溝状遺構一覧 (2)	36	表-6	土器計測表 (2)	99
表-3	落込み一覧	47	表-7	土器計測表 (3)	100
表-4	特殊埋設遺構出土縦計測表	66	表-8	土器計測表 (4)	101

表-9 土器計測表(5)	102	表-14 土器計測表(10)	107
表-10 土器計測表(6)	103	表-15 施釉陶器一覧	108
表-11 土器計測表(7)	104	表-16 破片資料一覧(1)	109
表-12 土器計測表(8)	105	表-17 破片資料一覧(2)	111
表-13 土器計測表(9)	106		

凡 例

- 1 本書中の土色については「新版標準土色帖」(小山・竹原1970)を使用した。
- 2 本書で使用した分類記号は下記のとおりである。
 S B……建物跡、E B……掘り方、S K……土壤、S D……溝状遺構、S P……ピット
 E U……埋設土器、S X……性格不明の落込み、S A……柱列、R P……登録した土器
 R Q……登録した石製品
- 3 挿図中の方位は磁北を示している。遺構図の断面図における基準レベルは11m20cmに統一し、個々の記載を省略した。遺構の挿図縮尺は1/10、1/20、1/40、1/60と不統一であり、各々にスケールを示した。遺物の縮尺は土器、施釉陶器は1/3、土製品、石製品は1/2・実大とし、各々にスケールを示した。
- 4 図版の遺物のうち、単体の土器は1/4、墨書き器は1/2としたが、集合写真は不統一である。なお、巻頭図版の施釉陶器は2/3とした。
- 5 遺物は原則として1/4以上残存するものを実測対象としたが、甕、壺等大形の器種については、1/4以下でも実測を行った。なお、実測図のなかで、断面黒ベタは須恵器、白ヌキは赤焼土器、土師器、施釉陶器であり、土器の外外面に網点が施されているものは黒色化処理のあることを示している。ただし、特殊埋設遺構出土の小形皿の網点はススの付着を示す。
- 6 遺物番号は挿図、写真図版とも共通するが、巻頭図版の陶・磁器には独自の番号を付し、本文中においてもこの番号で説明した。

I 第2次発掘調査に至る経過

下長橋遺跡は大正年間の羽越本線敷設工事によって発見された遺跡である。この工事の際に出土した須恵器の長頸壺が遊佐町公民館に保管されているが、遺跡として登録・周知されたのは、昭和37年の県下一斎の遺跡確認調査後である。

昭和62年8月18日付け文化第539号で山形県教育委員会が国や県の関係部局に対して照会を行った「昭和63年度以降の埋蔵文化財包蔵地にかかる各種の事業計画について」の回答文書である、同年8月31日付けの道建第187号と、9月3日付けの農建第333号において、本遺跡に影響が及ぶ可能性が生じた。県教育委員会ではこれらの回答に対する聴取を同年9月10日、21日に行い、両事業とも遺跡の範囲、包含状況等を把握して工事の調整をはかる必要があると判断し、同年10月試掘調査を実施した(山形県教委1988)。その結果、本遺跡はJR羽越本線をはさんで東西300m、南北450m、面積135,000m²に及ぶ広い範囲をもつことが明らかとなった。

このうち、線路東側の南半について、昭和62年10月のNTT株壳却益による大型補正によって追加された昭和62年度事業区内に県営圃場整備事業、県営灌漑排水事業の二つの事業が含まれることになり、62年度中の対応がせまられることになった。また、63年度事業として予定されている県道遊佐(停)藤崎線八走路切除却工事、それに、線路西側の圃場整備、灌漑排水の両事業も遺跡内にかかることとなった。

県教育委員会ではこれらの事業主体である県農林水産部、土木部と遺跡の保護について協議を重ね、それぞれ次のように対応することで合意をみた。県営灌漑排水事業は、それぞれの施行年度内に緊急発掘調査を実施して記録保存に資する。県営圃場整備事業は、遺跡の破壊が免れない排水路部分について緊急発掘調査を実施する。ただし、63年度施行部分においては遺跡詳細分布調査で対応する。県道遊佐(停)藤崎線八走路切除却工事部分は昭和63年度に緊急発掘調査を行い記録保存をはかる。

県営灌漑排水事業に係る緊急発掘調査は昭和62年10月26日から同年11月20日まで延べ18日間にわたって行われ、礎石建物跡、溝状遺構、土壤、ピット、落込みなどが検出され、整理箱34箱相当の遺物が出土した。土器の組成、特徴から10世紀中葉から後半にかけての遺構と考えられている(野尻・伊藤1988)。この調査を第1次発掘調査とする。県営圃場整備に伴う排水路部分の調査は62年10月28日から11月5日まで行われ、部分的ではあるが掘立柱建物跡が検出され、8世紀後半~10世紀にわたる遺物が出土した(山形県教委1988)。

下長橋遺跡の発掘調査は本書の調査が第2次、さらに63年度の県営灌漑排水事業の第3次、同圃場整備事業の第4次と都合5回にわたって行なわれた(第2図参照)。

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の立地

下長橋遺跡はJR羽越本線遊佐駅から南へ約800mの山形県飽海郡遊佐町大字小原田字道の下を中心とした水田中に位置する。出羽富士とも呼ばれる秀峰鳥海山に源を発する月光川と日向川は庄内平野に入って西流し、日本海沿岸の砂丘地帯との間に肥沃な沖積平野を形成し、全国的にみても屈指の水田地帯となっている。この沖積平野は自然堤防・後背湿地・狭義の河間低地を含む庄内北部河間低地と呼ばれており、本遺跡は月光川左岸の河間低地に立地する。遺跡の南端は日向川水系との境界になっている。

2 歴史的環境

遊佐町内では現在まで173ヶ所の遺跡が登録されている。後期旧石器時代から江戸時代までの長い間にわたり、この中には調査が行われたり、出土品が紹介されたものも多い。

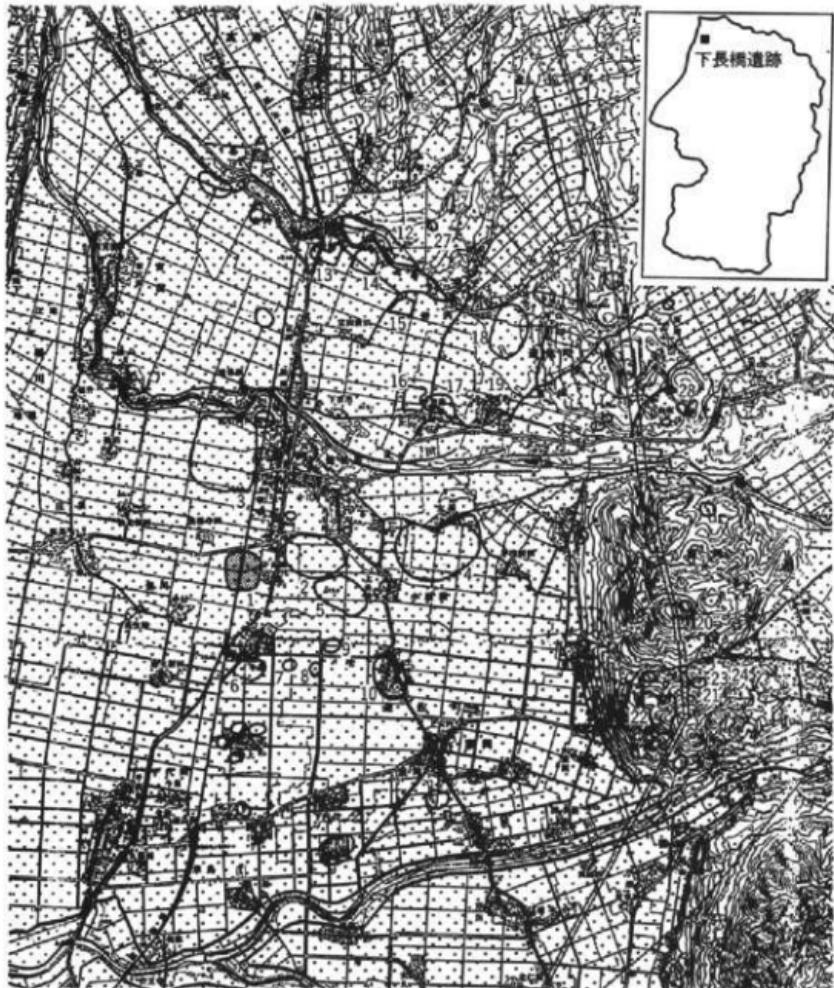
後期旧石器時代ではナイフ形石器などが採集された臂曲遺跡、金俣A・F遺跡（佐藤1967）、細石刃石器群が出土した宮山坂F遺跡（28）（佐藤1982）が有名である。

縄文時代早期の遺跡では表裏縄文の土器と円形の竪穴住居跡が発見された金俣B遺跡があり、前期末～中期初頭にかけての大集落跡である吹浦遺跡では通算で8次にわたる発掘調査が行われ、竪穴住居跡や多数のフラスコ状土壙群が検出されている（柏倉他1955、渋谷他1985・86・88）。後期では「青銅刀」を出した三崎山C遺跡（柏倉1960）、また、晩期では国指定の重要文化財である大洞C₂式の土偶が出土した杉沢遺跡（酒井・江坂1954）が知られており、後期から弥生時代前期まで連続する神矢田遺跡（29）も学史に名高い遺跡である（佐藤・佐藤1971、72）。

古墳時代の遺跡は希薄であると言えるが、丸池遺跡出土と言われる金環がある。

奈良時代から平安時代に入ると遺跡数は爆発的に増加し、沖積平野に立地する大半の遺跡が当該期のものである。このなかで発掘調査が行なわれたのは本遺跡を含め8ヶ所である。1977年～1979年にかけての県営圃場整備事業（日向川第Ⅱ期地区）に伴う緊急発掘調査では前田（6）、地正面（7）、佐渡（9）、塚田（10）の各遺跡が対象となり、地正面遺跡では掘立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸跡などが検出された（佐藤他1982）。1982年の高瀬川河川改修事業による宅田遺跡（14）の調査では大規模な建物跡や赤焼土器の焼成に関連するとみられる遺構が検出されている。1988年には本遺跡と浮橋遺跡（2）、小深田遺跡（3）の調査が行われ、それぞれ報告書が刊行される予定となっている。

平安時代の末葉から鎌倉時代にかけての遺跡では1987年、88年に調査が行われた大幡遺跡（4）で、角材列に囲まれた礎石のある建物跡等が検出されている（伊藤1988）。



番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	下長橋遺跡	墳丘・墓	奈良～平安	15	大坪遺跡	集落跡	平安
2	浮御遺跡	ヨリ	平安	16	三田遺跡	ヨリ	平安
3	小保田遺跡	ヨリ	奈良～平安	17	袋冷遺跡	ヨリ	平安
4	大畠遺跡	城跡	縄文・古	18	仁田田遺跡	ヨリ	縄文・平安
5	水尻遺跡	墳丘・墓	平安～鎌倉	19	北子村下飛下遺跡	ヨリ	平安
6	前田遺跡	ヨリ	平安	20	天狗森C塙跡	塙跡	平安
7	地正山遺跡	ヨリ	ヨリ	21	堂林A遺跡	集落跡・塙跡	縄文・平安
8	摩田遺跡	ヨリ	ヨリ	22	坂門遺跡	塙跡	平安以降
9	坂門遺跡	ヨリ	ヨリ	23	網戸前A塙跡	塙跡	平安
10	奥田遺跡	ヨリ	ヨリ	24	網戸前B塙跡	ヨリ	平安
11	宮の下遺跡	ヨリ	ヨリ	25	河曳神社西塙跡	ヨリ	平安
12	道中A・B遺跡	ヨリ	ヨリ	26	朝電神社遺跡	ヨリ	平安
13	石田遺跡	ヨリ	ヨリ	27	神失田遺跡	集落跡	縄文・平安
14	守田遺跡	ヨリ	ヨリ	28	富山駅F遺跡	包成堆	旧石器

第1図 遺跡位置図 (S = 1 : 50,000)

III 発掘調査の経過

今回の発掘調査は昭和63年5月30日から同年8月12日までと同年11月15日から11月22日まで、延べ59日間実施した。昭和62年10月の遺跡詳細分布調査の結果によって、事業区内にかかる遺跡面積は約8,000m²であるが、このうち、羽越本線の東側の部分2,000m²、西側の部分1,200m²の計3,200m²について、記録保存のための緊急発掘調査が必要であるとの判断がなされていたが、結果的には線路東の東区が2,273m²、線路西の西区が1,300m²の合わせて3,573m²の調査となった。以下にその経過を記す。

5月30日～6月3日

30日に事務所の設営、器材の搬入を行い、午後、調査の安全を祈願する嵌入式を行う。31日までにグリッドの設定を終了し、引き続き1日まで東区の調査区に内接する幅1.5mのトレーニングの掘り下げを終える。これと並行して1・2日の両日にバックホーを投入し、東区の約1,200m²の表土除去が終了。遺物は6箱出土した。

6月6日～9日

7日までに東区の表土除去が終了。面整理作業も9日までに300m²を残すのみとなった。梁行2間、桁行5間の大きな掘立柱建物跡1棟を確認したほか、多数のピット、溝、が検出された。9日までの出土遺物は13箱であり、石器が出土した。

6月13日～17日

面精査を行い本格的な遺構検出作業を実施。その結果、17日までX列33～42列までの約1,650m²が終了し、掘立柱建物跡5棟（S B 1～5）を検出し、その写真撮影を行った。17日から遺構の精査を開始した。17箱の遺物が出土した。

6月20日～24日

Y-10以南、X-38以西の地区的ピット、溝、土壤、落込み等の精査を行う。登録した遺構は建物跡6棟、土壤12基、溝30条、ピット他が577基であり、これらのうち、SK22・26・28、SP140・190から一括土器が出土した。遺物は8箱出土。

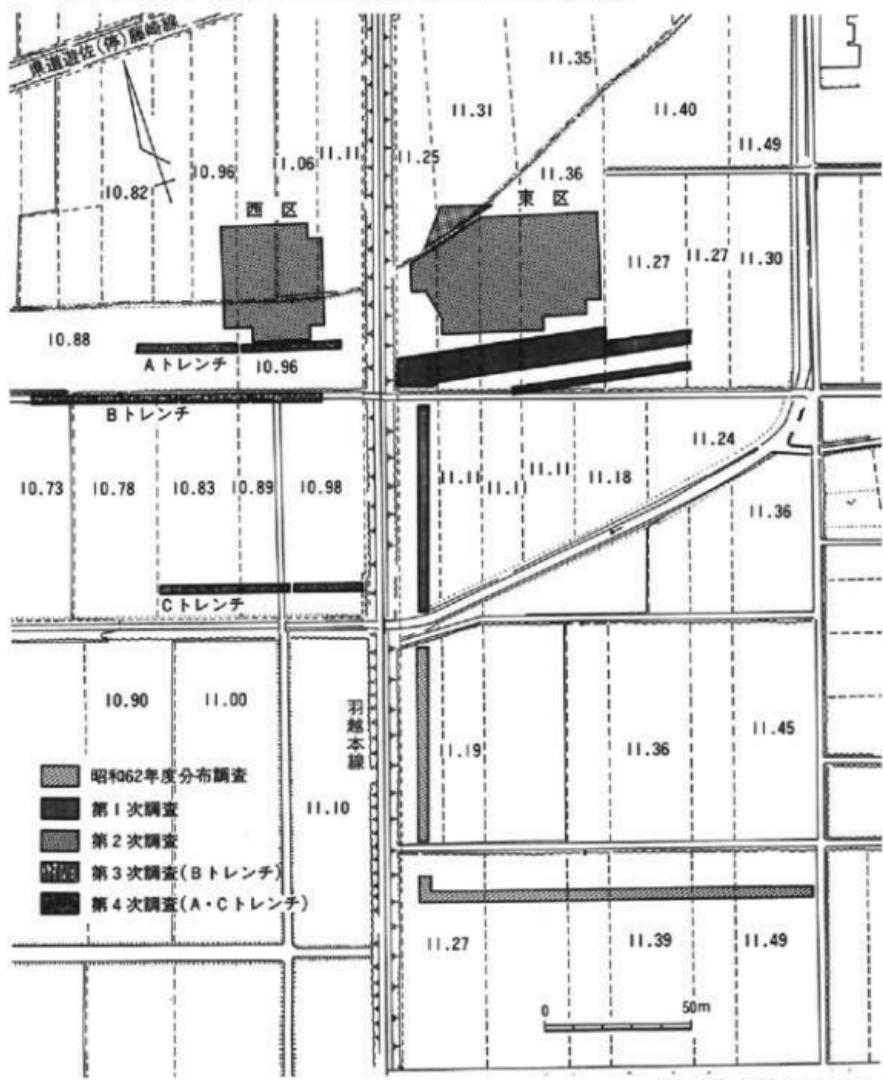
6月27日～7月1日

先週に引き続いて同じ区の遺構精査を行い、建物跡を除いてほぼ終了した。SK26・28の断面図や出土土器の平面図の作成。それに、35・36-13区内の20分の1の平面実測、及びレベリングが終了。新たに161基のピットを登録する。遺物は6箱出土。

7月4日～7日

遺構再確認のための面ケズリを行ったあと、39～41-10～13区内の遺構の精査を行い、建物跡を除いて、ほぼ終了。SK28で2回目の掘り下げに入り、新たに10個体程の土器が

出土したのをはじめ、S K31からも数個体の土器が出土した。また、甕の中に皿が数個入っている特殊なピットを5基検出した、E U822～826として登録した。実測作業は土壤、溝、落込みなどの断面図作成と、35・36・11・12区、37・13区内の20分の1の平面図の作成、それに、S K28、E U822～826の土器。取りあげた遺物は4箱。



第2図 調査区位置図

7月11日～15日

35～41—6～9区内で遺構再確認のための面ケズリを行い、各遺構を完掘。S K34から11個体の赤焼土器が出土し、E U824の精査では甕、壺、皿など13個体が出土した。平面図は14グリッド分が終了。土壙・溝等の断面図、注記もほぼ終了。遺物は4箱出土した。

7月18日～22日

東区は大きな落込みS X1001、E U823の精査と41-42-10～12区内の精査。平面実測はX-40以西が終了。東区と並行して18日から西区の調査に入る。19・20日にバックホーを入れて表土除去を行い、22日までに遺構検出作業が終了。遺構数は少ない。遺物は2箱出土。

7月25日～29日

東区の精査を行う。S X1001の底面を検出し、そこで確認された溝、ピットの精査に入る。S B1・4の掘り方のアタリ確認と断ち割りを実施し、S B1については断面図が終了する。このほか、落込みや土壙の断面図も作成する。S X1001から7箱の遺物が出土。

8月1日～5日

東区の調査。S B2・3・5の掘り方の断ち割りと断面図の作成。S B3で地震によると考えられる掘り方の傾斜が認められた。これに関して4・5の両日、山大の阿子島先生のご指導を頂く。E U825・826の精査を行い、先週まで調査を終えたE U823・824とともに、甕・小皿・壺・小砾からなる画一性の高い遺構となることが判明。また、これらの分布範囲内にあるS P992からは一括小皿が多数出土した。5日に現地説明会を行う。あいにくの雨天にもかかわらず約60名の町民の方の参加があった。約3箱の遺物が出土。

8月8日～12日

東区、西区とも遺構の精査が終了。12日までにS B2・3・5・6の断面図と平面実測、レベリングも完了。S B4の北面柱列について全体的な断ち割りを行い、地震によって動いた掘り方の記録をとった。12日に事務所の解体と遺物、器材の撤収を行う。東区の未買収地については、庄内支庁との協議により、買収後に調査することで合意。

11月15日～18日

15日に器材を搬入し、グリッド設定、トレント掘りを行う。16日にバックホーによる表土除去と面精査、17・18日と遺構の精査を行い、8割方終了する。18日に平面実測を行い、3分の1程度が終了。8箱分の遺物が出土した。

11月21日・22日

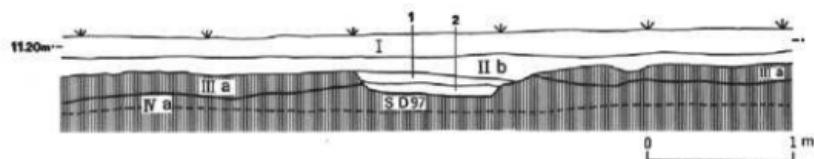
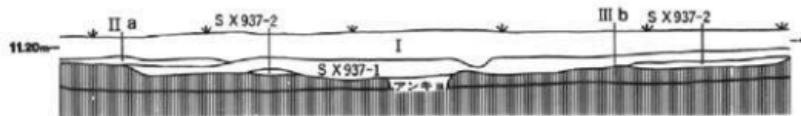
遺構の精査と平面図の作成。調査区の北西隅で検出したS X1105から多数の小皿を中心とする土器が出土した。出土遺物は2箱。22日平面実測、レベリングも終了し、県道遊佐(停)藤崎線八走踏切除却工事に伴う現地調査が完了する。

IV 遺跡の概観

1 遺跡の基本層序

2次調査対象地区の標高は、東区で11.08mから11.31m、西区で10.88mから10.96mを測る。東区の調査区の東側はやや低くなっていることから、東区の遺構密集地は河間低地のなかでも周囲よりやや高い微高地となっていたと考えられる。遺構確認面までの深さは18~30cmと浅く、遺物の一次的な包含層はない。以下に東区の基本層序を38-6区の北壁、43-13区南壁及び、S B 4 北面柱列（第9図）の断面図をもとに略述するが、遺構群の地山であるIII層以下は砂やシルト、それに粘土の互層となり、全体的にグライ化が著しい。

- I : 10YR 3 / 2 黒褐色砂質粘土。耕作土であり、上半部は水稻の根が多い。
II a : 5 Y 3 / 1 オリーブ黒色粘土質シルト。赤焼土器の細分を含む。
II b : 10YR 3 / 3 暗褐色シルト。赤焼土器の細片を含む。
III a : 2.5Y 4 / 1 黄灰色シルト質砂。これに2.5Y R 4 / 3暗オリーブ褐色細砂のブロックを混入する。砂・シルト・粘土の割合は、それぞれ69・24・7である。
III b : 5 Y 4 / 1 黄灰色シルト質砂。砂・シルト・粘土の割合は、53・28・9である。
III c : 7.5Y R 4 / 1 灰色粗砂。
VI a : 10YR 4 / 2 灰黄褐色粘土。
VI b : 10YR 3 / 1 黒褐色粘土。
V : 10YR 3 / 2 黑褐色砂質シルト。砂・シルト・粘土の割合は、32・56・12である。
なお、本遺跡で検出された火山灰は遺構内にだけ堆積し、基本層位の中には含まれない。
また、III c 層から上位で掘立柱建物の掘り方の変形が著しいことが観察された。



第3図 基本層序

2 遺構の分布

東 区 (第4図)

東区で検出・登録した遺構は掘立柱建物跡が6棟、土壙18基、溝状遺構60条、窓・坏・小皿・小碟などからなる特殊埋設遺構が6基、坏などを埋設した土器埋設ピットが8基、柱列1列、ピット935基、性格不明の落込み42基である。このうちピットは遺物が出土したものだけを登録しており、実数はこれを上回っている。

これらは、X-40以西に密集しており、それより東は希薄であり、前年の分布調査の結果からみても、X-45のラインが遺構の分布する東限と言つてよいだろう。

遺構群はS D92→S B 4→E U822・825の切り合い関係に代表されるように、最低でも3期の重複が認められる。

掘立柱建物跡6棟はすべてX-40以西にある。このうち、主軸方向や、建物相互の距離等からみて、S B 1・2・4は同時存在であった可能性があり、配置に企画性を想定できる建物群である。S B 3はS B 4と重複するが、掘り方同士の切り合いはない。また、S B 3、S B 5の距離は2.1mであり、両者とも切妻とすれば、その同時存在もあり得る。S B 2に附隨する溝S D79はS B 5によって切られている。S B 6は最も西側に位置し、東西棟の建物と考えられるが、詳細は不明である。これらの建物を構成する掘り方の中には地震によると考えられる変形が認められるものがあり、特にS B 3・4・6の掘り方に多く、S B 1・2・5にも存在する。

土壙として登録した遺構は調査区の全域に散在するが、まとまった遺物が出土したSK 22・26・28は、S B 1の西と南に存在する。完形の赤焼土器がまとめて出土したSK34はS B 3の内部にある。

溝状遺構は掘立柱建物跡の柱列に平行、あるいは直交する走向をもつものが多い。ほぼ純粹な火山灰層が堆積土の1層となるSD91・92、2層に入るSD78は東区でも古い段階の遺構である。

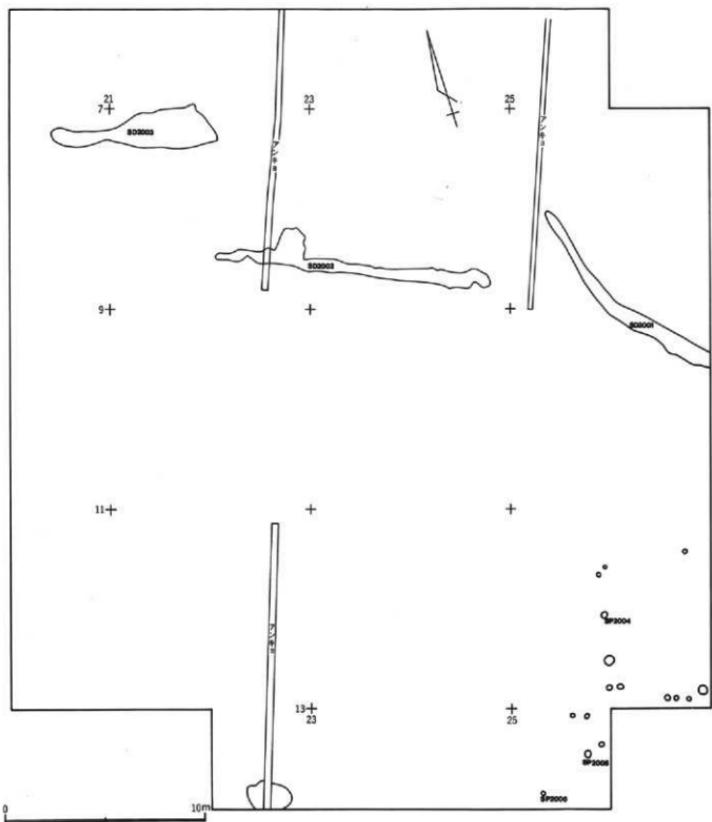
特殊埋設遺構は6基のうち5基までがS B 4のエリア内に存在する。この配置になんらかの意味があるかどうかは不明であるが、北西隅のE U822と825を結ぶ線上に824が存在し、同じく、E U822とひとつだけ離れた位置にある1023を結ぶ線上に26個体の皿が埋置されたSP922があることが単なる偶然なのか、興味深いものがある。これらの遺構には地震による変形が認められない。

西 区 (第5図)

西区で検出した遺構は、小ピットを含めても20基と少ない。調査区の北半に溝3条があり、ピット群は南西隅に集中している。



第4図 東区遺構分布図



第5図 西区遺構分布図

V 東区の遺構と遺物

1 遺 構

(1) 堀立柱建物跡

現地調査の段階で堀立柱建物跡として確認できたのはSB 1～6の6棟である。掘り方と思われるものは、これらの建物以外にも存在するが、その組み合せを明らかにすることはできなかった。

SB 1 (第6図 図版3)

34～38-10～12区内で検出した東西棟の堀立柱建物跡である。桁行6間、梁行2間の規模をもち、大きさは東西15.00m、南北6.40mを測る。西南柱列のEB 1、15の間に掘り方を確認することができなかったため、もう一間分西にのびる可能性も否定できないが、北面柱列の延長上にも掘り方を確認することはできなかった。

主軸方向はN-9°-Eを測る。掘り方を約5cm掘り下げた段階で径25～40cm程のアタリと思われる土色変化が確認されたものが多いが、これらが、掘り方の底面まで達しているものではなく、柱痕跡と断定することはできなかった。従って、柱間距離を明確にすることはできなかったが、掘り方内部で南面柱列と北面柱列とが対応する数字を探せば、つぎのようになる。EB 1・2とEB 15・14間は2.1m。EB 2・3とEB 14・13間は2.7m、EB 3・4とEB 13・12間は2.7m、EB 4・5とEB 12・11間は2.4m。EB 5・6とEB 11・10間は2.4m、EB 6・7とEB 10・9間は2.4m。また、EB 7・8間、EB 8・9間は3.2mとなる。それぞれの掘り方の規模は以下のようにまとめられる。

EB 1—東西74×南北80cm。不整方形のプランをもち、深さは50cm。堆積土は7層。

EB 2—東西80×南北60cm。橢円形で深さは40cm。堆積土は3層に分かれる。

EB 3—東西60×南北58cm。円形プランで深さは50cm。堆積土は5層に分かれる。

EB 4—東西112×南北84cm。不整な隅丸方形で深さは50cm。堆積土は5層に分かれる。

EB 5—東西60×南北64cm。隅丸方形で深さ50cm。東側がオーバーハングとなり、堆積土は5層に分かれる。F 6から赤焼土器坏の完形資料が出土 (RP 168)。

EB 6—東西64×南北72cm。隅丸方形で深さは42cm。堆積土は4層に分かれる。

EB 7—東西82×南北106cm。不整な橢円形で深さは48cm。堆積土は7層に分かれる。

EB 8—東西50×南北80cm。不整な隅丸方形で深さは50cm。堆積土は5層に分かれる。

EB 9—東西82×南北72cm。隅丸方形で深さは48cm。堆積土は5層に分かれる。

EB 10—東西64×南北64cm。隅丸方形で深さは52cm。堆積土は4層に分かれる。

EB 11—東西85×南北84cm。北東隅がつぶれた方形で深さは57cm。堆積土は5層。

E B 12—東西50×南北50cm以上。東半部が暗渠に切られ、深さは47cm。堆積土は3層。

E B 13—東西68×南北65cm以上。隅丸方形で深さは33cm。堆積土は5層に分かれる。

E B 14—東西62×南北74cm。楕円形で深さは40cm。堆積土は4層に分かれる。

E B 15—東西56×南北76cm。不整楕円形で深さは52cm。堆積土は5層に分かれる。

各掘り方から遺物が出土しているが、その多くは赤焼土器の供膳形態の土器である。第23図1～7が図示可能な土器である。

S B 2 (第7図 図版4)

38～40-9～12区内で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。桁行6間、梁行2間の規模をもち、大きさは南北15.60m、東西6.00mを測る。東面柱列から約1mの距離を隔ててSD74・75があり、西面柱列から約1.6mの距離を隔ててSD79がある。これらの溝はこの建物跡に附属する可能性が高い。なおSD79は掘立柱建物跡SB5の掘り方E B 7・8に切られている。主軸方向はN-11°30'-Eを測る。各掘り方のうちE B 6・10・11・12には東側にオーバーハングの現象が認められることから、地震による変形があったと考えられる。東面柱列と西面柱列の各柱間距離は不規則である。E B 1～16～1までの各柱間距離はつぎのようになる。3.0m、3.6m、2.4m、2.7m、2.7m、2.7m、2.4m、2.7m、3.0m、3.0m、3.0m、2.4m、2.4m、3.0m、2.7m、2.1m。また、各掘り方の規模は以下のとおりである。

E B 1—東西60×南北100cm以上。長方形で深さは22cm。暗渠に切られ、堆積土は2層。

E B 2—東西54×南北61cm。隅丸方形で深さは30cm。堆積土は2層。

E B 3—東西70×南北77cm。隅丸方形で深さは37cm。底面に石があり、堆積土は3層。

E B 4—東西96×南北92cm。略円形で深さは40cm。堆積土は4層。

E B 5—東西67×南北86cm。楕円形で深さは60cm。堆積土は4層。

E B 6—東西84×南北85cm。不整円形で深さは61cm。堆積土は6層。

E B 7—東西63×南北62cm。隅丸方形で深さは49cm。堆積土は4層。

E B 8—東西75×南北80cm。隅丸方形で深さは50cm。堆積土は4層。

E B 9—東西56×南北80cm。不整隅丸方形で深さは67cm。堆積土は3層で底面に小穴。

E B 10—東西68×南北63cm。台形で深さは46cm。堆積土は3層。

E B 11—東西75×南北77cm。不整隅丸方形で深さは53cm。堆積土は4層で底面に柱根残片。

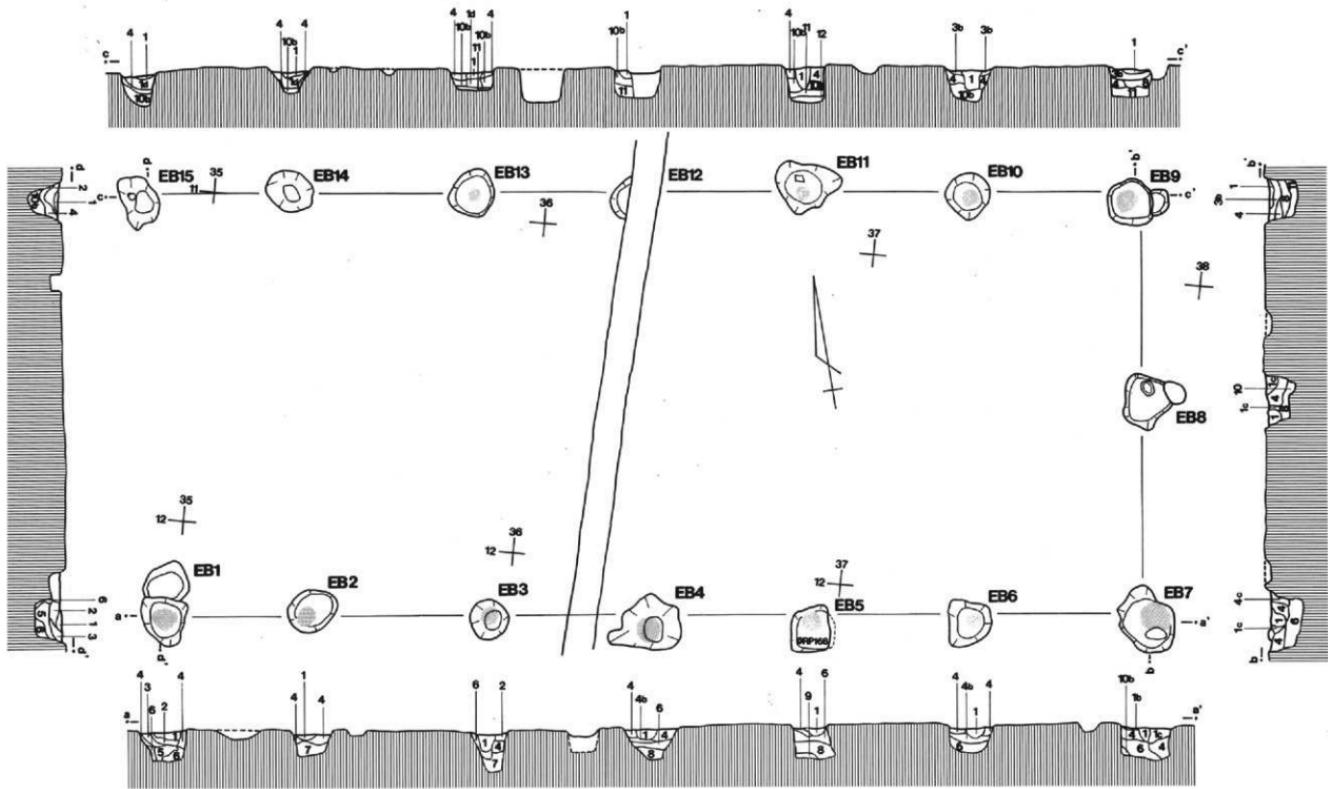
E B 12—東西68×南北69cm。隅丸方形で深さは53cm。堆積土は3層。

E B 13—東西70×南北70cm。隅丸方形で深さ56cm。堆積土は3層。

E B 14—東西80×南北76cm。隅丸方形で深さ37cm。堆積土は4層。

E B 15—東西80×南北85cm。北東隅突出の隅丸方形で深さ50cm。堆積土は3層。

E B 16—東西62×南北115cm。楕円形で深さ34cm。堆積土は4層、1からR P233が出土。

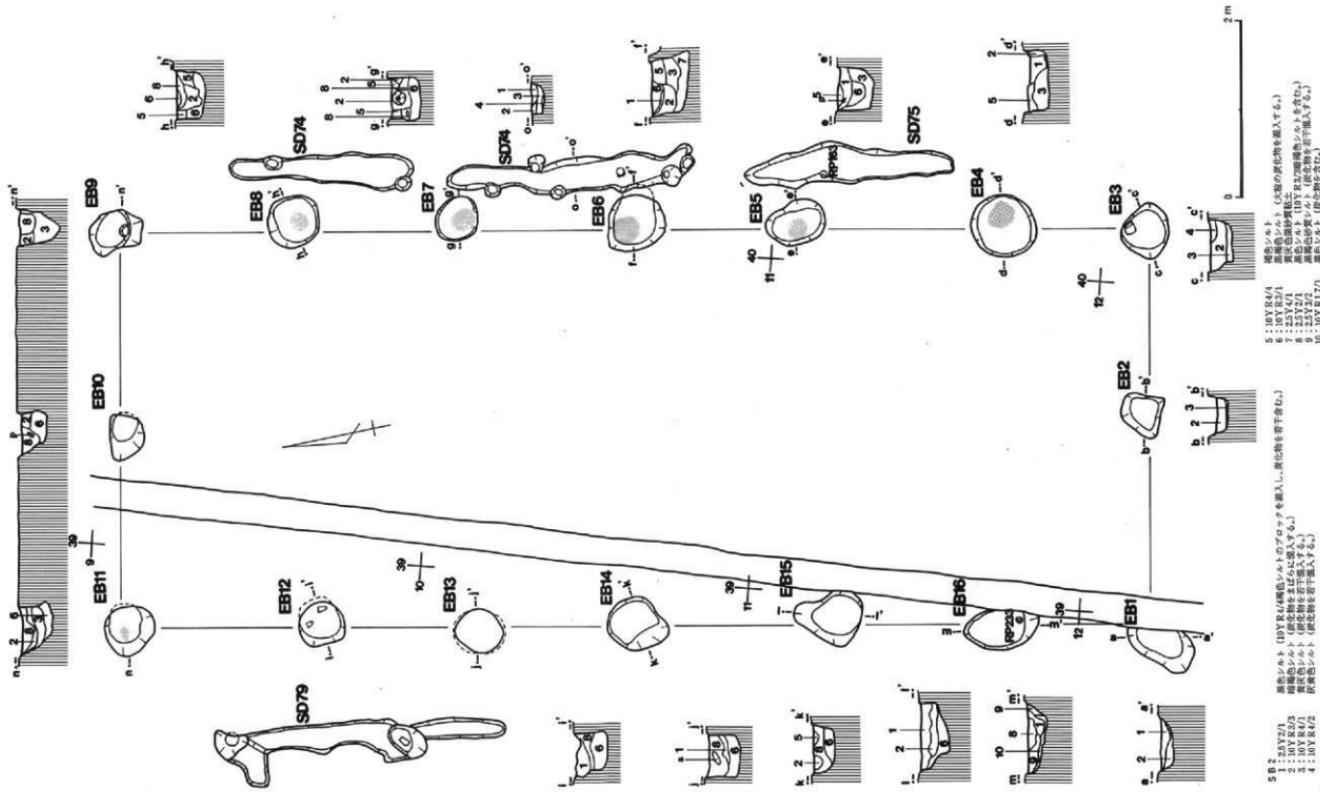


SB1
 1: IBY R2/2 黒色シルト(黒Y/緑褐色シルトの大ブロックを多量。大粒の炭化物を多量含む。)
 1b: IBY R2/2 黒色シルト(火成灰岩をレンズ状に含む。)
 1c: IBY R1/2 黒色シルト(黒Y/緑褐色シルトの大ブロック、火山灰岩を含む。)
 1d: 2SY 1 黒色シルト(火成灰岩を含む。)
 2: 10Y R3/3 緑褐色シルト(炭化物、火山灰岩を多量含む。)
 3: 10Y R2/3 緑オーラーブ褐色シルト(同2/2黒褐色シルトを多量含む。)
 4: 2SY R2/2 黒褐色シルト(火成灰岩を含む。)
 4b: 10Y R2/4 黒褐色シルト(同2/2黒褐色シルトを基底状に含む。)
 4c: 2SY 4/2 黒褐色砂質シルト(炭化物を多量含む。)
 4d: 2SY 3/2 黒褐色砂質シルト(火成灰岩を多量含む。)
 6: 2SY 3/2 黒褐色砂質シルト(火成灰岩を多量含む。)

7: 2SY 4/3 オリーブ褐色砂質シルト(2SY/1黒褐色砂質シルトを帶状に含む。炭化物も若干含む。)
 8: 10Y R1/2 黒色粘土質シルト(2SY/1黒褐色シルトを带状に含み、炭化物を多量含む。)
 9: 2SY 1 黒褐色砂質シルト(2SY/1黒褐色シルトを帶状に含む。炭化物を若干含む。)
 10: 2SY 3/2 黒褐色砂質シルト(10Y R1/2/1黒色シルトの大ブロックを多量含む。炭化物を若干含む。)
 11: 2SY 2/2 黒褐色砂質シルト(同3/1黒褐色粘土質シルトの大ブロックを帯状に含み、若干の炭化物を混入する。)
 12: 5 Y 3/1 黒褐色シルト(大粒の炭化物を含む。は約40cm厚。)
 13: 5 Y 3/2 オリーブ褐色シルト実験室(2SY/2黒褐色シルトのブロックを含む。大粒の炭化物も若干含まれる。)

第6図 SB1平面・断面図

第7図 S B平面・断面図

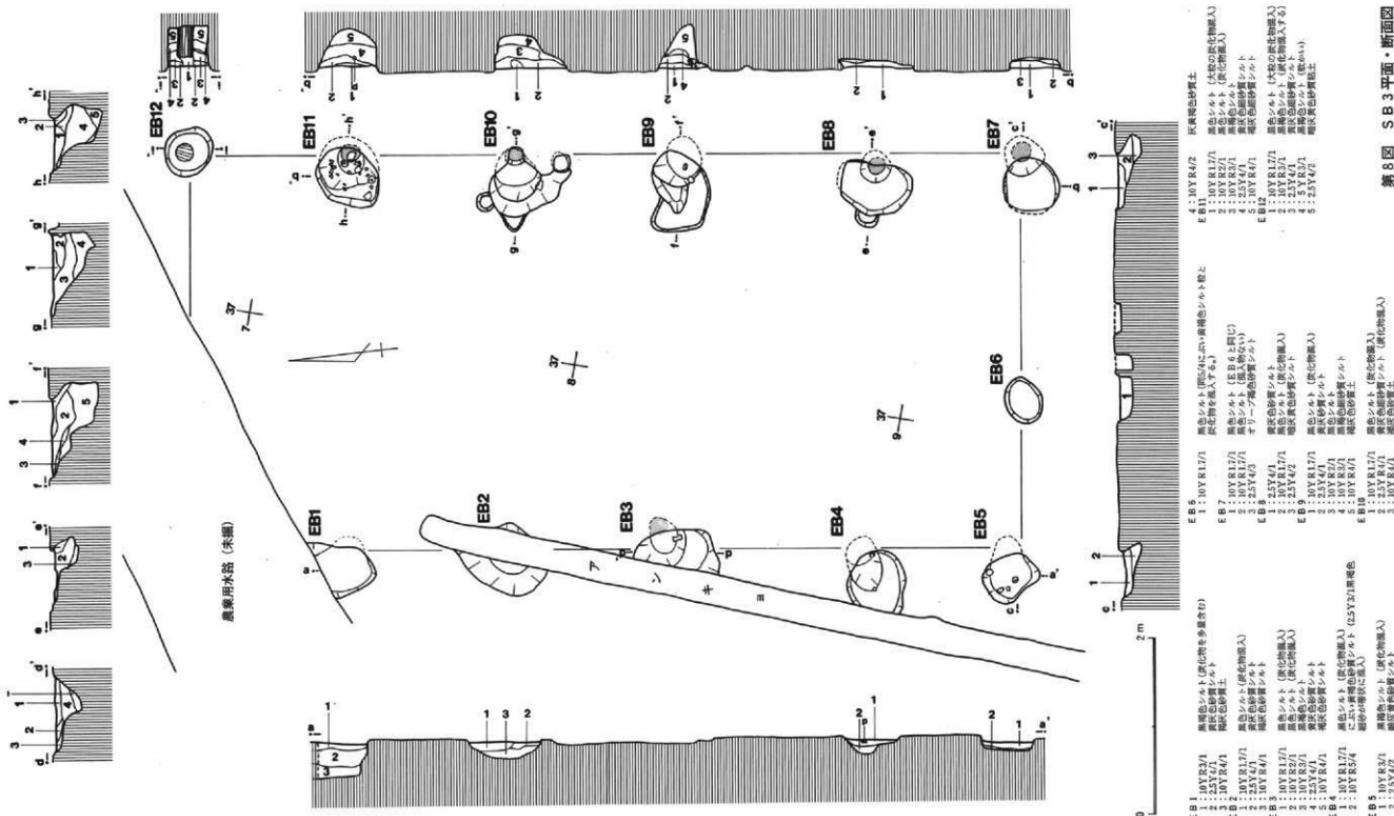


解説シート (EB4(褐色シート)のプロローグを導入し、地化物を導入する。)
褐色色シート (地化物を導入する。)
黒褐色色シート (地化物を導入する。)
黒褐色色シート (地化物を導入する。)
黒褐色色シート (地化物を導入する。)
黒褐色色シート (地化物を導入する。)

5 10 YR 4/4
6 10 YR 3/2
7 10 YR 4/1
8 10 YR 3/2
9 10 YR 4/2
10 10 YR 1/1

解説シート (SD4(褐色シート)のプロローグを導入し、地化物を導入する。)
褐色色シート (地化物を導入する。)
黒褐色色シート (地化物を導入する。)
黒褐色色シート (地化物を導入する。)

5 10 YR 4/4
6 10 YR 3/2
7 10 YR 4/1
8 10 YR 3/2
9 10 YR 4/2
10 10 YR 1/1



第8図 SB3平面・断面図

各掘り方から赤焼土器の供膳形態を中心とする土器片が出土しており、EB3・4・5・10・16から第23図8～12が出土している。

S B 3 (第8図 図版5)

36・7～9区内で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。用水路北側のEB1延長上に掘り方はなく、桁行5間、梁行2間の規模が確定した。南北12.60m、東西6.00mを測る。多くの掘り方が地震による変形を受けており、掘り方の上部は50cm前後、概ね西北西方向にズレているが、底部は東面柱列、西面柱列ともほぼ一直線上に並ぶ。

主軸方向はN-6°30'～Eを測る。柱間距離は東面柱列、西面柱列で対応関係が認められ南から北に向かって、すなわち、EB7～12、EB5～1のそれぞれの距離は、2.10m、3.00m、2.70m、2.40m、2.40mとなっている。

各掘り方の規模や、ズレの方向、傾きは以下のとおりである。

EB1—東西78×南北100cm以上。北半は未掘であり、深さは61cm。との位置からのズレはE-Wの方向で65°～Eの傾きとなっている。堆積土は3層まで確認。

EB2—東西107×南北133cm。東半部は暗渠に切られている。堆積土は3層まで確認。

EB3—東西70×南北120cm以上。平面形は隅丸方形となると思われるが西半部が暗渠に切られている。深さは43cm。との位置からのズレはN-80°～Eの方向で60°～Eの傾斜となっている。堆積土は5層。

EB4—東西100×南北90cm。西部が暗渠に切られる。深さ39cm。との位置からのズレはN-74°～Eの方向で35°Eの傾斜となっている。堆積土は2層。

EB5—東西62×南北79cm。隅丸方形で深さは34cm。との位置からのズレはN-4°～Wの方向で30°Eの傾斜となっている。堆積土は2層。綠釉陶器片が出土した。

EB6—東西70×南北57cm。橢円形で深さ27cm。堆積土は1層。ズレは認められない。

EB7—東西81×南北84cm。隅丸方形で深さ39cm。との位置からのズレはE-Wの方向で45°～Eの傾きをもつ。堆積土は3層。

EB8—東西75×南北107cm。隅丸方形で深さ43cm。との位置からのズレはN-50°～Wの方向で傾きは40°～Eを測る。堆積土は3層。

EB9—東西120×南北80cm。北東隅の張り出す隅丸方形で深さは77cm。との位置からのズレはN-60°～Wで傾きは60°～Eを測る。堆積土は5層に分かれ、2・3層の境界から柱根の残片が出土した。

EB10—東西78×南北83cm。隅丸方形で深さ69cm。との位置からのズレはN-60°～Wで傾きは60°～Eを測る。堆積土は4層に分かれれる。

EB11—東西84×南北100cm。隅丸方形で深さ81cm。との位置からのズレはN-65°～W

で傾きは65°—Eを測る。堆積土は5層に分かれ、1層からR P137~140の赤焼土器、土師器の壺、それに縁釉陶器の水注、皿の破片が出土した。

E B 12—東西69×南北79cm。隅丸方形で深さは70cm。掘り方のズレはなく、中央北寄りに直径24cmの柱根が検出された。堆積土は5層に分かれ。

E B 3・4・5・7・8・9・10・11から図示可能な土器が出土しており、第23図13~第24図32に示した。

S B 4 (第9図 図版6)

34~37—8~9区内で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。桁行5間、梁行2間の規模となり、東西10.8m、南北6.0mを測る。北面柱列の掘り方が地震による変形を受けており、掘り方の上部は概ね西北方向に約30~50cmのズレが認められる。この建物跡は東半部でS B 3と重複するが掘り方同士の切り合いはなく、これだけでは先後関係を捉えることはできない。E B 1とE B 13が特殊埋設遺構のE U 826、E U 822に切られている。

主軸方向はN-10°30'—Eを測る。柱間距離は北面柱列、南面柱列で対応関係が認められ、E B 1・2間、E B 12・13間が2.40mとなるほかは、2.10m等間となる。各掘り方の規模やズレの方向、傾きは以下のとおりである。

E B 1—東西72×南北72cm。隅丸方形で深さは28cm。堆積土は4層。

E B 2—東西56×南北53cm。西南隅に崩れのある隅丸方形。29cmの深さで堆積土は4層。

E B 3—東西33×南北41cm。隅丸方形で深さは26cm。堆積土は4層。高台付小皿が出土。

E B 4—大部分が暗渠に切られており、詳細は不明である。

E B 5—東西66×南北57cm。隅丸方形で東側が大きくオーバーハングする。深さは最深部で52cm。底面の西側にピット、東側に溝が認められる。堆積土は2層。

E B 6—東西54×南北46cm。楕円形で深さは25cm。堆積土は2層。

E B 7—東西40×南北30cm。楕円形で深さ18cm。堆積土は2層。

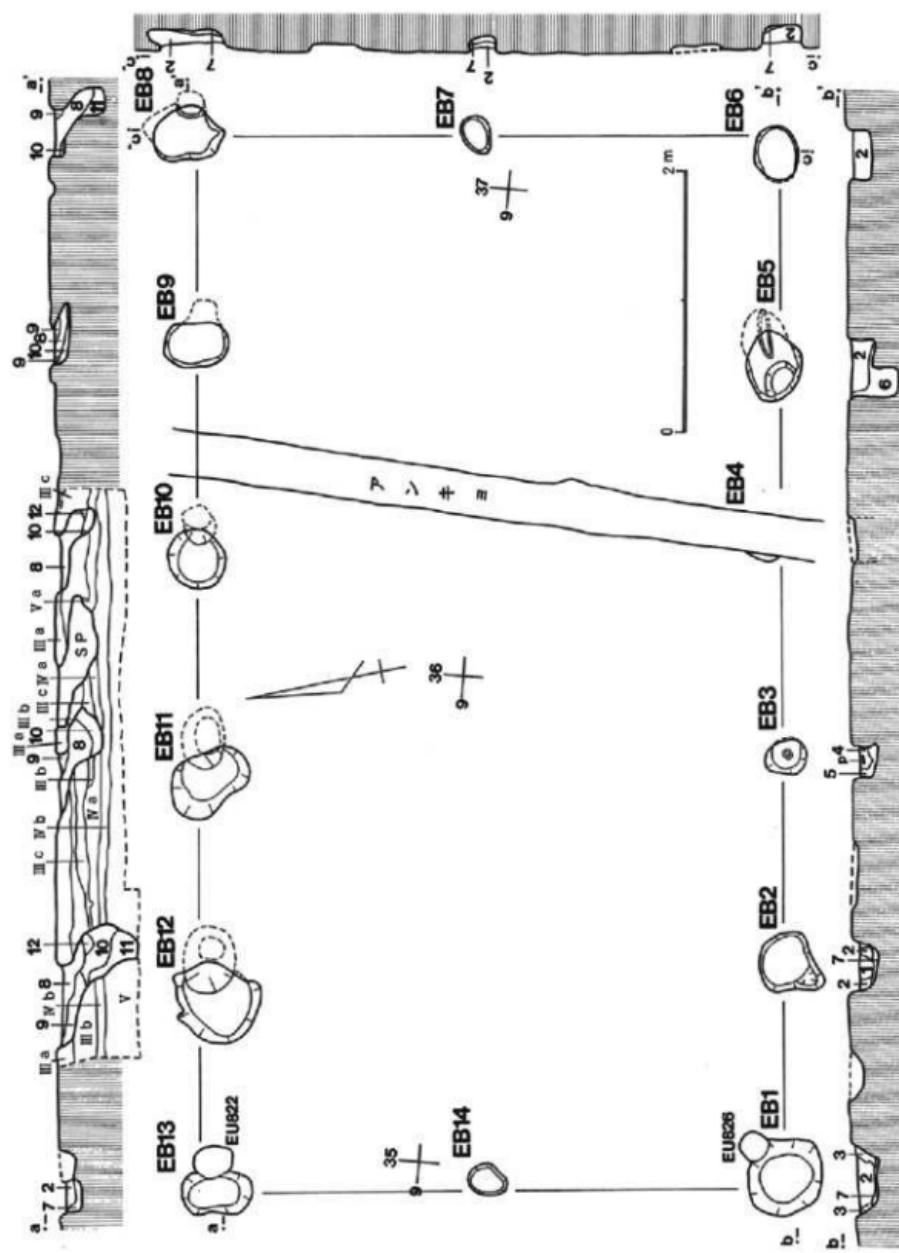
E B 8—東西53×南北62cm。不整隅丸方形で深さは57cm。もとの位置からのズレはN-50°—Wの方向で傾きは45°—Eを測る。堆積土は4層である。

E B 9—東西40×南北67cm。楕円形で深さは20cm。もとの位置からのズレはN-30°—Wの方向で傾きは30°—Eを測る。堆積土は3層である。

S B 4

- | | | |
|-----|------------|--|
| 1: | 2.5Y4/1 | 黒色シルト(炭化物を多量含む。ほぼ純粹。) |
| 2: | 10Y R2/1 | 黒色シルト(2.5Y4/4 オリーブ褐色シルトの小ブロックを多量含む。酸化鉄が付着する。) |
| 3: | 2.5Y3/2 | 黒褐色シルト(同4/3オリーブ褐色シルトを多量含む。) |
| 4: | 10Y R1.7/1 | 黒色砂質シルト(2.5Y4/3オリーブ褐色砂質シルトの大ブロックと砾状をなす。) |
| 5: | 2.5Y2/1 | 黒色シルト(同4/6オリーブ褐色シルトの大ブロックを若干含む。) |
| 6: | 2.5Y3/1 | 黒褐色細砂質シルト(炭化物を多量。10Y R1.7/1黒色シルトの小ブロックを若干含む。) |
| 7: | 2.5Y3/2 | 黒褐色シルト(12.5Y2/1黒色シルト層を帶状に含む。) |
| 8: | 10Y R1.7/ | 黒褐色シルト(大小の炭化物を多量含む。2.5Y4/3オリーブ褐色砂質シルトの大ブロックを若干含む。) |
| 9: | 2.5Y3/2 | 暗オリーブ褐色シルト(8の小ブロックを含み、酸化鉄が若干付着する。) |
| 10: | 2.5Y4/2 | 暗灰黄色細砂(8を若干含み、微細な炭化物も混入する。) |
| 11: | 5 Y3/1 | オリーブ黑色シルト(8のブロックを含む。炭化物も若干含む。) |
| 12: | 10Y4/2 | 暗灰黄色粘土と8が混り合う。 |

第9図 SB4平面・断面図



E B 10—東西60×南北88cm。楕円形で深さ41cm。との位置からのズレはN—45°—Eの方向で傾きは40°—Eを測る。堆積土は3層。

E B 11—東西56×南北88cm。隅丸方形で深さ48cm。との位置からのズレはN—65°—Wの方向で傾きは50°—Eを測る。堆積土は3層である。

E B 12—東西85×南北74cm。不整隅丸方形で深さ84cm。との位置からのズレはN—50°—Wの方向で傾きは55°—Eを測る。堆積土は5層である。

E B 13—東西42×南北72cm。楕円形で深さは23cm。堆積土は5層に分かれる

E B 14—東西34×南北30cm。楕円形で深さは22cm。

E B 3・5・6の各掘り方から図示可能な土器が出土した（第24図33～38）。

S B 5 (第10図 図版7)

37～38—9～13区内で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。桁行7間、梁行2間の規模となり、南北18.60m、東西5.40mを測る。S B 1、S B 2と重複しS B 2に附隨するとみられる溝跡を本建物のE B 7・8が切っている。

主軸方向はN—7°—Eを測る。東面柱列と西面柱列はほぼ対応し、その柱間距離は南から、2.40m、2.10m、3.00m、2.70m、3.00m、3.00m、2.40mとなっている。各掘り方の規模は以下のとおりである。

E B 1—東西54×南北80cm。東側が暗渠に切られる。深さ26cmで堆積土は3層。

E B 2—東西84×南北60cm。楕円形で深さ46cm。南西方向へズレており、堆積土は4層。

E B 3—東西62×南北52cm。S P 454に切られる。深さ47cmで堆積土は2層。

E B 4—東西80×南北92cm。深さ26cmで堆積土は5層。

E B 5—東西54×南北64cm。深さ35cmで堆積土は4層。南西方向へのズレが認められる。

E B 6—東西82×南北84cm。円形で深さ46cm。堆積土は5層に分かれる。

E B 7—東西54×南北72cm。S D 79を切る。深さ38cmで堆積土は3層。

E B 8—東西76×南北62cm。S D 79を切る。深さ38cmで堆積土は3層。

E B 9—東西42×南北58cm。楕円形で深さ26cm。堆積土は3層。

E B 10—東西46×南北78cm。深さ40cmで堆積土は3層。西方へのズレが認められる。

E B 11—東西54×南北84cm。楕円形で深さ52cm。堆積土は5層に分かれる。

E B 12—東西54×南北60cm。円形で深さ34cm。堆積土は3層。

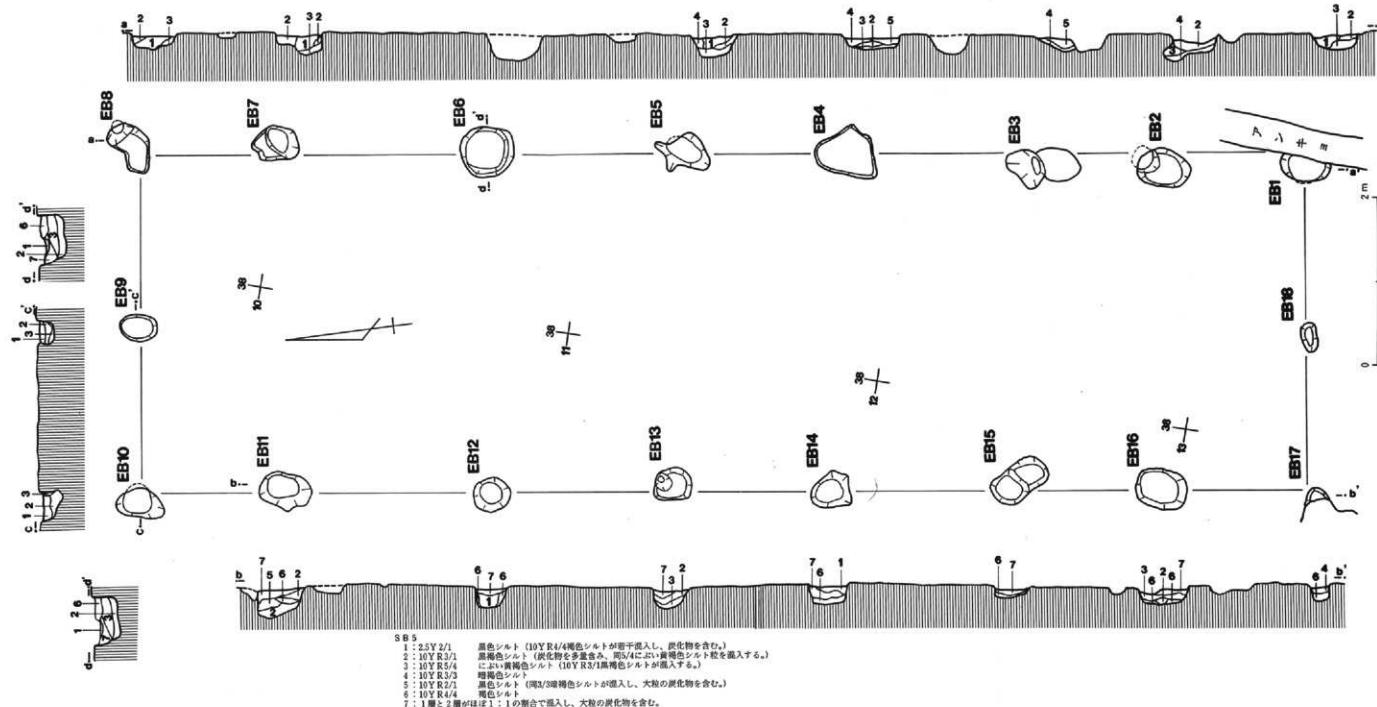
E B 13—東西50×南北57cm。隅丸方形で深さ33cm。堆積土は3層。北東隅にピット。

E B 14—東西52×南北60cm。深さ34cm。堆積土は3層。綠釉陶器片出土。

E B 15—東西50×南北90cm。深さ20cm。堆積土は2層。

E B 16—東西62×南北80cm。隅丸方形で深さ28cm。堆積土は2層。

第10図 S B 5 平面・断面図



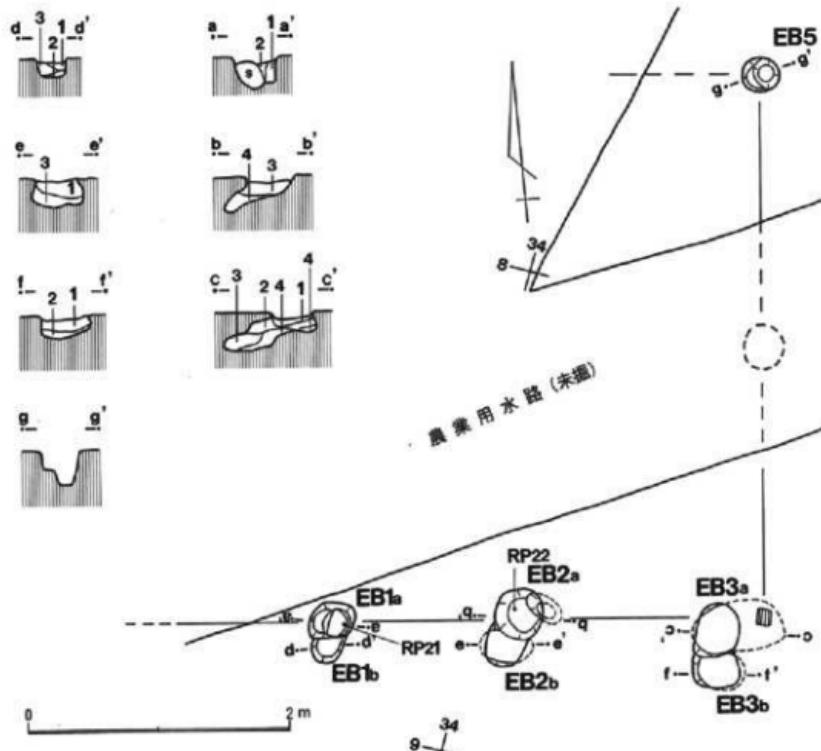
E B 17—東西20×南北40cm以上。S X 631と重複。新旧不明。深さ28cmで堆積土は2層。

E B 18—東西46×南北25cm。深さ14cm。当初はS P 723として登録。

完形土器や図示できる大形の破片は出土しなかったが、赤焼土器の片口の鉢の口縁部資料や緑釉陶器が出土した。

S B 6 (第11図 図版7)

33・34～7・8区内で検出した掘立柱建物跡である。その多くは調査内外となるため、全容は不明であるが、東西棟になると思われる。南面柱列には切り合いが認められ、特に



E B 1 a
1 : 5 Y4/1 灰色シルト (炭化物を若干混入する。)
2 : 10 Y R1.7/1 黒色シルト (1を混入する。)

E B 2 a
3 : 5 Y3/1 オリーブ黒色細砂 (5 Y4/1灰色粘土を含む。)
4 : 5 Y4/1 灰色シルト (2.5 Y2/1黑色粘土質シルトと炭化物を多量混入。)

E B 3 a
1 : E B 1 a の 1 と同じ
2 : E B 1 a の 2 と同じ
3 : E B 2 a の 3 と同じ
4 : E B 2 a の 4 と同じ

E B 1 b, 2 b
1 : 2.5 Y3/1
2 : 5 Y3/1

E B 2 b
3 : 5 Y4/1
E B 3 b
1 : 10 Y R4/1
2 : 2.5 Y4/1

黒褐色シルト (10 Y R1.7/1黑色粘土質シルトを多量混入する。)
オリーブ黒色粘土質シルト (10 Y R1.7/1黑色粘土質シルトと10 Y R5/2オリーブ灰色シルト一火山灰一を混入する。)
灰色粘土質シルト (炭化物を混入する。)

褐色シルト (10 Y R3/1黑褐色シルトが混入する。)
黄灰色細砂質シルト

第11図 S B 6 平面・断面図

新しい方の掘り方群は地震による変形が顕著である。EB 1a・2a、2a・3a間の距離は2.10m、EB 3・5間は5.40mを測る。

主軸方向はN-5°-Eを測る。各掘り方の規模、ズレの方向等は以下のとおりである。

EB 1a - 東西45×南北35cm、掘り方東寄りに32×22cmの石がある。隅丸方形で深さは25cm。堆積土は2層に分かれる。赤焼土器の小形皿（RP21）が出土した。

EB 2a - 東西48×南北52cm。隅丸方形で深さは36cm。との位置からのズレはN-80°-Eの方向で傾きは39°-Eを測る。赤焼土器の小形皿（RP22）が出土。

EB 3a - 東西44×南北56cm。楕円形で深さは40cm。底面に一辺15cmの角柱が残り、この位置から、掘り方の中央までのズレはN-77°-Eで傾きは34°-Eを測る。堆積土は4層。

EB 5 - 東西38×南北36cm。東側が一段低く、この部分の深さが36cmである。

EB 1b - 東西32×南北35cm以上。楕円形で深さ20cm。堆積土は3層。

EB 2b - 東西40×南北44cm。隅丸方形で深さは30cm。堆積土は2層。

EB 3b - 東西46×南北42cm。隅丸方形で深さ42cm。堆積土は2層。

これらの掘り方から出土した遺物には赤焼土器と土師器があるが、図示できたものは、いずれも赤焼土器の小形皿と高台付の小形皿である（第24図40～45）。

(2) 土 壤

土壤は18基検出した。調査区の周辺部に分布する傾向があり、掘立柱建物跡の内部にあるのは、完形土器を埋置したSK34だけである。

SK21 (第12図)

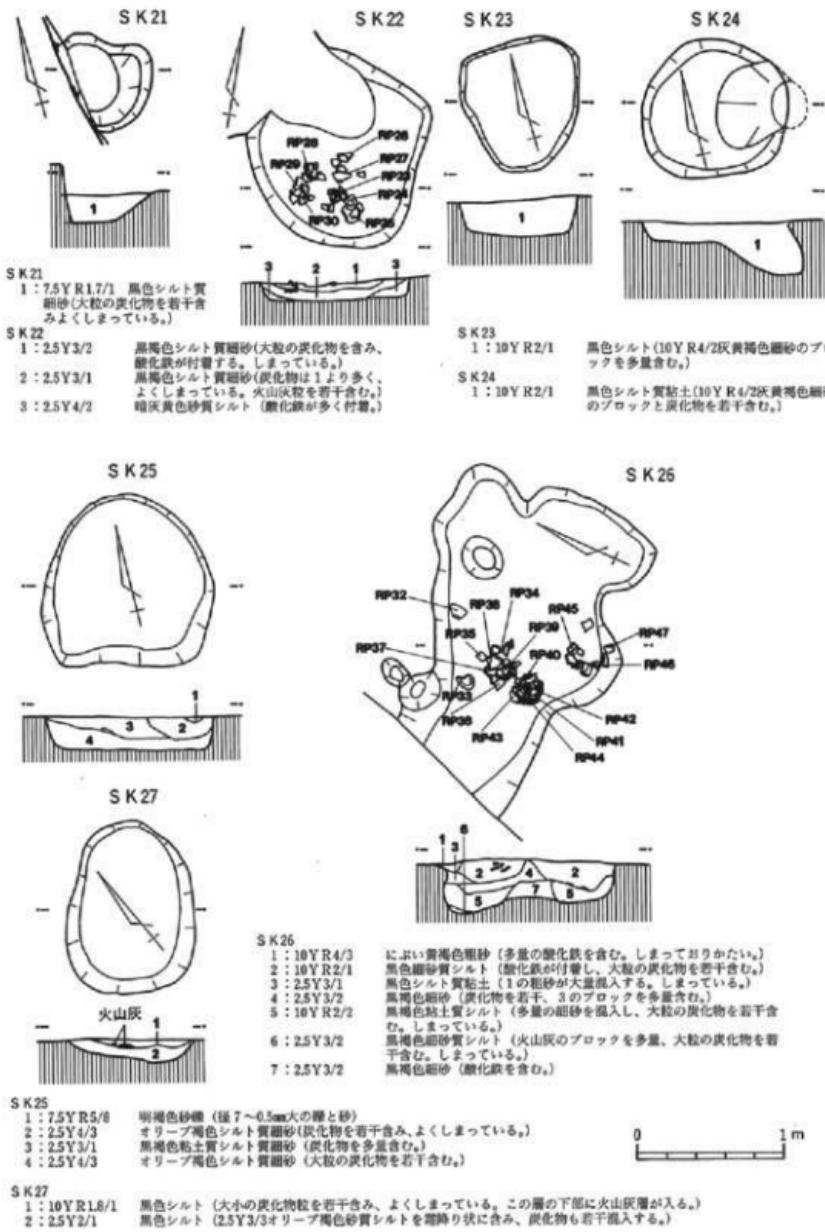
34-12区の調査区西端で検出した土壤である。西部は調査区外となる。規模は東西58cm以上、南北70cmで、確認面からの深さは19cmを測る。底面は平坦で堆積土は1層である。第24図46ほかの土器が出土した。

SK22 (第12図 図版8)

34-10・11区で検出した土壤で北西部が新しい時期の落込みによって切られている。東西128cm、南北139cmの隅丸方形のプランをもち、確認面からの深さは12cmを測る。底面は平坦であり、堆積土は3層に分けられ、火山灰粒を含む2層を中心にRP23-30の土師器・赤焼土器が出土した。

SK23 (第12図)

34-10区で検出した土壤でSK22の北東に近接する。東西84cm、南北89cmの不整円形のプランとなり、確認面からの深さは30cmを測る。底面はほぼ平坦で、堆積土は単一層である。赤焼土器・須恵器・土師器の破片が出土したが、実測できるものはなかった。



第12図 土壌平面・断面図(1)

S K24 (第12図)

34—9区で検出した土壌でS D90に近接する。東西100cm、南北93cmの不整円形のプランをもち、東側が一段低くなり、オーバーハングの現象を見せてる。地震による変形の可能性がある。確認面からの深さは西部で13cm、東部で35cmを測る。堆積土は単一層で、第24・25図の54・55をはじめ、多数の土器片が出土した。

S K25 (第12図)

35—10区で検出した土壌である。東西116cm、南北115cmの不整円形のプランをもち、確認面からの深さは23cmを測る。底面は平坦で、堆積土は4層に分けられた。赤焼土器・須恵器・土師器の破片が出土したが実測できるものはなかった。

S K26 (第12図 図版8)

36—12区で検出した土壌で西部が暗渠で切られている。東西206cm以上、南北160cmを測る東西に長い不規則なかたちとなり、確認面からの深さは浅いところで22cm、深いところで35cmを測り、底面は凹凸をもつ。底面北東側と北辺にピットがある。堆積土は7層に分かれ、6層に火山灰のブロックを多量に含んでいる。2・4・5の各層からR P32~47として登録した一括土器が出土した。これらは壊れたものが廃棄されたものと考えられる。

S K27 (第12図)

36・37—12区内で検出した土壌である。東西87cm、南北116cmの楕円形プランで、確認面からの深さは11~16cmを測る。底面はやや凹凸があり、堆積土は2層に分かれる。1層の下底にはほぼ純粹な火山灰層があり、この上位から赤焼土器の高台付皿が出土した。

S K28 (第13図 図版8)

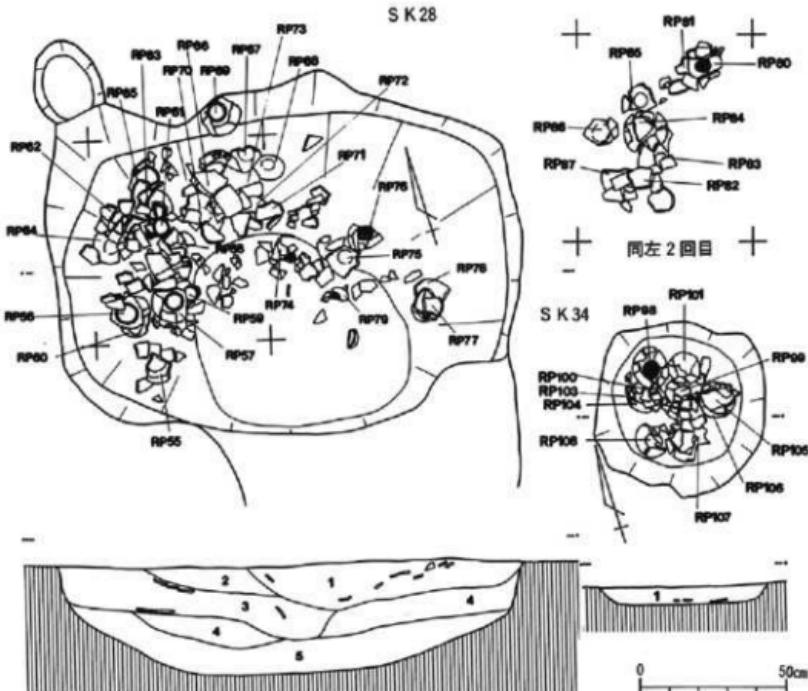
37—12区で検出した土壌で、S K29を切り、S K27の東に近接する。東西160cm×南北118cmの長方形プランで、確認面からの深さは37cmを測る。底面は鍋底状を呈し、堆積土は5層に分かれる。3層の底部と4層中にはほぼ純粹な火山灰層が認められる。1層と3層からR P55~87の33個体の登録土器が出土したが、土器片の接合によって実測可能となったものは45個体にのぼった。

S K29 (第14図)

37—12・13区内で検出した土壌で、北部がS K28によって切られている。東西146cm、南北302cm以上の南北に長い不規則なかたちとなり、中央部東半が一段低くなってしまっており、平面での確認はできなかったが、三基の切り合いの可能性もある。底面の西半部は平坦、一段低い東半部は鍋底状をなす。堆積土は3層であり、赤焼土器壺2個体等が出土した。

S K31 (第13図 図版8)

40—13区で検出した土壌である。東西216cm×南北182cmの隅丸方形を呈し、確認面から



SK 28
 1 : 10 YR 2/1 黒色砂質シルト（一透水層、大粒の炭化物を多量、火山灰粒を若干含む。しまっている。）
 2 : 2.5 Y 3/2 黒褐色シルト（火山灰を網状に多量含む。）
 3 : 2.5 Y 3/1 黒褐色粘土質シルト（細かい火山灰を多量、一透水層も多量含む。4の基本土が網状に混入する。しまっており、この層の下部にはほぼ乾燥な火山層がある。）
 4 : 2.5 Y 4/2 暗灰黄色細砂（3の基本土を網状に含み、間に火山層をはさむ。炭化物を若干含む。）
 5 : 2.5 Y 3/3 暗オリーブ褐色砂質細砂（西半部はグライ化—5 Y 3/1オリーブ黒色—し、筋土っぽい。）

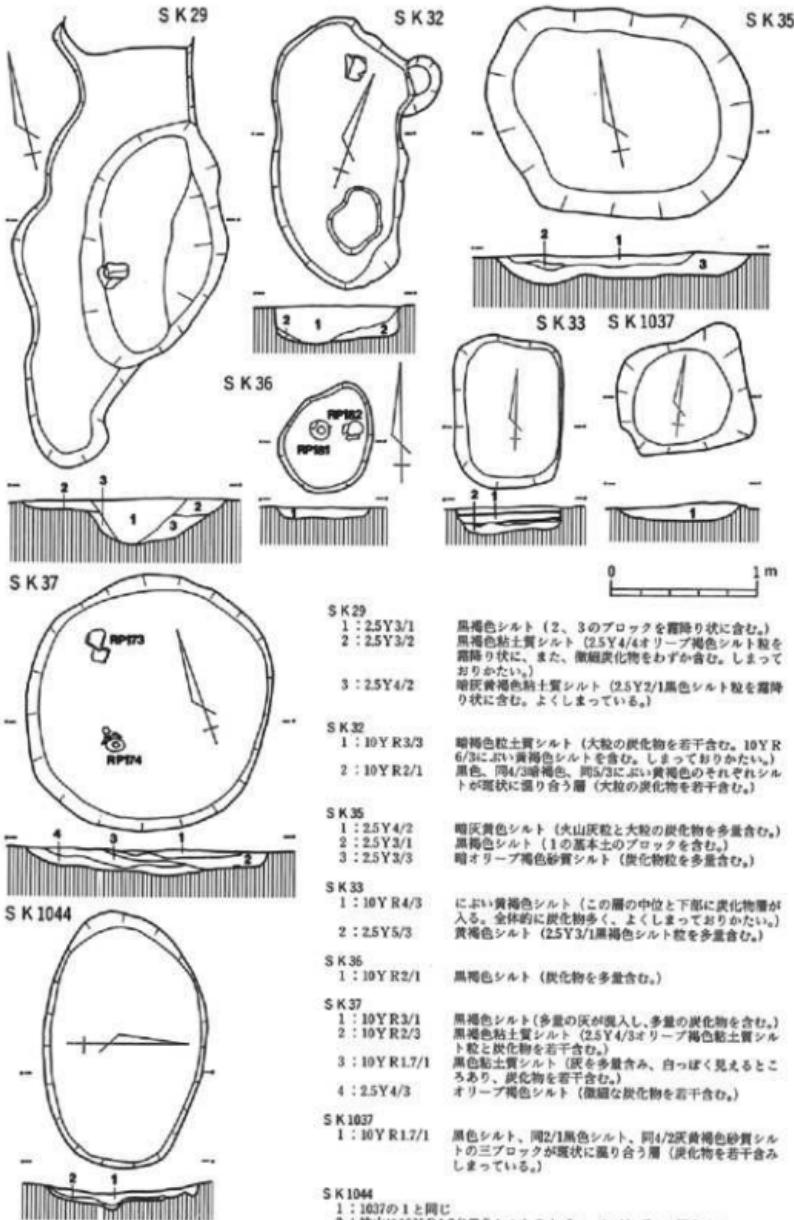
SK 34
 1 : 10 Y R 1/1 黒色粘土質シルト（炭化物を若干含み、大粒の粗砂を若干混入する。）

SK 31
 1 : RP23 RP24 RP25 RP26 RP27 RP28
 2 : RP29 RP30 RP31 RP32 RP33
 3 : RP34 RP35 RP36 RP37 RP38
 4 : RP39 RP40 RP41 RP42 RP43
 5 : RP44 RP45 RP46 RP47 RP48

SK 31
 1 : 10 Y R 2/3 黒褐色シルト（大粒の炭化物を多量含む。よくしまっておりたい。）
 2 : 10 Y R 7/1 灰白色シルト（ほほ純粋な灰の層。小さな炭化物を多量含む。火山灰ではない。）
 3 : 10 Y R 4/3 4 : 10 Y R 2/1 5 : 2.5 Y 4/3 5 : 2.5 Y 4/3
 5 : 2.5 Y 4/3
 黑色粘土質シルト（炭化物を多量含む。オリーブ褐色砂質シルト（炭化物を若干含む。）

1 m

第13図 土壌平面・断面図(2)



第14図 土壌平面・断面図(3)

の深さは10~20cmを測る。底面はほぼ平坦であるが、中央が凹んでいる。堆積土は5層に分かれ、このうち、2層はほぼ純粋な木灰の層となる。1層と4層中からR P 121~133の一括土器が出土した。

S K 32 (第14図)

40~12・13区内で検出した土壌で、S K 31の北東に近接する。東西93cm、南北185cmの長楕円形のプランをもつ。確認面からの深さは21~26cmで、底面にやや凹凸があり、全周で急な立ち上がりとなる。堆積土は2層に分かれ、1層から壺・高台付壺が出土した。

S K 33 (第14図)

40・41~12区内で検出した隅丸方形のプランをもつ土壌である。東西73cm、南北105cm、確認面からの深さは15~19cmを測る。底面はやや凹凸があり、急な立ち上がりとなる。堆積土は2層で、1層の中位と下部に炭化物層が入っている。出土した土器は破片だけである。

S K 34 (第13図 図版8)

37~8区で検出した隅丸方形のプランをもつ土壌である。東西57×南北58cm、確認面からの深さは6cmを測る。堆積土は1層で底面に接する状態でR P 98~110の赤焼土器壺が出土した。1個体が伏せられた状態であったが、他はすべて内面を上にした状態で埋置されたとも考えられる。

S K 35 (第14図)

42~9区で検出された東西180cm、南北142cmの隅丸方形のプランをもつ土壌である。確認面からの深さは12~20cmで、底面は凹凸がある。堆積土は3層に分けられた。

S K 36 (第14図)

42~9区で検出した東西60cm、南北79cmの不整円形の土壌である。確認面からの深さは8cmで、底面は平坦である。堆積土は1層で、赤焼土器の壺・甕が5個体出土した。

S K 37 (第14図 図版8)

44~9区で検出した東西165cm、南北196cmの略円形の土壌である。確認面からの深さは10~18cmを測り、堆積土は4層に分かれ。底面は凹凸があり、3層から土師器鉢・赤焼土器壺などが出土した。

S K 1037 (第14図)

36~5区で検出した東西90cm、南北74cmの隅丸方形の土壌で、確認面からの深さは7~12cmを測る。全周で緩かな立ち上がりとなり、堆積土は1層である。遺物は破片のみ。

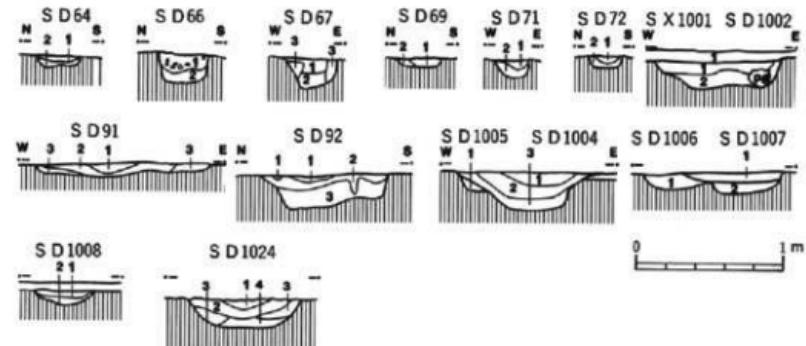
S K 1044 (第14図)

35~36~5区で検出した東西193cm、南北110cmの楕円形の土壌である。確認面からの深さは5~11cmで底面には凹凸がある。赤焼土器片が若干出土した。

(3) 溝状遺構 (第4・15図 表-1・2)

東区で検出、登録した溝状遺構は62条である。このうち、SD1026は近代の溝であり、古代に遡るものは61条である。多くの溝は掘立柱建物跡の主軸に平行もしくは直交する走向をもつことから、その関連も想定できるが、附隨すると判断できたものは少ない。

堆積土に火山灰が含まれるもの8条あり、含まれ方によって、次のように分けられる。堆積土の上層に純粋な火山灰層があるもの(SD91・92)。堆積土の中位に純粋な火山灰層があるもの(SD78)。堆積土中に人ががからむ両堆積と考えられる火山灰ブロックが含まれるもの(SD66・67・86・87・1024)。これらは、おそらく、この順番で先後関係があると考えられる。それぞれの溝状遺構の概要は表-1・2にまとめた。



SD64	1 : 10 Y R 1.7 / 1	黒色シルト (2.5Y4/4オリーブ褐色シルト塊が斑状に混入する。)
	2 : 2.5Y3/3	暗オリーブ褐色シルト (炭化物を若干含む。)
SD66	1 : 10 Y R 2/1	黒色シルト (大小の炭化物を多量、一層土層を多量含む。2.5Y4/3オリーブ褐色粘土質シルトの小ブロックを階段状に含む。火山灰ブロックを混入。)
	2 : 2.5Y4/4	オリーブ褐色シルト質細砂 (10Y R2/1黑色シルト粒と炭化物を階段状に含む。炭化物も若干。)
SD67	1 : 10 Y R 3/2	黒褐色シルト (径3~5mm大的火山灰を多量含む。2.5Y3/2暗オリーブ褐色をシルト塊を斑状に含む。)
	2 : 2.5Y4/2	暗灰黄色シルト (2.5Y3/1黒褐色粘土質シルトの大ブロックを斑状に含む。炭化物も若干。)
	3 : 10 Y R 3/4	暗褐色砂質シルト (炭化物を若干含む。)
SD69	1 : 2.5Y3/2黒褐色	同4/4オリーブ褐色細砂質シルトが等量混り合った中に、同4/2暗灰色シルトの小ブロックが混入。
	2 : 2.5Y4/3	オリーブ褐色細砂
SD71	1 : 10 Y R 3/1	黒褐色粘土質シルト (微細度炭化物を多量含む)
	2 : 10 Y R 3/3	暗褐色シルト (酸化鉄の付着が著しい。)
SD72	1 : 2.5Y3/3	暗オリーブ褐色砂質シルト (炭化物を含む。)
	2 : 2.5Y3/2	暗灰黄色シルト (火山灰層、炭化物を含む)
SD91	1 : 2.5Y3/3	灰黄色シルト (ほぼ鶴鱈な火山灰)
	2 : 2.5Y3/2	黒褐色シルト (火山灰層、炭化物を含む)
	3 : 2.5Y3/3	暗オリーブ褐色粘土質シルト
SD92	1 : 10 Y R 8/1	灰白色シルト (純粋な火山灰層)
	2 : 2.5Y4/3	オリーブ褐色シルト (大粒の炭化物を若干含む)
S X1001	3 : 2.5Y3/2	黒褐色粘土質シルト (微細度炭化物を若干含む)
SD1002	1 : 10 Y R 3/1	黒褐色シルト (炭化物を混入する。)
S X1005	1 : 10 Y R 3/1	暗褐色シルト (炭化物を混入する。)
SD1004	2 : 10 Y R 4/2	暗灰黄色シルト (炭化物を若干含む。)
S D1005	1 : 10 Y R 2/2	暗褐色シルト
S D1004	2 : 10 Y R 4/2	灰褐色シルト
S D1005	2 : 10 Y R 4/1	暗褐色シルト (10Y R5/1褐色シルト一火山灰一が混入。)
S D1006	3 : 10 Y R 2/1	黒色シルト (大粒の炭化物が混入。)
S D1006	1 : 10 Y R 5/4	に近い黄褐色シルト
S D1007	1 : 10 Y R 4/2	灰褐色シルト (炭化物が混入する。)
	2 : 10 Y R 5/4	に近い黄褐色シルト
S D1008	1 : 10 Y R 4/2	黒褐色シルト (大粒の炭化物を混入)
	2 : 10 Y R 5/4	に近い黄褐色シルト
S D1024	1 : 10 Y R 3/2	黒褐色シルト (同1.7/1黑色シルト、及び火山灰の小ブロックがわずか混入。)
	2 : 基本的には1と同じだが黑色シルトの割合が多く、火山灰のブロックも大きい。	2 : と同じだが火山灰を含まない。
	3 : 2と同じだが火山灰を含まない。	4 : 地面に3層の亂れる層。

第15図 溝状遺構断面図

表-1 溝状遺構一覧(1)

単位: cm

登録番号	検出地区	全長	幅	深さ	底面	走向	出土遺物	備考
51	35-13	(245)	12~31	3~6	鍋底	N-82'-W		10YR2/1黒色砂質シルト。S D55と重複。新旧不明。
52	35-13	(214)	14~26	4~8	鍋底	N-77'-W		10YR2/2黒褐色シルト。
53	35-13	138	21	9	鍋底	N-62'-W	158	10YR1.7/1黒色シルト。
54	35-13	(170)	39~47	3	平坦	N-84'-W		10YR3/2黒褐色シルト。S D55と重複。新旧不明。
55	35-13	(316)	31~100	3~5	凹凸あり	N-8'-E		2.5Y4/4オリーブ褐色シルト。S K173と重複。新旧不明。
56	35-13	(154)	8~19	5	平坦	N-84'-W		10YR2/3黒褐色シルト。
57	35-12・13	(274)	13~47	9~13	凹凸あり	N-75'-W		2.5Y4/2黒褐色砂質シルト。S K173と重複。新旧不明。
58	35-12	300	20~48	5~8	凹凸あり	—	159	10YR2/1黒色シルト。S X173と重複。新旧不明。
59	35-11・12	150	42~81	9	平坦	N-S		10YR2/1黒色シルト。
60	35-13	76	16~20	10~13	鍋底	N-82'-W	160	
61	33-9・10	(231)	18	4~8	鍋底	E-W		2.5Y3/2黒褐色シルト。
62	33-9	(121)	20	4~6	鍋底	E-W		2.5Y3/2黒褐色シルト。
63	37-12	90	16~33	3	平坦	N-72'-W	161	
64	35-10	161	29~42	5~6	凹凸あり	N-66'-W		
65	35-10	91	8~23	9	鍋底	N-76'-W		2.5Y3/300オリーブ褐色砂質シルト。
66	36-12	260	25~38	7~12	平坦	N-70'-W	162~166	
67	37-13	105	27~34	10	平坦	N-4'-W		
68	39-10・11	67	14~19	8	平坦	N-32'-E		
69	36・37-10	(436)	35~38	5~7	平坦	N-82'-W		S B1に切られる。
70	36・37-9・10	434	35~42	8~13	凹凸あり	N-79'-W		骨片出土。
71	37-12	150	18~25	9~14	凹凸あり	N-6'-E		
72	35-10	(100)	16~24	4~7	平坦	N-81'-W		東部S X636に切られる。
74	40-9 40-10	273 374	27~52 28~48	14~16 16~18	平坦 平坦	N-11'-E N-11'-E	167	
75	40-11	310	31~58	17~19	平坦	N-11'-E	168~169	
76	39・40-11	500	26~34	18	鍋底	N-49'-W	170~171	S B2に切られる。
77	39-11	296	33~49	4~10	凹凸あり	N-79'-W		
78	38~39-9	602	33~54	20~31	鍋底	N-78'-W	172~173	S D79に切られる。2層が火山灰。
79	38-9・10	438	29~44	8~10	平坦	N-11'-E	174	10YR2/1黒色シルト。S D78を2通り、S B3に切られる。
80	36-13	256	15~38	5~8	凹凸あり	N-S		2.5Y4/3オリーブ褐色シルト。
82	36-10	172	53~68	3~28	凹凸あり	N-10'-E	175~179	2.5Y3/2黒褐色シルト。層か、暗灰黄色シルトが混在する。
83	38-10	169	34~48	5~13	凹凸あり	N-9'-E		

表-2 溝状遺構一覧(2)

単位:cm

登録番号	検出地区	全長	幅	深さ	底面	走向	出土遺物	備考
84	35~37-8	474 590	38 50~105	15~19 8~10	鍋底	N-77'-W		2.5Y3/2黒褐色シルト。 S D92に切られる。
85	35-8	306	32~63	5~8	鍋底	N-76'-W		10Y R3/2暗褐色粘土質シルト。 S B4、S B12に切られる。
86	34+35-8	485	38	5~7	凹凸あり	N-83'-W		5Y3/1オリーブ黒色シルト(火山灰含)。
87	34+35-8	(150)	27	4~5	鍋底	N-84'-W		5Y3/1オリーブ黒色シルト(火山灰含)。
88	41-13	270	29~33	10~21	凹凸あり	N-81'-W		
89	40+41-11+12	177	30	10~11	平坦	N-53'-W		
90	34-9+10	(168)	60	18~23	凹凸あり	N-83'-W	180	10Y R1.7/1黒色粘土質シルト。
91	38-7+8	574	21~110	6~9	凹凸あり	—		1番は純粹火山灰層。
92	34~38-9	1738	48~113	16~27	凹凸あり	N-82'-W	180~187	1番は純粹火山灰層。S B3+4に切られる。
93	36-8+9	462	16~24	8~9	鍋底	N-11'-E		5Yオリーブ褐色砂質シルト。S D84を切る。
94	35+36-7	326	17~63	4~13	中央部が一段盛りくな。	N-83'-W	188~190	10Y R5/2黒褐色粘土質シルト。
95	34-8+9	(1512)	20	2~33	北半中央部 南北半半幅	N-3'-E		S X239に切られる。北部除外。
96	42-8+9	(950)	25~59	15~8	鍋底	N-11'-E	191	10Y R4/2褐褐色シルト。 S X1001との断面は不明。
97	43+44-9~12	(1930)	105~128	9~16	平坦	N-25'-E	192~202	
98	40-6+7	630	30~42	8~13	鍋底	N-30'-E		S X960と重複。削平す。 S X1001に切られる。
99	33-9	346	25	12~14	鍋底	N-87'-W		2.5Y3/2黒褐色シルト。
1002	43-6+8	964	77~100	21~46	鍋底	N-15'-E	204~211	S X1001に切られる。
1004	40-6+7	390	80~120	21~33	凹凸あり	N-4'-E	213~222	S X1001、S D1005を切る。
1005	40-7+8	820	22~31	5	平坦	N-30'-E		S X1001、S D1004を切られる。
1006	41-7	225	37	3	平坦	N-28'-E		S X1001を切り。S D1007に切られる。
1007	41-6+7	880	41~68	5~25	平坦	N-5'-E		S X1001、S D1005、S D1006を切る。
1008	41-6+8	912	23~150	3~10	鍋底	N-27'-E		S X1001、S D1007に切られる。
1024	35~37-5	756	43~82	18~25	鍋底	N-86'-W	223~224	
1025	36-7+5+6	1046	23~33	4~8	平坦	N-74'-E		10Y R3/2黒褐色砂質シルト。
1026	35~37-5+7	(2120)	20~51	16~42	平坦	N-74'-E	225	近代
1030	36-5	74	37	5	平坦	N-76'-E		10Y R2/1黒色シルト。
1038	36-5	155	22~36	5~7	鍋底	N-74'-E		10Y R2/1黒色シルト。
1046	36-6	237	17~20	7~9	平坦	N-84'-E		10Y R2/1黒色シルト。
1077	34+5-6	(445)	24~110	6~11	凹凸あり	N-75'-E		10Y R1.7/1黒色シルト。
1083	35-6+7	(200)	33~43	10	平坦	N-5'-E		10Y R2/2褐褐色シルト。 火山灰を含む。
1085	36-5	(190)	31~76	9	平坦	N-26'-W		10Y R2/1黒色シルト。S D1024を切り。1025に切られる。

(4) 特殊埋設遺構

今回の調査では本県では今までに例をみない特殊な遺構、すなわちひとつのピットの中に赤焼土器甕・壺・小形皿、さらに小礫がセットとなって埋納されているという極めて珍しい遺構を検出した。このいわゆる特殊埋設遺構は計6基確認された。

埋設遺構を検出した地区はX-35~37、Y-8~9の遺跡東区北西隅部分の建物跡周辺に限定されている。ピットの規模は径30cm前後、確認面からの深さは20cm前後である。

土器の埋設状況をみると、6基ともほぼ同一パターンを示し、甕が1個体ピット内に埋められ、甕の内外に数枚の小形皿と壺もしくは高台付壺1個体、小礫10個前後が1セットで出土している。しかし遺物の向きや重なり方に規則性は認められない。

以下6基の特殊埋設遺構の検出状況について簡潔に述べる。

E U822 (第16図 図版9)

34-8区で検出された。ピットは径30×24cmの梢円形、確認面からの深さは約12cmである。西接するS B 4 E B 13を切る。覆土は1層のみである。

埋設されていたのは赤焼土器甕が1個体、甕内部に小形皿4枚、壺1個体、甕とピットの間の隙間に小形皿3枚、さらに小礫が甕内部に3個、外部に7個の計10個である。

甕は口径約19cmでほぼ完形をなし、小形皿も半数以上完形である。壺は甕内底部の小礫の上に石を覆うように伏せた状態で入っている。またR P93-5の小形皿には口縁部内側に煤が付着している。

E U823 (第16図 図版9)

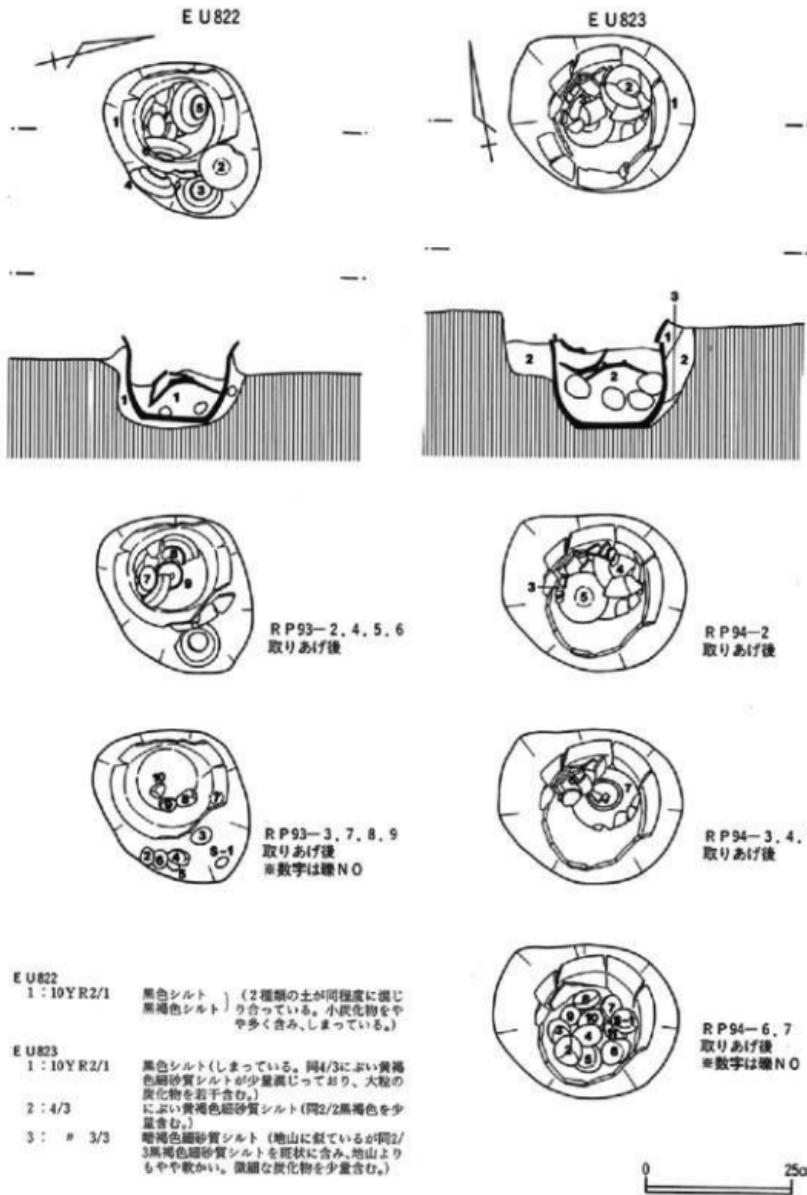
35-9区にある。ほぼ円形の平面形をもち、径32×26cm、深さ20cmで覆土は3層である。甕の内部に小形皿8枚、高台付壺1個体が納められていた。さらに甕の底面を埋めるようにやや大きめの礫が12個きっちりと入っていた。ピット内からの遺物・礫の出土はない。

甕はほぼ完形で、口径22cmと6基中最大である。皿は完形品が少ない。高台付壺は823からのみ出土しているが壺よりもひとまわり小型であり、やはり礫の直上に伏せて入れられていた。

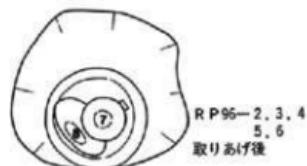
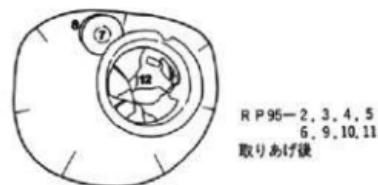
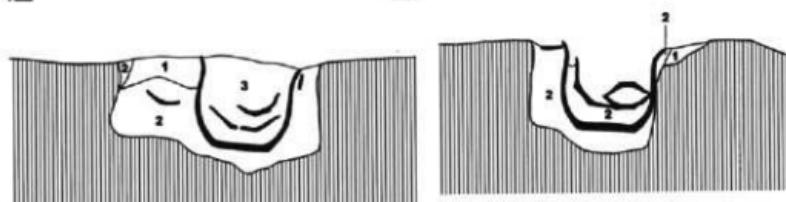
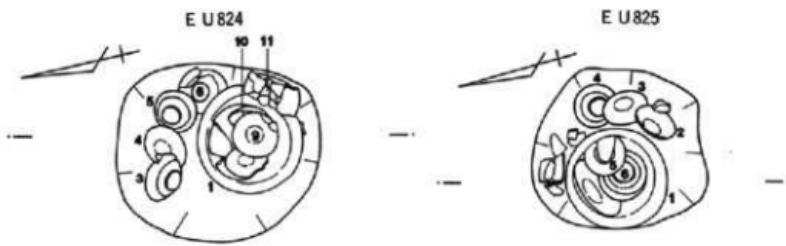
E U824 (第17図 図版10)

35-9区で検出された。ピットは径35×30cmの梢円形で深さ20cm、覆土は3層である。甕は完形で径18cm、その内部に小形皿3枚、壺1個体、小礫1個、外部に小形皿7枚、小礫7個が埋置されていた。ピット内の小礫は点を落とさず取り上げたので、原位置は不明である。皿も完形が多い。その中でR P95-6の口縁部両面に煤の付着がみられる。

E U824はピット内への土器の埋置のしかたが他の5基と若干異なる。小形皿の出土個体数が10枚と6基の埋設遺構中最も多く、しかも甕内部よりも外部の方に納められている数



第16図 E U 822・823



E U824
1 : 10Y R2/1
1 : 10Y R2/3
2 : 10Y R3/4
2 : 10Y R2/1
3 : 10Y R2/3

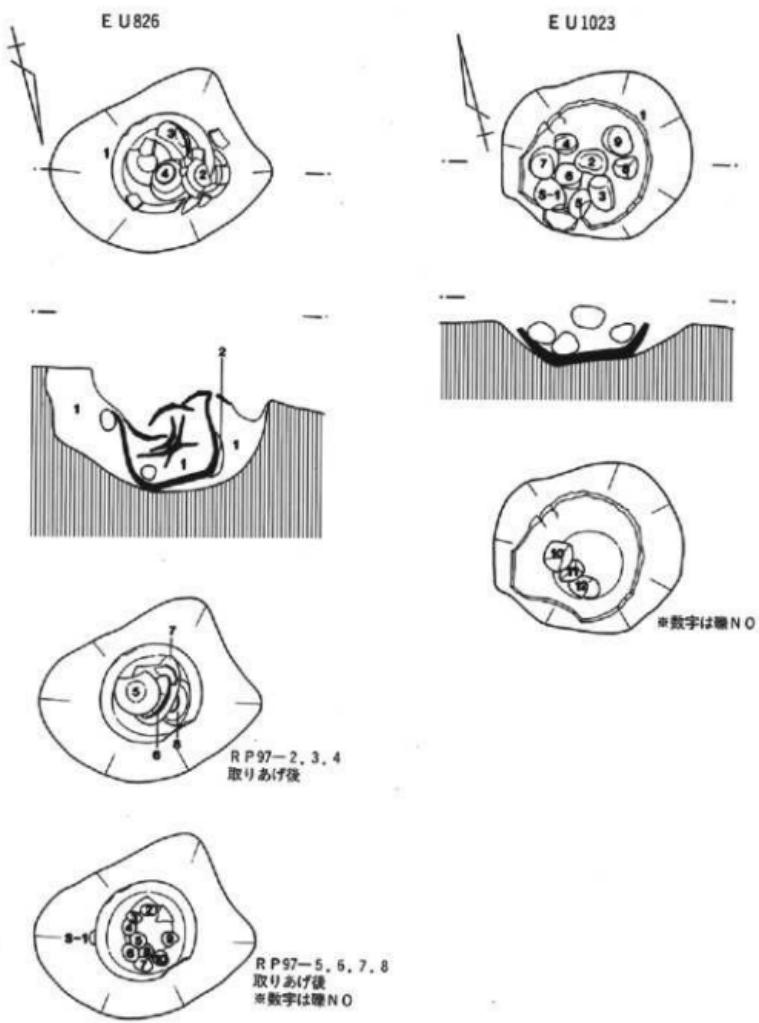
黒褐色シルト】(2種類の土が同程度に混じり合っている。しまっている。小炭化物粒を含む。)
黒褐色シルト】(しまっている。同2/3黒褐色シルトが斑状に混じり合っている。小炭化物粒を少量含む。)
黒色シルト】(埋室内の土。2種類の土がレンズ状に重なり合っている。大粒の炭化物を含む。)
黒褐色シルト】

E U825
1 : 10Y R3/3
2 : 10Y R3/3

暗褐色細砂質シルト】(しまっており固い。同Y R2/1黒色シルトがレンズ状に混入している。)
暗褐色細砂質シルト】(同1/1黒色シルト及び火山灰が斑状に混じり合っている。しまっているが、埋室内の土は軟かい。微細な炭化物を若干含む。)

0 25cm

第17図 E U824・825



E U 826
 1 : 10 Y R3/3 喀褐色シルト〔火山灰の小塊とやや大きい炭化物塊を柱状に含み、固くしまっている。〕
 2 : 10 Y R2/2 喀褐色シルト〔しまっている。〕

0 25cm

第18図 E U 826・1023

が多い。壺内部に入っている土器は皿3枚・壺1個体で、残りの皿7枚はピット内西半分に壺の体部に併置されている。ピットと壺の間に皿が納まるケースは822・825でも認められるが、枚数からいえば824の例は顕著である。

E U825 (第17図 図版10)

36—9区にある。平面形は不整円形、径30×27cmを測り、覆土は2層である。S D92を切っている。

壺の内部に小形皿3枚・壺1個体、外部に小形皿4枚及び小碟10個が埋納される。遺物は径18cmの壺をはじめ完形が多く、底面上の小碟の直上に壺が正位で置かれている。R P 96—6 小形皿口縁部両面に煤の付着が認められる。

E U826 (第18図 図版11)

35—9区で検出された。822のほぼ南方6m、825のほぼ西方6mに位置する。径33×27cmの不整円形を示し、覆土は1層のみである。西接のS B 4 E B 1を切る。

壺の内部に小形皿5枚・壺1個体が納められ、壺口縁上に小形皿1枚、小碟が壺底部に9個、ピット内に1個入っている。他の5基では壺(高台付壺)は底面の碟の直上にあるが826では例外的に一番下に小形皿が入っている。壺は径18cmで完形をなし、R P 97—4②の小形皿口縁部両面に煤が付着している。

E U1023 (第18図 図版11)

37—9区で検出された。825の東方やや南寄り6mの地点にある。壺1個体、小形皿3枚、碟12個が確認されたが、遺構の上半部分を削られており、壺は体部から口縁部を1／2以上欠失している。皿3枚も破片である。埋設時の位置が他の5基に比べ浅かったために粗掘り、面整理の段階までに破壊を受けた可能性がある。

(5) 土器埋設ピット

特殊埋設遺構とともに本遺跡に特徴的な遺構として土器埋設ピットがある。この遺構は直径30cm前後のピットの中に赤旋土器壺もしくは皿など数枚がまとまって検出される、というものである。特殊埋設遺構と出土状況に類似性をもつが、壺を伴わず、したがって壺・皿・壺・碟というセットではなく、1つの遺構に1器種もしくは2器種の遺物がじかにピット内に入っている、という特徴をもつ。また遺構の規模や遺物数も1基を除き埋設遺構に比べ小規模である。8基検出された。

検出地区をみると、東区西半部の建物内とその周辺に存在するものが多い。埋設遺構との共通性が認められる点である。

S P 102 (第19図 図版11)

35—13区にある。径30×28cmの円形で、確認面からの深さは18cmである。S P 101に切ら

れる。完形の壺3個体が出土した。遺物はピット南東側に寄って入っている。

S P 140 (第19図 図版11)

35-11区にある。平面形は35×31cmのほぼ円形で、深さは約11cmである。壺3個体・高台付壺1個体が出土した。高台付壺は壺よりもひとまわり大型である。いずれも完形である。ピット南半部分に遺物が埋置されている。

S P 190 (第19図 図版11)

33-10区で検出された。径35×30cmの楕円形をなし、深さは約19cmある。壺6個体がピット南半部分から出土した。いずれもほぼ完形である。

S P 466 (第19図 図版12)

36-11区にある。径30×28cmのほぼ円形の平面形をもち、深さ5cmと浅い。壺2個体(R P 114は口縁部のみ)、高台付壺1個体がピットいっぱいに埋められていた。高台付壺は壺よりもひとまわり大型である。

S P 930 (第19図 図版12)

37-6・7区にある。径32×30cmのほぼ円形をなし、深さは8cmである。ピットのほぼ中央から壺3個体が重なり合って出土している。ほぼ完形をなす。

S P 976 (第19図 図版12)

37-11区で検出された。径38×36cmのほぼ円形で、深さ9cmのピットに壺5個体が埋置されている。壺はピット内東半部に4個体、西半部に1個体と分かれて入っていた。いずれもほぼ完形をなす。

S P 982 (第19図 図版12)

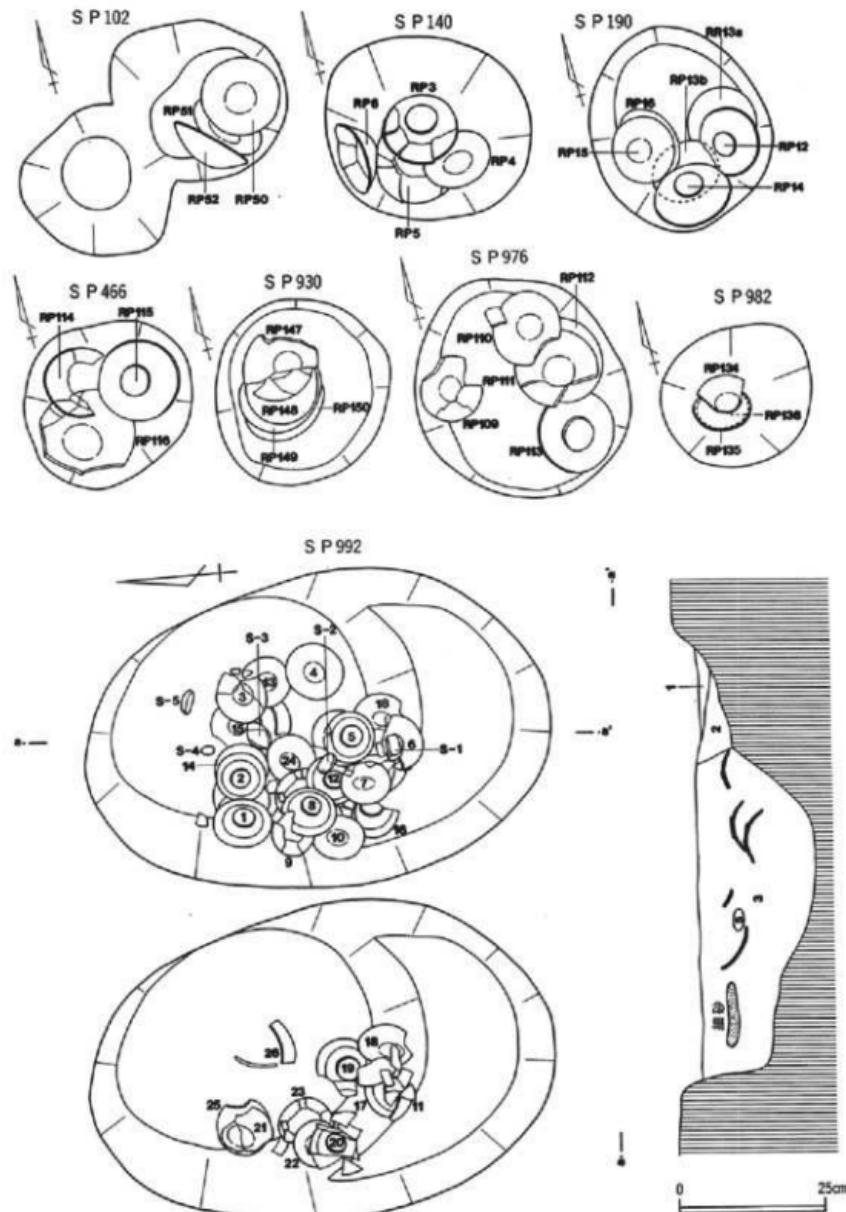
35-9・10区にある。径27×25cmの不整円形のピットで、深さは12cmである。ピット中央部に小形皿2枚、器台1個体が重なって出土している。器台の出土は982のみである。R P 134以外はほぼ完形である。

S P 992 (第19図 図版12)

35・36-8・9区で検出された。このピットは径80×55cm、深さ24cmの規模をもつ楕円形のピットである。出土遺物も小形皿24枚と多量であり、他の7基とは明らかに違う様相をみせている。覆土は3層である。小形皿のみが一括して出土する遺構は本遺跡では他に例がない。また、S P 992では小礫も5個出土しているが、特殊埋設遺構のようなまとめではない。

S P 992

- | | |
|--------------|--|
| 1 : 2.5Y 3/3 | 暗オリーブ褐色シルト(微細な炭化物を若干含む。) |
| 2 : 2.5Y 4/3 | オリーブ褐色細砂(同3/3暗オリーブ褐色シルトのブロックを若干含む。比較的純粋。) |
| 3 : 2.5Y 3/2 | 黒褐色砂質シルト(同4/3オリーブ褐色細砂、10Y R1.7/1黒色シルトの各層をレンズ状に含む。炭化物を多量含み、(底方向に酸化鉄が入り込んで付着している。) |



第19図 土器埋設ビット

(6) 柱 列

掘り方が一定の間隔で並ぶが、掘立柱建物跡としての把握ができないものを柱列とした。柱間が3間以上となるものは1ヶ所だけである。

S A 10 (第20図)

37—6～8区で検出した柱列である。柱間は3間であり、主軸はN-11°30'—Eを測る。

掘り方の中心で測った柱間距離は2.50m等間である。各掘り方の規模は以下のとおりである。

S P 852 一東西50×南北45cm。深さは63cm。やや西にズレている。堆積土は2層。

S P 854 一東西55×南北53cm。深さは68cm。西にズレており、堆積土は4層。

S P 859 一東西60×南北61cm。深さは40cm。南西方向に大きくズレている。堆積土は1層。

S P 864 一東西63×南北52cm。深さは30cm。

S P 852

1 : 7.5Y R 17/1 黒色細砂質シルト
2 : 2.5Y 4/1 黄灰色シルト
3 : 10Y R 3/1 黑褐色粘土質シルト

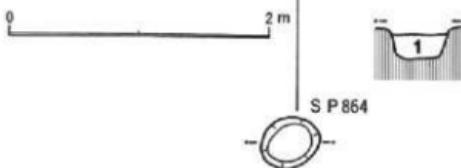
S P 854

1 : 10Y R 2/1 黒色シルト (10Y R 2/1 黄灰色シルトのブロックを含む)
2 : 2.5Y 2/1 黄灰色シルト
3 : 10Y R 3/1 黑褐色シルト
4 : 10Y R 4/1 黑褐色粘土質シルト

S P 859

1 : 10Y R 2/1 黒色シルト (細砂を混入する)
S P 864

1 : 7.5Y R 17/1 黑色砂質シルト



第20図 S A 10平面・断面図

(7) ピット (第4図)

東区からは、径または一辺が10～60cmとなる円形、方形を基調とするピットが多数検出された。このうち、遺物が出土したものを登録したが、その数は935基となった。これらのピットは、X-45以西に万遍なく分布している。これらがすべて掘立柱建物跡の掘り方となるとは考えにくいが、その一部は柱をもつものであったことは疑いなく、見落した建物跡もあった可能性がある。

これらのピットのうち、28基から、完形、あるいは、それに近い図示可能な土器が出土している。また、破片だけのピットも、すべて、平安時代の土器であり、中世あるいは、それ以降の陶器等が出土したものはない。

(8) 落込み (第4図21・22図 表-3)

平面的ななかたちが定まらず、確認面からの深さが比較的浅いものを落込み (S X) として登録した。大きさも、まちまちであり、遺物の出土がないもの、多量の一括土器が出土したものなどバラエティーに富んでおり、厳密には土壤との区別が困難である。本報では原則として登録時のものを踏襲した。これらの概要については表-3にまとめたが、火山灰が堆積土に含まれるものは5基あり、含まれ方によって次のように分けられる。

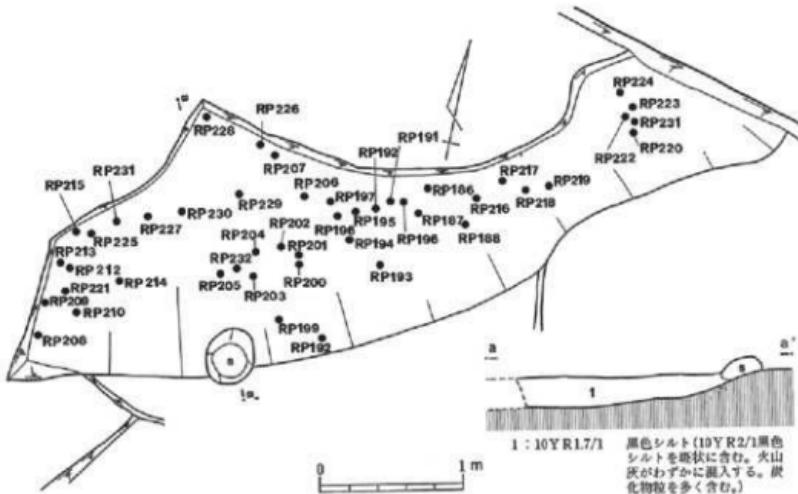
純粹な火山灰層をもつもの — S X979 (堆積土2層が純粹)。

火山灰粒を含むもの — S X980 a・980 c・988・1105。

また、切り合っている遺構の堆積土に火山灰粒を含むものがある。S X238・239に切られるS D95に火山灰粒があり、S X1001を切るS D1004の2層に火山灰粒が混入している。このことから、S X238・239は火山灰降下後の遺構であり、S X1001は火山灰降下前の遺構である可能性もある。

まとまった遺物が出土したものは多くはないが、調査区の北東部にある大きな落込みS X1001からは多量の土器片と実測可能な土器18個体の出土があり、石器も出土した。

調査区の北西隅で検出したS X1105は、北部、西部とも工事の地区外となるため、完掘はできなかったが、多数の一括土器が出土した。調査区の範囲内で確認した堆積土は1層だけであったが、この層には火山灰粒が含まれていた。登録した土器は、土師器の高台付壺や、赤焼土器の小形皿、高台付皿等を中心に46点であったが、最終的に実測可能となつたものは111点であり、このほか、綠釉陶器、灰釉陶器片も出土した。



第21図 S X1105平面・断面図

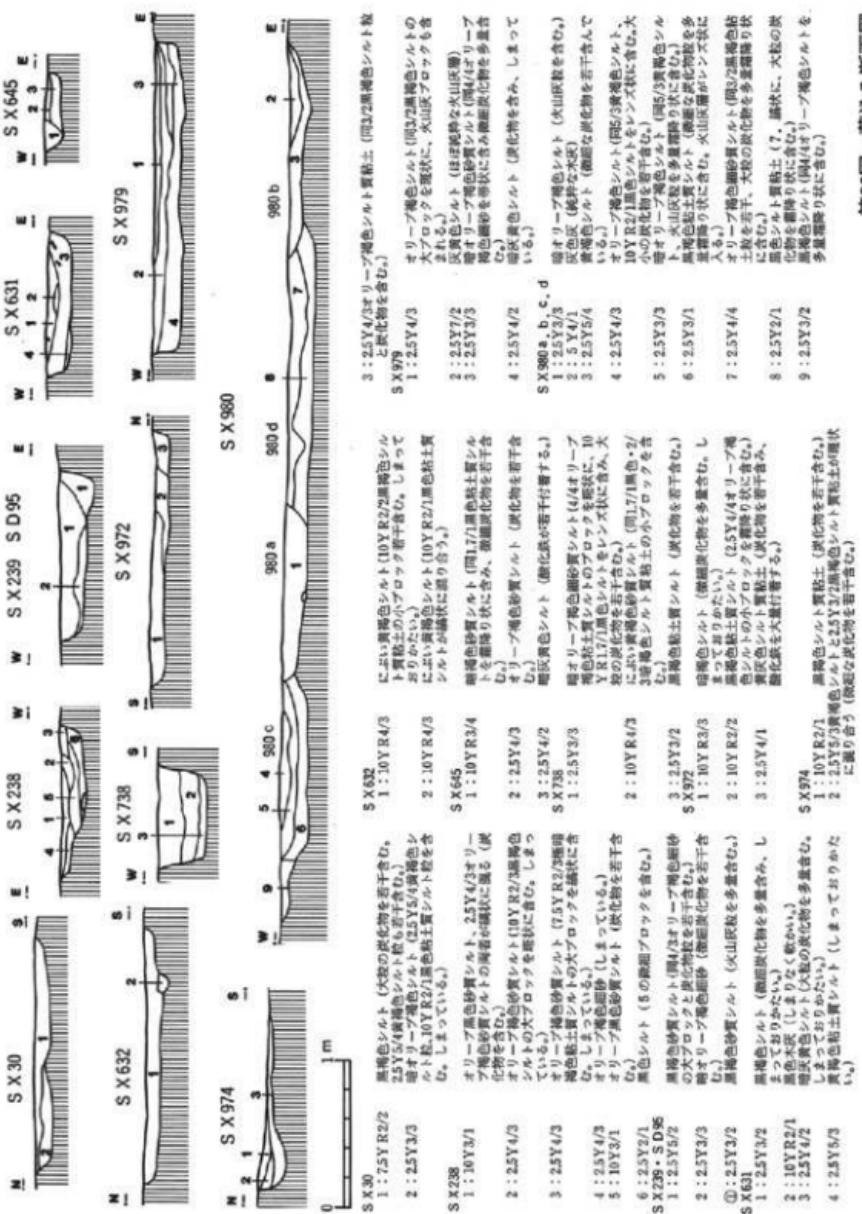


図22 落込み断面図

表-3 落込み一覧

単位:cm

登録番号	検出地区	長軸長	短軸長	深さ	出土遺物	備考
30	38・39-13	186	95	6~14		
172	35-13	178	98	6		10Y R3/1黒褐色シルト。2.5Y4/3オリーブ褐色砂質シルトが混り合う。
173	35-36-12・13	272	158	6		10Y R3/1黒褐色シルト。2.5Y4/3オリーブ褐色砂質シルト粒が混り合う。
184	33・34-10	53	33	25	371	10Y R2/1黒色粘土質シルト。
217	33-10	89	68	58		10Y R2/1黒色砂質シルト。
223	34-11	248	136	102	372	10Y R2/1黒色シルト。
238	34-9	93	69	17	373	S X239を切る。
239	34-9	311	110	11~22	374	S X238、SD95に切られる。
631	37-13	318	113	18~23	375~378	
632	38-13	173	100	13		
634	35-12	145	128	15		2.5Y3/1黒褐色シルト。同4/4オリーブ褐色シルトが混り合う。
635	35・36-10	123	74	51		10Y R3/1オリーブ黑色シルト。
637	37・38-13	70	62	31		2.5Y4/3オリーブ褐色砂質シルト。
643	38-11	134	45	33	379	10Y R2/1黒色シルト。
645	37-38-10・11	165	47	12		10Y R3/1オリーブ黑色シルト。
735	37・38-13	(110)	36	11	380	2.5Y4/4オリーブ褐色シルト。
738	37-10・11	(126)	72	34		S B1、E B10に切られる。
743	39-13	135	108	11		10Y R1.7/1黒色シルト。
744	39-12	142	95	4~8		10Y R1.7/1黒色シルト。
751	39-10	110	40	8		10Y R1.7/1黒色シルト。人骨出土。
753	39-13	(150)	108	8~10		10Y R2/1黒色シルト。
760	39-13	160	82	12		10Y R2/1黒色シルト。
897	40-11	118	99	4		S B2、E B4に切られる。10Y R1.7/1黒色シルト。
937	38-6	(640)	(417)	10		2.5Y3/2Bオリーブ褐色粘土質シルト(4/4オリーブ褐色シルト塊を含む)。
970	38-6・7	240	143	24	382・383	10Y R2/1黒褐色シルト。
971	38-7	(160)	60	4	384	10Y R1.7/1黒色シルト。S X972に切られる。
972	38・39-7	200	69	12		S X971を切る。
973	39-7・8	(98)	112	6		2.5Y4/3オリーブ褐色シルト。
974	38-8	160	113	6	385	10Y R1.7/1黒色シルト。
975	38-8	127	72	11	386	2.5Y3/2黒褐色粘土質シルト(同4/4オリーブ褐色シルト粒を含む)。
977	39-6	192	117	5	387	10Y R2/2黒褐色シルト。
978	40-6・7	99	80	6		
979	39-40-7・8	313	211	17	388・389	
980	39-40-7・8	658	310	9~22	390~395	980a+b+c+dの4道溝の切り合い(北西から順にc+b+d+b)。
981	38-8	114	67	7		S D91を切る。2.5Y4/4オリーブ褐色シルト。
988	39-8	92	74	8		2.5Y4/2暗赤褐色粘土質シルト(火山灰粒、褐化物粒を含む)。
989	39-8	116	104	11	398	10Y R2/3黒褐色シルト(火山灰粒を多量含む。980dに切られ6.5m)。
993	37・38-9	160	100	17~25	396・397	7.5Y R1.7/1黒色シルト質細砂。
995	40-8	241	65	5		10Y R2/1黒色シルト。980bに切られる。
997	40・41-8	112	78	11		7.5Y4/3オリーブ褐色シルト。
1001	40~44-6~8	2135	880	4~10	399~417	S D98・1002・1006を切り。S D1004・1005・1006・1007に切られる。
1105	34・35-4・5	(520)	(168)	(23)	418~509	北西端調査地区外。

2 遺物

東区から出土した遺物には土器・施釉陶器・磁器・土製品・石製品・骨片等がある。このうち半数以上は遺構内堆積土から出土しており、電柱の支線の穴や、道路の側溝とみられる溝等ごく小数の近代の遺構を除けば、遺構内遺物の大半は平安時代に属する。以下、種類別にその概要を記す。

(1) 土器

東区の土器は土師器・須恵器・赤焼土器の3種類に分けられ、墨書き土器を除いて、実測できたものは591個体であり、破片は72,095点を数える。土師器には壺・高台付壺・高台付皿・壺・甕・鉢が、須恵器には蓋・壺・高台付壺・壺・甕が、赤焼土器には壺・皿・小形皿とそれぞれに高台の付いたもの、甕・壠・器台・鉢等の器種がある。以下、遺構ごとにその概要を記す。

掘立柱建物跡の土器（第23・24図 表—5・16 図版14・22）

S B 1 の土器（第23図1～7）

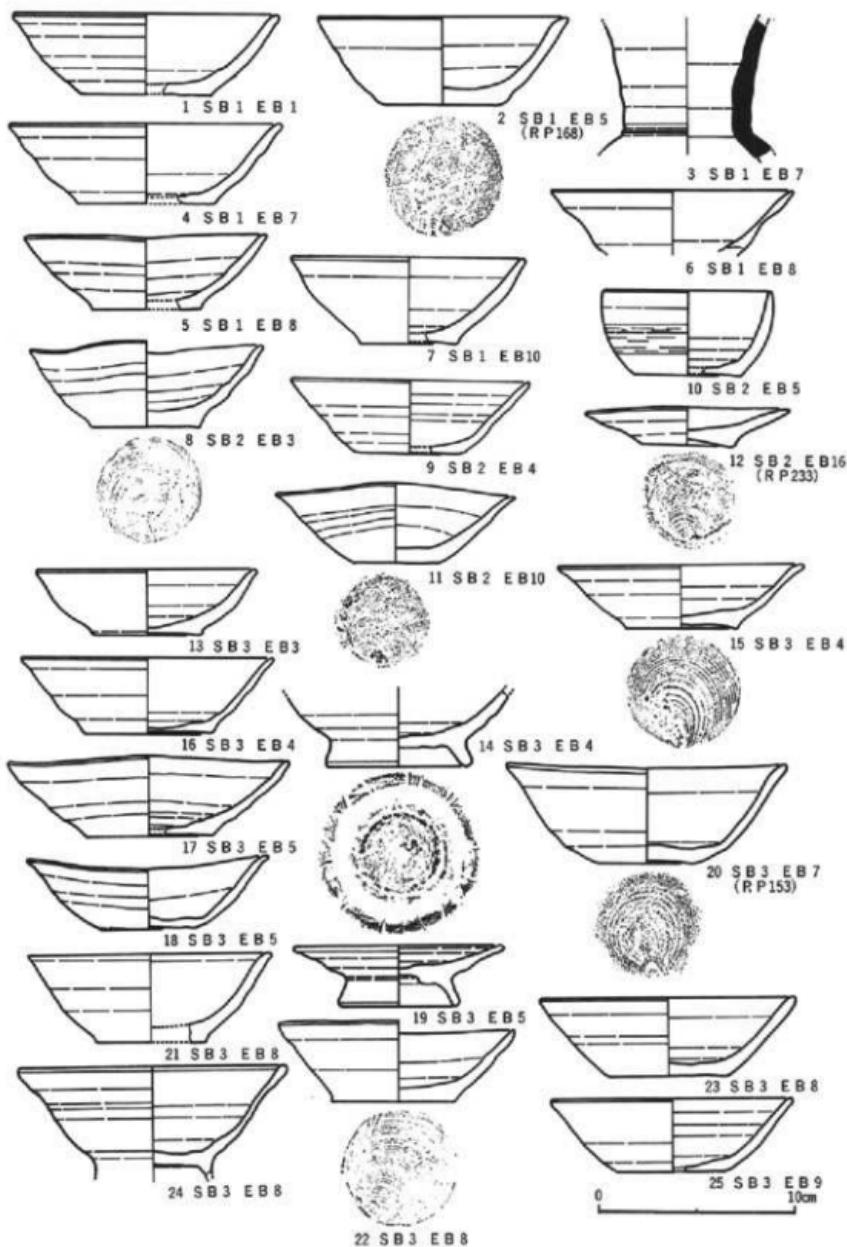
E B 1・5・7・8・10の各掘り方から実測可能な土器が出土した。1～7のうち、3が須恵器壺の頭部破片であるが、他は赤焼土器の壺である。これらは口径120～140mm、底径50～70mmで、器高は1点が37mmであるが他は40mmを越えている。破片は各掘り方の総計で1,214点を数えるが、その80%は赤焼土器の供膳形態の破片で、約10%が赤焼土器の煮沸形態、約6%が土師器の供膳形態、残り4%が須恵器となるが、その供膳形態は0.2%に満たない。

S B 2 の土器（第23図8～12）

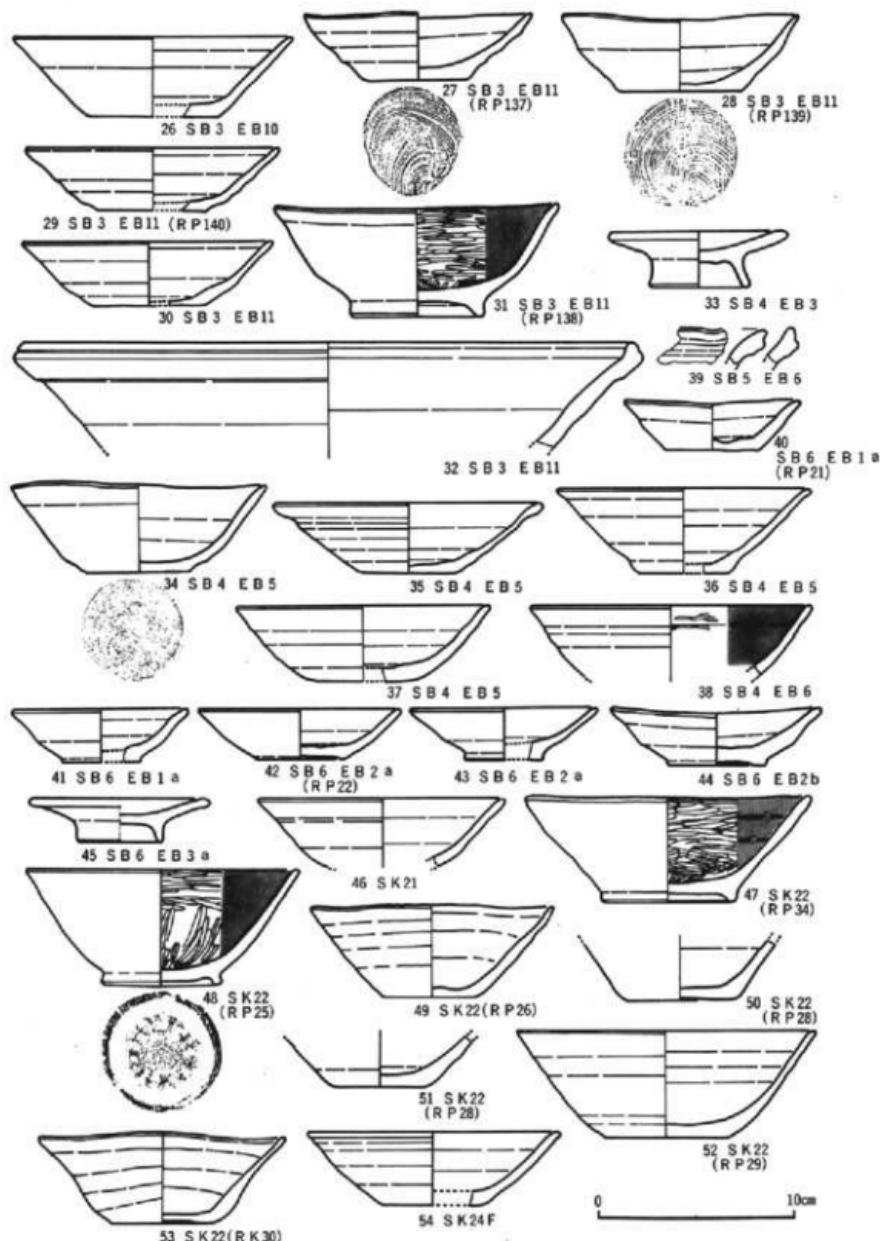
E B 4・5・10・16の各掘り方から実測可能な土器が出土している。このうち、10は内湾気味に急角度で立ち上がる特異な器形となり、体部外面の中央部には回転ヘラケズリが施されている。底部切り離しは回転糸切りである。8・9・11は糸切り無調整の壺、12は内面中央から緩く立ち上がる極端に身の浅い皿である。破片は各掘り方から合わせて1,288点の出土があり、約85%が赤焼土器の供膳形態で、約8%が赤焼土器の煮沸形態、約4%が土師器、約3%が須恵器となっている。須恵器の供膳形態は1%弱である。

S B 3 の土器（第23図13～第24図32）

E B 3・4・5・7・8・9・10・11の各掘り方から合わせて20個体の図示可能な土器が出土したが、特にE B 11では堆積土の上層部からまとまった土器と陶器片が出土している（図版5）。図示可能な土器の大半が赤焼土器であり、壺（13、15～18、20～23、25～30）、高台付壺（14・24）、高台付小形皿（19）、壠（32）の各器種がある。壺には器高が35mm以下の身の浅いもの（27・29・30）がある。高台付小形皿は、東区出土の小形皿のなか



第23図 土器実測図(1) 挖立柱建物跡



第24図 土器実測図(2) 挖立柱建物跡・土壤

では大きい部類に属する。場は口縁部が肥厚する形態となる。土師器の高台付坏(31)は内湾気味に立ち上がって、体部下半から直線的に外傾する器形となり、外面はナデによって平滑に仕上げられ、内面中央部には放射状の、その上部には横方向の丁寧なミガキが施されている。破片は合わせて1,426点の出土があり、その89%は赤焼土器の供膳形態となり、赤焼土器の煮沸形態は約5%、土師器の供膳形態と須恵器がそれぞれ約3%の割合となる。須恵器の供膳形態は0.2%である。

S B 4 の土器 (第24図33~38)

E B 3・5・6の各掘り方から実測可能な土器が出土した。33は赤焼土器の高台付小形皿で、「ハ」の字形に高さ13mmの高台が付けられている。34~37は赤焼土器の坏、38は土師器の坏もしくは高台付坏の口縁部資料である。破片は合わせて494点が出土した。赤焼土器の供膳形態は約88%、煮沸形態は約5%、土師器の供膳形態が約4.5%、須恵器が約2.5%の割合となっている。E B 11からは底部に墨書のある土師器坏が出土した(第51図599)。

S B 5 の土器 (第24図39)

破片資料は全部で882点の出土があったが、実測可能な1/4個体以上のものは出土していない。39は赤焼土器の片々の鉢の口縁部破片である。破片資料の内訳は赤焼土器の供膳形態が約89.5%、煮沸形態が約4.5%、土師器の供膳形態が約4%、須恵器は2%となっている。

S B 6 の土器 (第24図40~45)

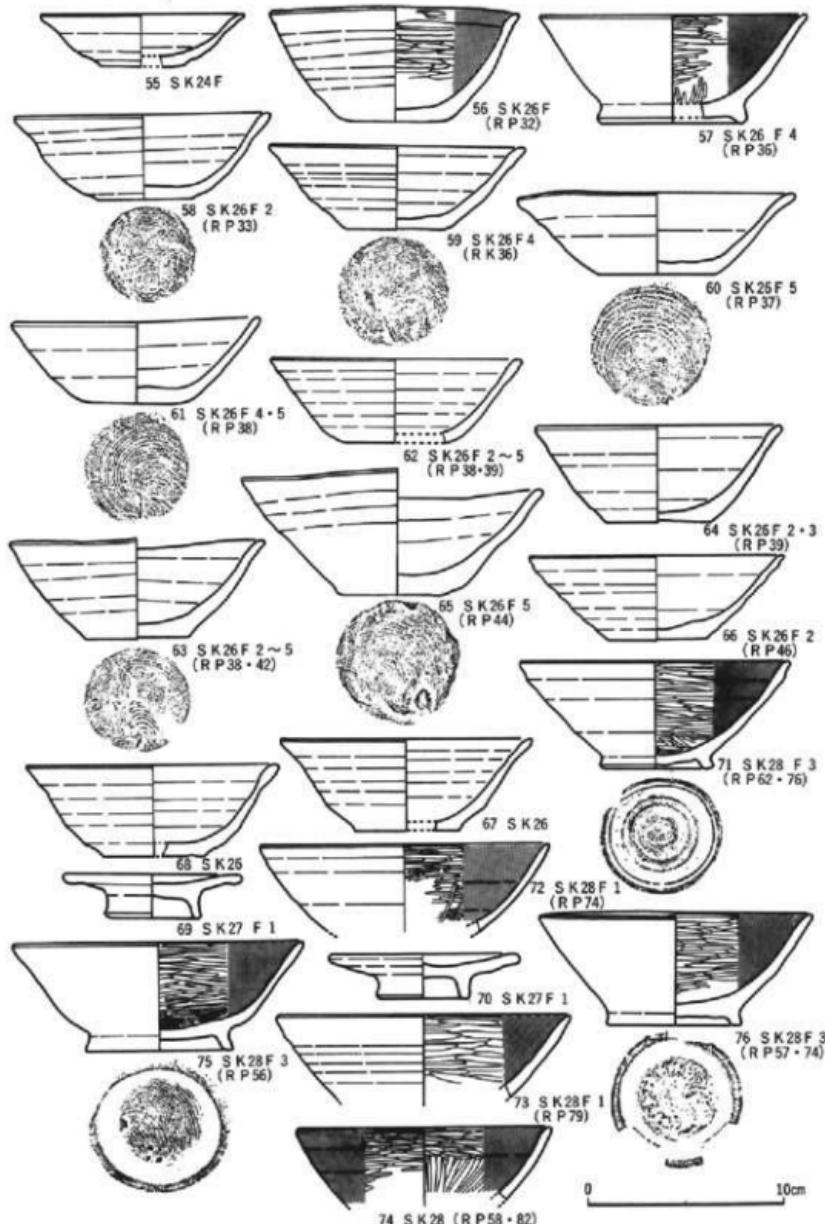
E B 1 a・2 a・3 a・2 bの各掘り方から図示可能な土器が出土した。これらの土器はいずれも赤焼土器の小形皿(40~44)と高台付小形皿である。40・41は後に述べる特殊埋設遺構の小形皿とかたち、法量が類似するが、42~44はこれらより幾分大きめである。45にはほぼ直立する高台が付けられている。破片資料は全部で186点の出土があり、内訳は赤焼土器の供膳形態が約95%、煮沸形態が3%、土師器の供膳形態が2%である。

土壤出土の土器 (第24図46~第30図157 表-5~7・16 図版14・15 22・23)

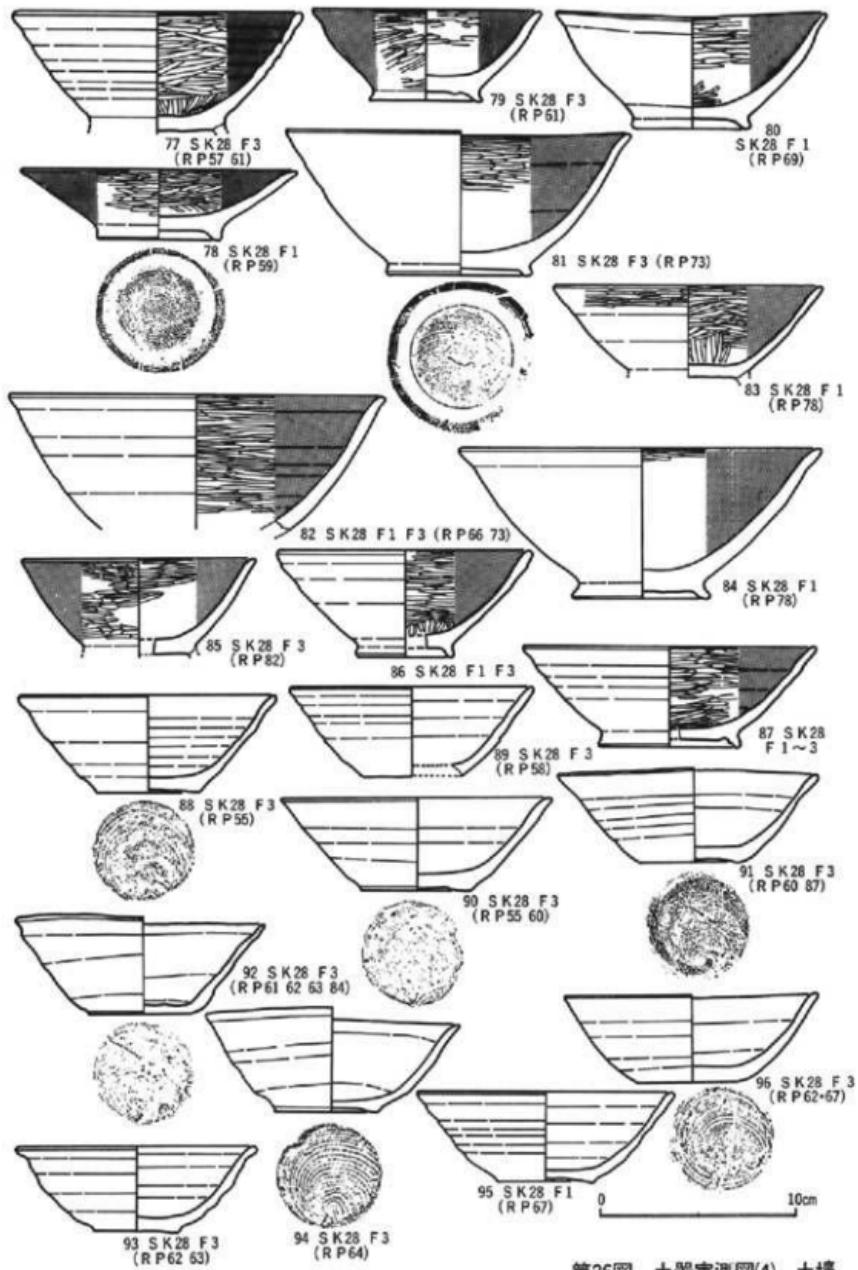
46はS K21から出土した赤焼土器の坏である。このほか45点の破片が出土しており、その内訳は赤焼土器の供膳形態が80%、煮沸形態が11%、土師器の供膳形態が9%である。

47~53はS K22から出土した土器である。47・48は土師器の高台付坏で、48の底部には高台接着時の菊花状のナデツケが認められる。両者とも外面は平滑に仕上げられており、47は直線状に、48は丸味を帯びて立ち上がっている。49~53は赤焼土器の坏でいずれも身が深い。破片は合わせて121点の出土があり、赤焼土器の供膳形態が約74%、煮沸形態が7%、土師器の供膳形態が17%、須恵器が2%となっている。

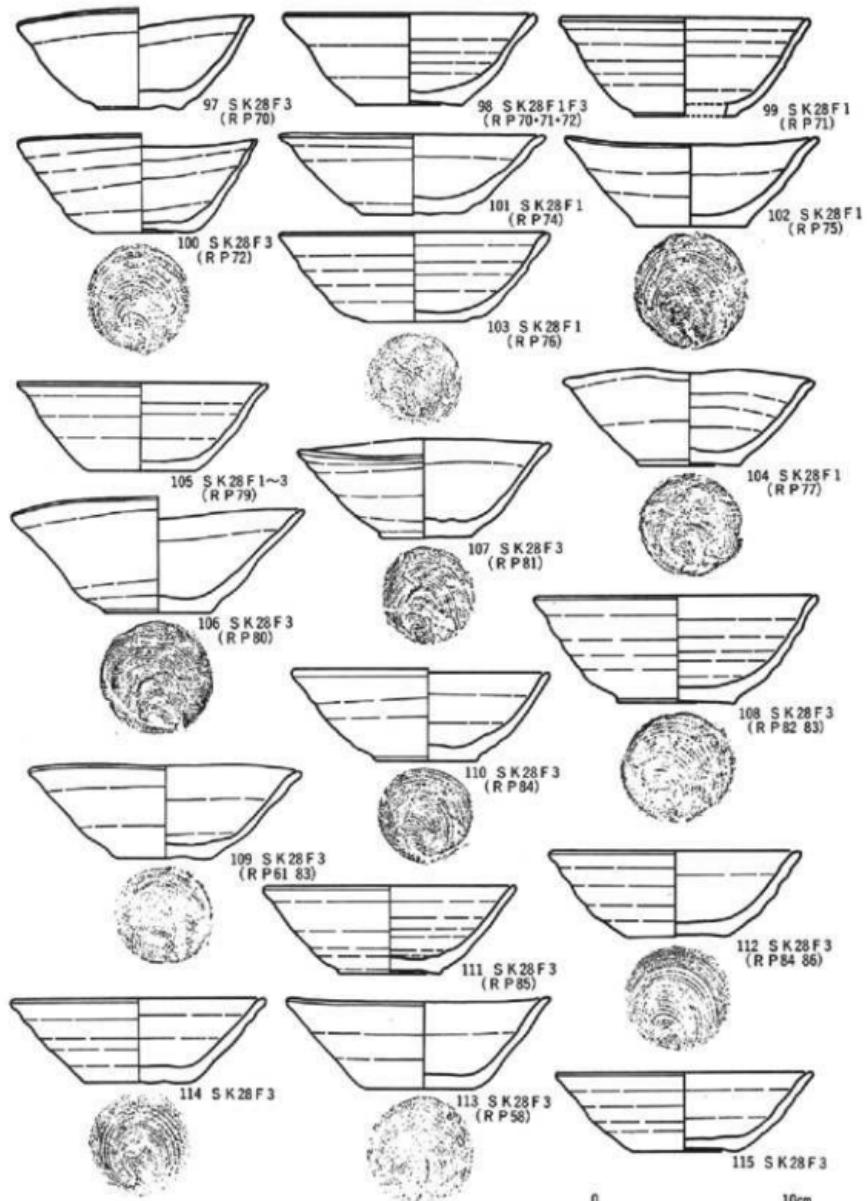
54・55はS K24から出土した赤焼土器の身の浅い坏(54)と小形皿(55)である。破片は278点の出土があり、赤焼土器の供膳形態が84%、煮沸形態が9%、土師器の供膳形態が



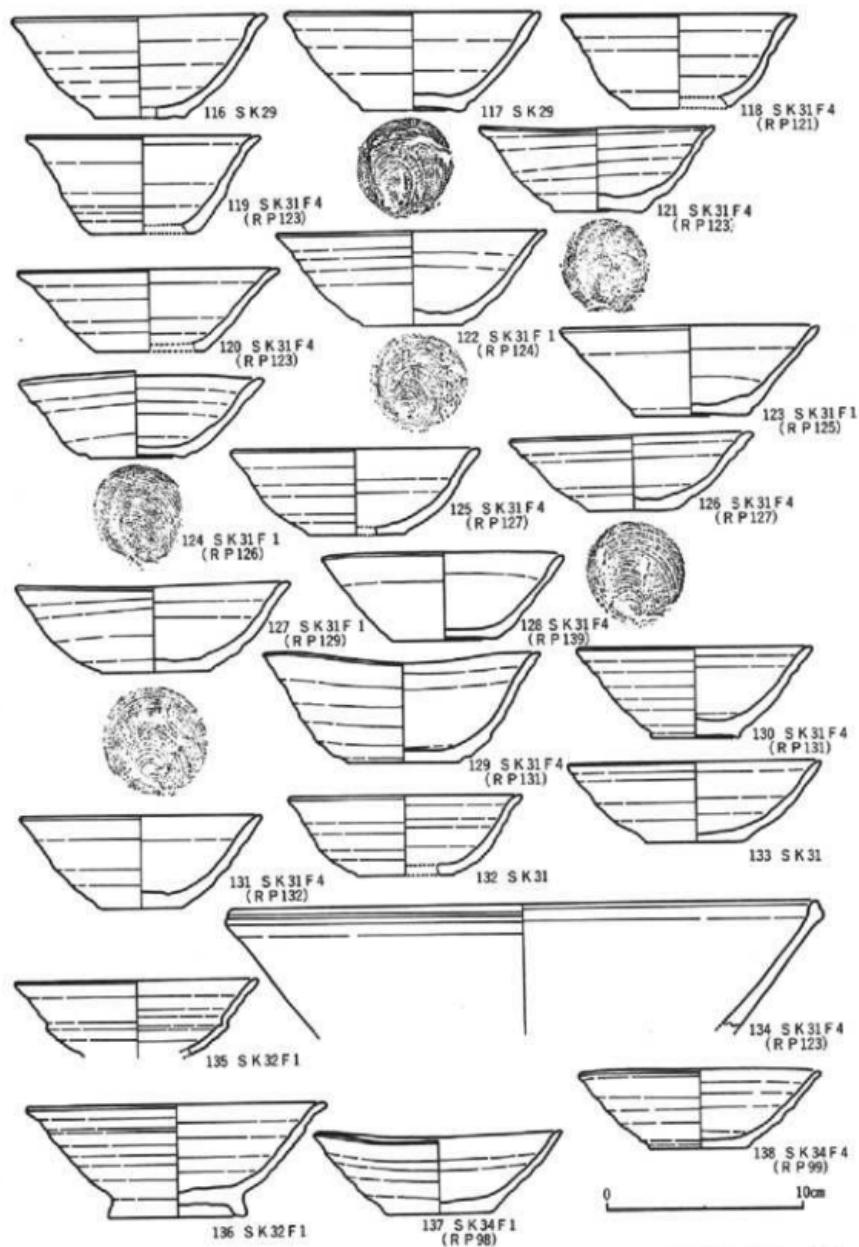
第25図 土器実測図(3) 土壌



第26図 土器実測図(4) 土壌



第27図 土器実測図(5) 土壌



第28図 土器実測図(6) 土壌

4%、須恵器が3%となっている。

56~68はSK26から出土した土器である。56は土師器の壺、57は高台付壺であり、57の外面はナデによって平滑に仕上げられている。58~68は赤焼土器の壺である。いずれも器高が高く身の深いものである。破片は496点の出土があり、その内訳は赤焼土器の供膳形態が86.5%、煮沸形態が8%、土師器の供膳形態が4.5%、須恵器が1%となっている。

69~70はSK27から出土した赤焼土器のやや大きめな高台付小形皿である。破片は193点の出土があり、赤焼土器の供膳形態が88%、煮沸形態が7%、土師器の供膳形態が3.5%、須恵器が1.5%となっている。

71~115はSK28から出土した土器である。74・78・79・85は内外面ともミガキ、黒色処理が施されており、78は高台付皿、79・85は高台付壺、74にも高台が付くと思われる。78の底部外面には5条の並行するヘラ描沈線が認められる。71~73、75~77、80~84、86、87は内面だけに黒色処理のある高台付壺である。このうち、81・82・84は大形で壺状の器形となり、83は口縁部外面にもヘラミガキが施され、76の底部には菊花状のナデツケが認められる。88~115は赤焼土器の壺である。口径は121~150mm、底径は44~60mm、器高40~59mmと法量もまちまちであるが、器高が40mm未満となる身の浅いものはない。第50図600の墨書き土器も本土壤から出土したものである。実測個体数が多いのにもかかわらず、破片数は441点と少なく、その内訳は赤焼土器の供膳形態が60%、煮沸形態が4%、土師器の供膳形態が35%、須恵器が1%となり、土師器の割合が高い。

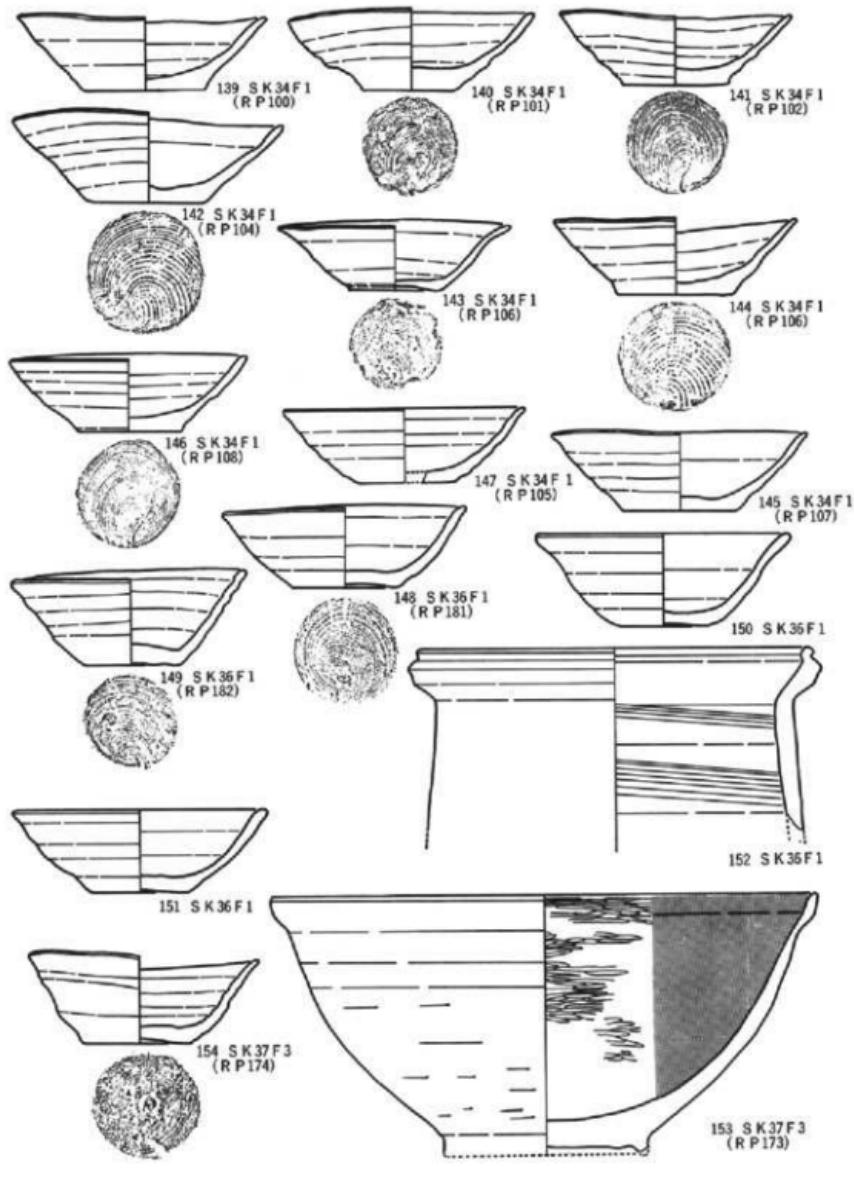
116・117はSK29から出土した赤焼土器の壺である。法量・器形とも類似する。破片は合わせて171点であり、赤焼土器の供膳形態が83.5%、煮沸形態が9%、土師器の供膳形態が4%、須恵器が3.5%となっている。

118~134はSK31から出土した赤焼土器である。135は口縁部が肥厚する場で、これ以外は壺であるが法量・器形とも多様である。破片数は1,696点と土壤のなかでは最も多い。内訳は赤焼土器の供膳形態が92%、煮沸形態が4%、土師器の供膳形態が3%、須恵器が1%である。

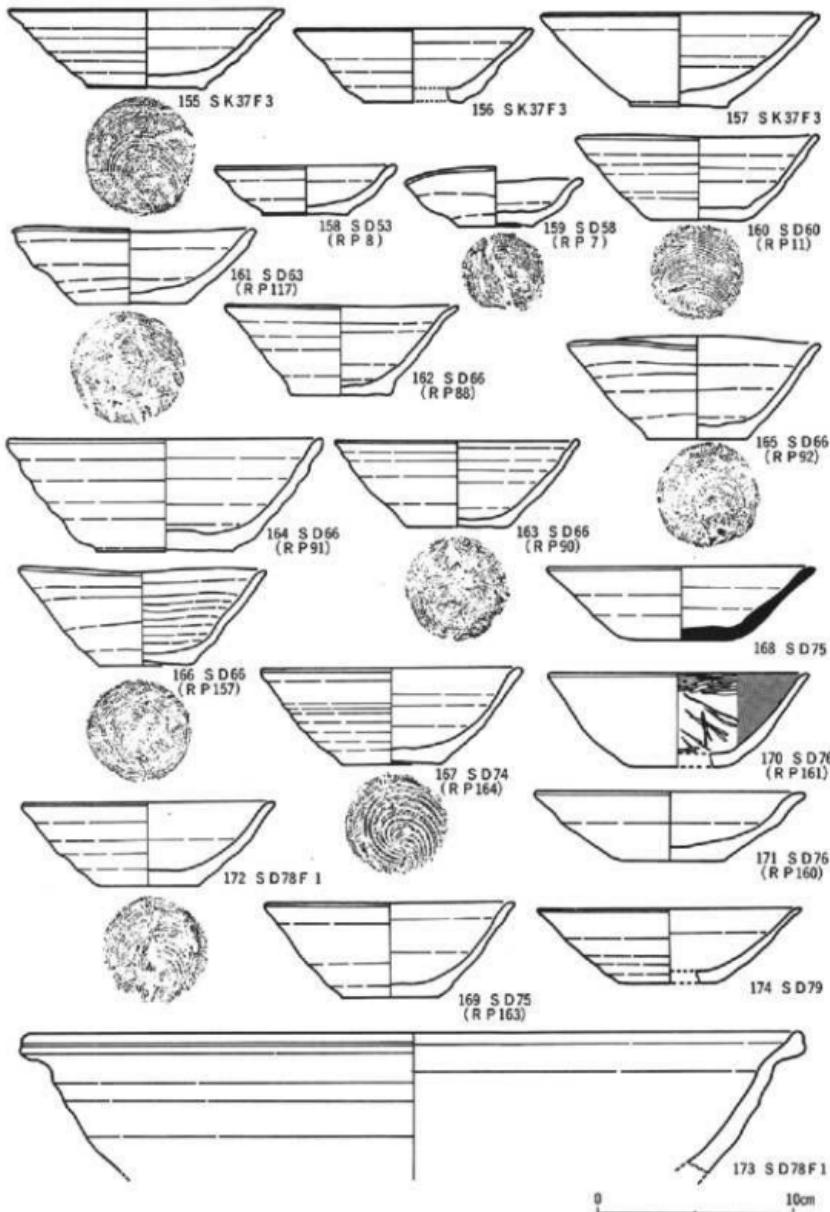
135~136はSK32から出土した赤焼土器の壺、高台付壺である。破片は130点で内訳は赤焼土器の供膳形態が91.5%、煮沸形態が3%、土師器が4%、須恵器が1.5%である。

137~147はSK34から埋置されたような状態で出土した赤焼土器の壺である。142の法量がやや大きいが、他は焼け歪みが激しいものの、ほぼ同形と言つてよい。破片は71点と少なく、赤焼土器の供膳形態が97%を占め、煮沸形態と土師器がそれぞれ1.5%である。

148~152はSK36から出土した赤焼土器である。152は赤焼土器の甕であり、口径が200mmで「く」の字状に曲がる口縁部が肥厚し、口唇部が丸味を帯びて突出している。他は壺



第29図 土器実測図(7) 土壌



第30図 土器実測図(8) 土壌・溝状遺構

でいずれも身が深い。破片は28点と少ない。内訳は赤焼土器の供膳形態が82%、煮沸形態が11%、土師器、須恵器がそれぞれ3.5%となっている。

153～157はS K37出土の土器である。153は内面にミガキ、黒色処理の施された高台の付いた土師器の鉢で、口径は280mmを測る。外面の体部中央から下位にかけて浅いヘラケズリ調整が施されている。スヌの付着はなく煮沸用の土器ではないようである。他は赤焼土器の壺である。破片は赤焼土器の供膳形態が90%、煮沸形態が8%、土師器、須恵器がそれぞれ1%である。

このほか、土器片だけが出土した土壤については表一六に示した。

溝状遺構出土の土器（第30～33図 表一七・八・15・16 図版16）

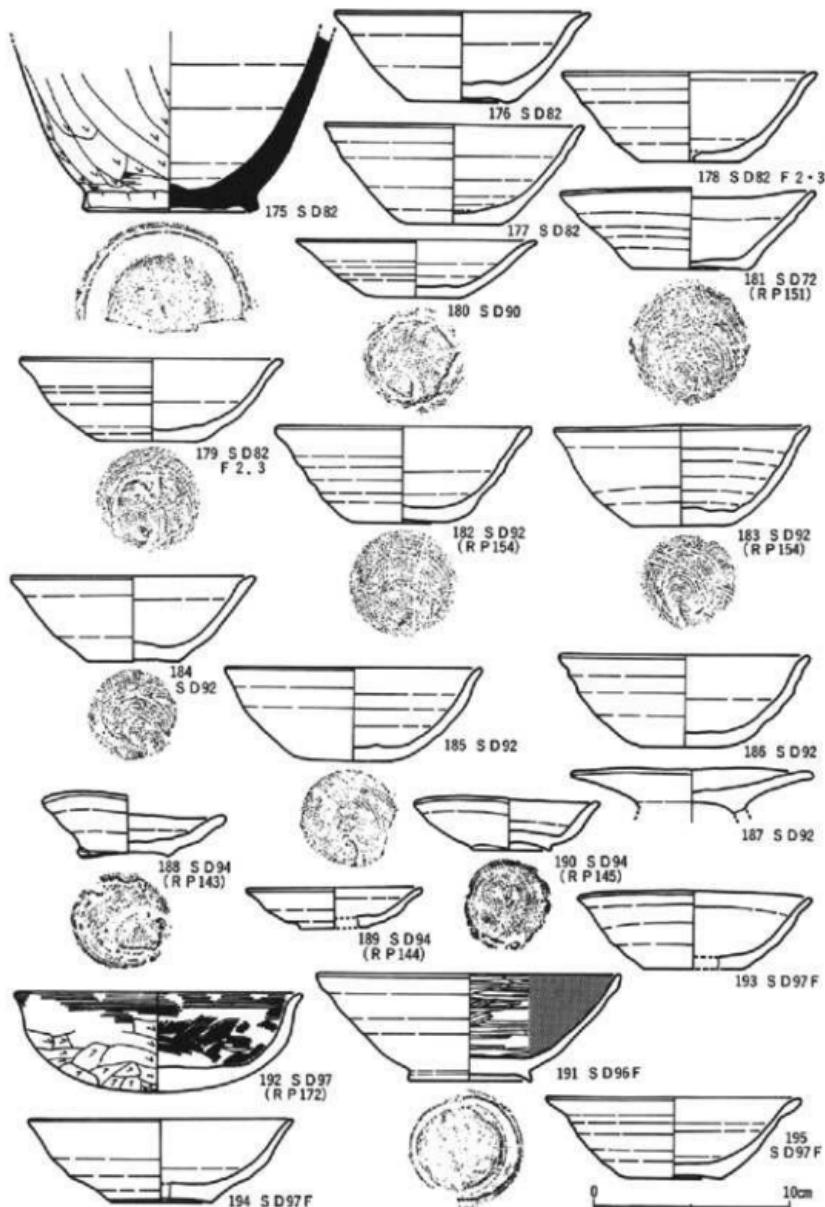
158はS D53から出土した赤焼土器の小形皿で、本遺構の破片は35点であるが、その89%が赤焼土器の供膳形態である。159はS D58から出土した赤焼土器の小形皿である。破片は42点で、その88%が赤焼土器の供膳形態となる。160はS D60から出土した赤焼土器の壺である。破片は7点で、すべて赤焼土器の供膳形態である。161はS D63から出土した赤焼土器の壺である。破片は27点であり、その81%が赤焼土器の供膳形態である。

162～166はS D66から出土した赤焼土器の壺である。口径は118～160mmとバラツキがあるが、身の浅いものはない。破片は336点の出土があり、赤焼土器の供膳形態が88%、煮沸形態が約9%、土師器の供膳形態が2%、須恵器が1%である。

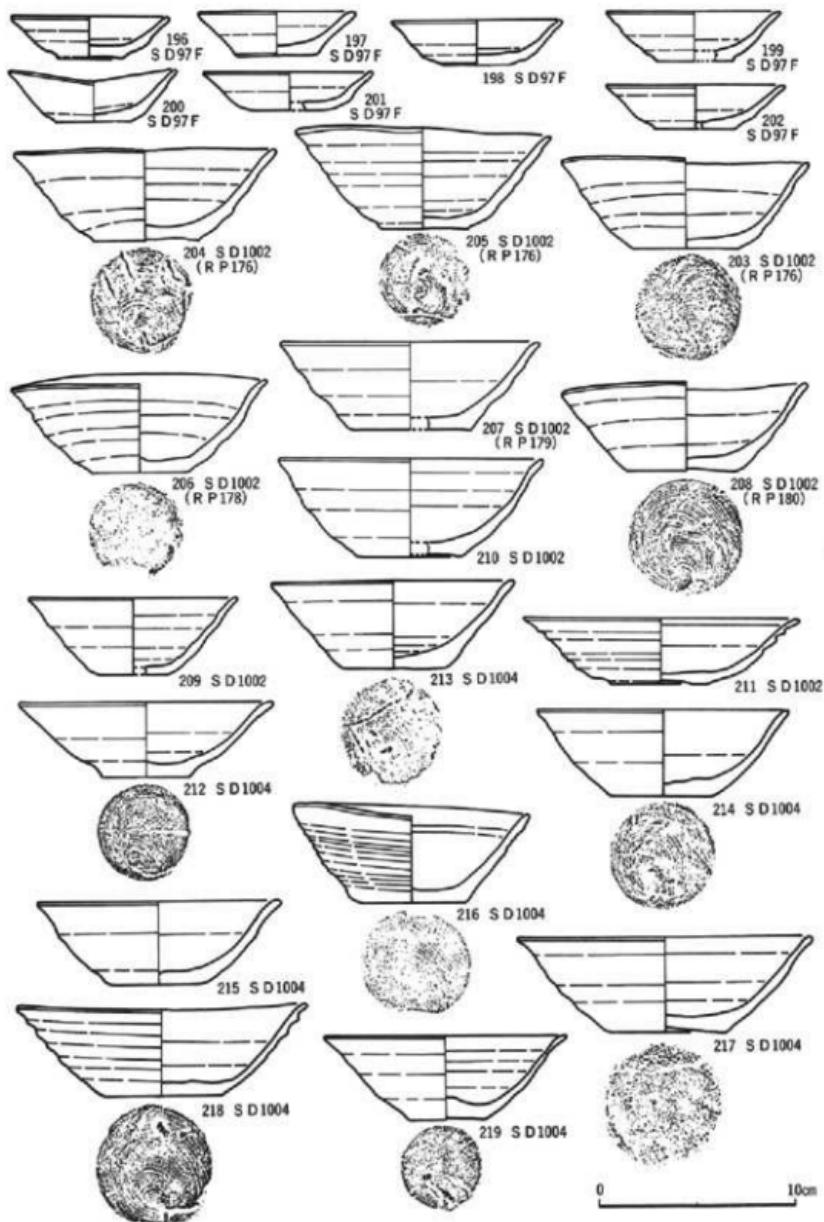
167はS D74から出土した赤焼土器の壺で、破片総数56点の82%が赤焼土器の供膳形態である。168・169はS D75から出土した土器である。169は赤焼土器の壺、168は須恵器の壺である。168は直線状に開き気味に外傾する器形となり糸切り底をもつ。破片は22点であり82%が赤焼土器の供膳形態であり、須恵器はない。170・171はS D76から出土した土師器と赤焼土器の壺である。171は身が深い。破片は27点であり、67%が赤焼土器の供膳形態、18%が煮沸形態、15%が土師器の供膳形態である。173はS D78から出土した赤焼土器の壺である。口径400mmと大形で、口縁部が外反し、口唇部は肥厚している。破片は259点で86%が赤焼土器の供膳形態、8%が煮沸形態、土師器の供膳形態が4%、須恵器が2%である。174はS D79から出土した赤焼土器の壺である。破片は75点であり、87%が赤焼土器の供膳形態、5%が煮沸形態、土師器、須恵器がそれぞれ4%となっている。

175～179はS D82から出土した土器である。175は須恵器の壺で外面には手持ちヘラケズリが施されている。176～179は赤焼土器の壺で、身の浅いものはない。破片は239点の出土があり、赤焼土器の供膳形態が76%、煮沸形態が8%、土師器が11%、須恵器が5%の内訳となっている。

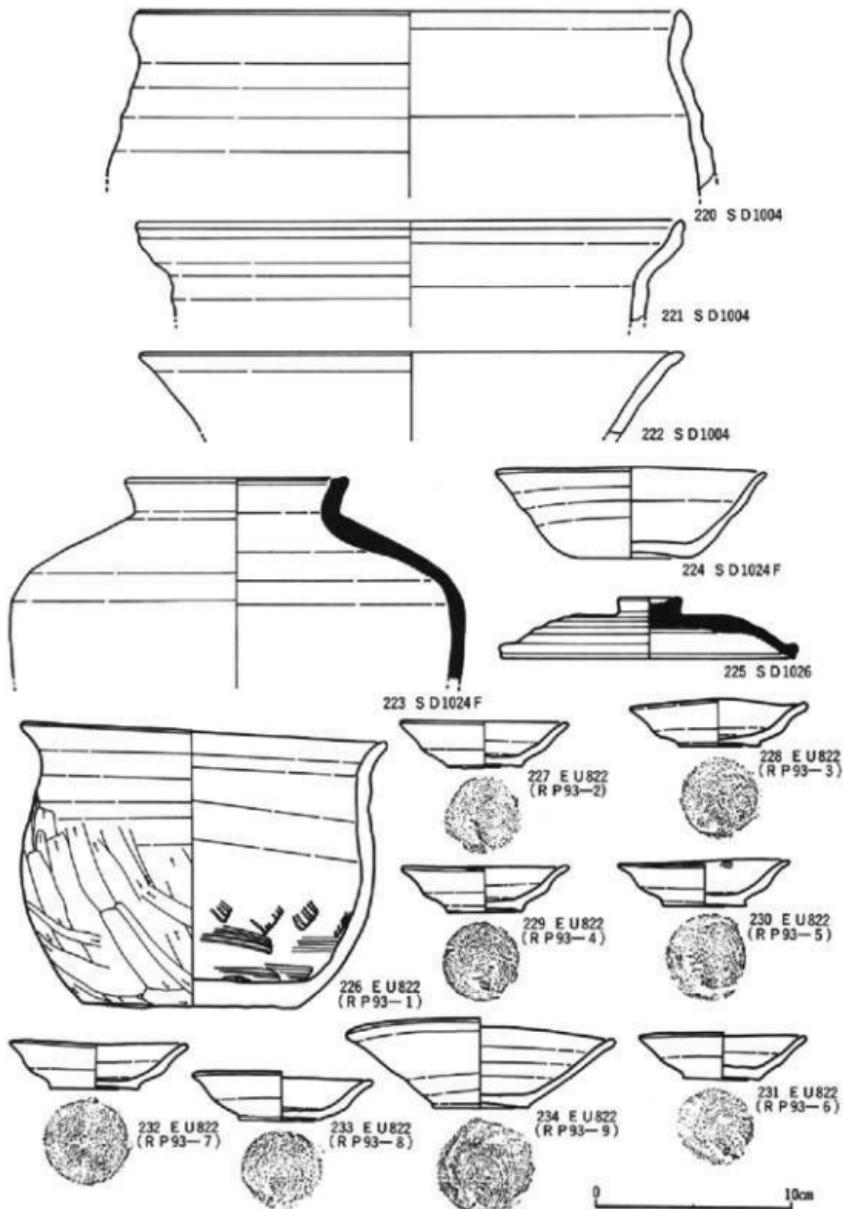
180はS D90から出土した身の浅い赤焼土器の壺である。破片は108点の出土があり、赤



第31図 土器実測図(9) 溝状遺構



第32図 土器実測図(10) 溝状遺構



第33図 土器実測図(1) 溝状遺構・特殊埋設遺構

焼土器の供膳形態が74%、煮沸形態が10%、土師器が13%、須恵器が3%となっている。

181～187はS D92が出土した赤焼土器である。187は高台付の皿であるが、他は身の深いタイプの壺である。これらは火山灰の下位からの出土である。破片は292点の出土があり、赤焼土器の供膳形態が78%、煮沸形態が13%、土師器が5%、須恵器が4%である。

188～190はS D94から出土した赤焼土器の小形皿である。これらの法量は特殊埋設遺構の小形皿に近似する。破片は122点の出土があり、赤焼土器の供膳形態が85%、煮沸形態が3%、土師器が10%、須恵器が2%となっている。191はS D96から出土した土師器の高台付壺である。破片は44点の出土があり、68%が赤焼土器の供膳形態、16%が煮沸形態、11%が土師器、5%が須恵器である。

192～202はS D97から出土した土器である。192はロクロを使っていない丸底の土師器壺で外面の体部から底部に手持ちヘラケズリ調整、内面には刷毛目調整、口縁部内外面にはヨコナデが施されている。この種の壺は本例だけである。193～195は赤焼土器の壺、196～202は小形皿である。破片は676点と多く、内訳は赤焼土器の供膳形態が84%、煮沸形態が8%、土師器の供膳形態が1%、煮沸形態が5%、須恵器が2%である。

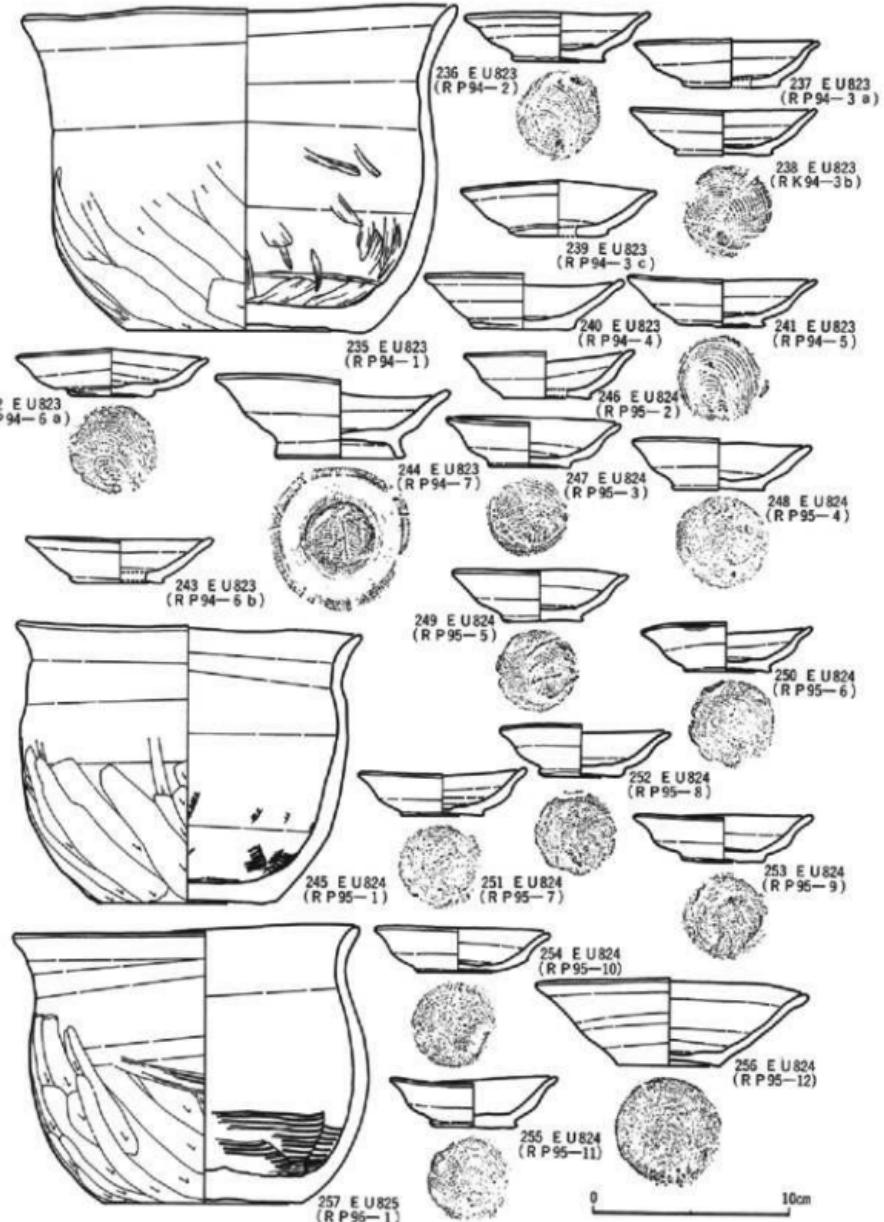
203～211はS D1002から出土した赤焼土器の壺である。法量・形ともバラツキが大きい。破片は263点で、内訳は赤焼土器の供膳形態が84%、煮沸形態が9%、土師器が6%、須恵器が1%となっている。212～222はS D1004から出土した赤焼土器である。212～219は壺で、法量・形ともバラツキがある。220は口縁部が直立し、体部のふくらむ壺、221は口縁部が「く」の字状に外反する壺、222は口縁部がわずかに外反する壺である。破片は1,414点の出土があり、87%が赤焼土器の供膳形態、9%が煮沸形態、土師器が3.5%、須恵器が0.5%の内訳となっている。

223は須恵器の短頸壺、224は赤焼土器の壺で共にS D1024からの出土である。破片数519点の内訳は、赤焼土器の供膳形態が78%、煮沸形態が9%、土師器が7%、須恵器が6%である。225はS D1025出土の須恵器蓋である。天井部外面に回転ヘラケズリが施されている。破片は123点で77%が赤焼土器の供膳形態で、煮沸形態は11%、土師器が5%、須恵器が7%で、須恵器の供膳形態が6%弱認められる。

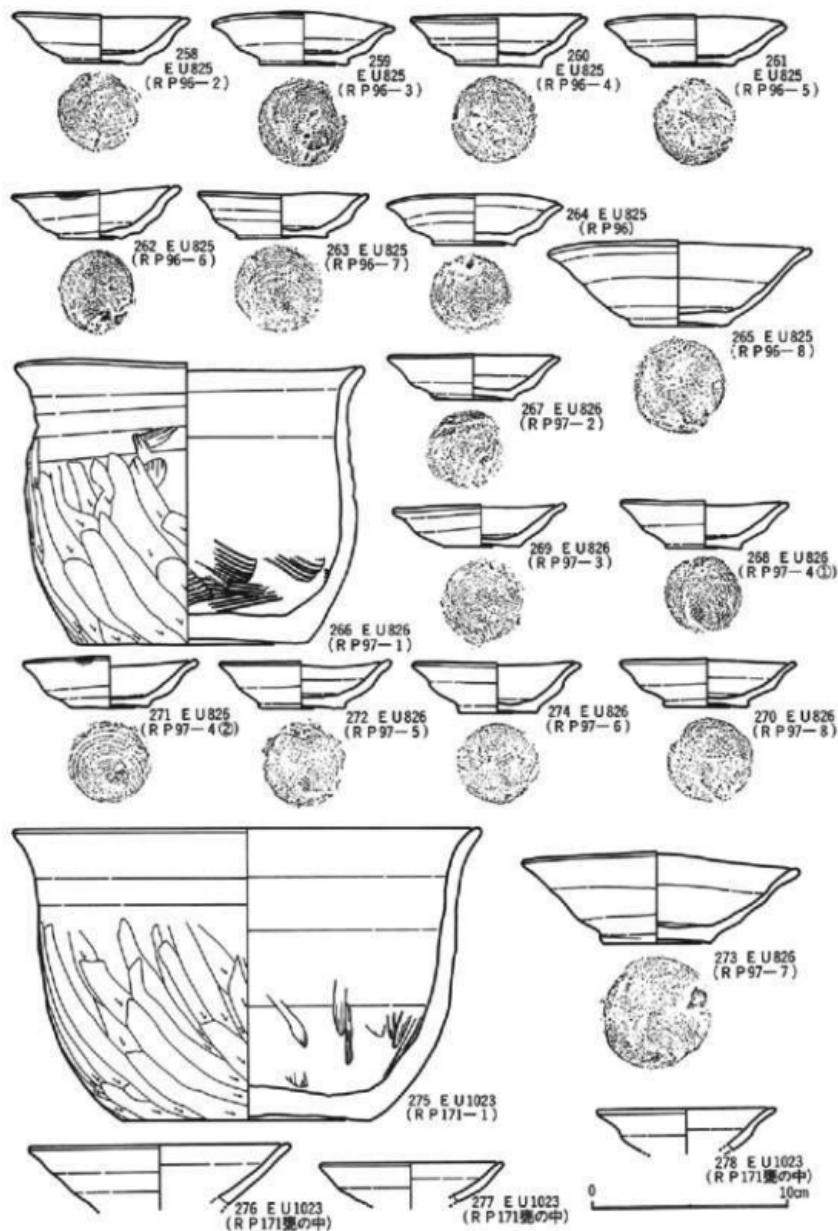
特殊埋設遺構の土器 (第33～35図226～278 表一8・9 卷頭図版2 図版18～20)

特殊埋設遺構から出土した土器はすべて赤焼土器で、器種も壺・壺・高台付壺・小形皿の4種類に限られる。

壺は各遺構から1個体の出土で計6個体である。口縁部に最大径のある中型のもので、口径が177～240mm、底径が90～124mm、器高が143～167mmと全体的に口径に比して器高の割合の小さい寸詰まり型である。245は例外的に底径が小さいが、比較的広い底部をもち体部



第34図 土器実測図(12) 特殊埋設遺構



第35図 土器実測図⑬ 特殊埋設遺構

中央が丸く張り出して頭部でややすばまり口縁は「く」字状に外反する。ロクロ整形後へラ切り離し、ナデ調整しているが、235・245・275の底面が丁寧に調整されているのに比べ226・257・266は粗雑である。体部外面中央から底部に向けてヘラケズリ・ナデが施され、内面には体部下半から底部にかけてハケメ・ナデが認められる。体部上半にロクロ痕を明瞭に残す。胎土には微礫の混入がみられ器面が粗い。法量はより大きな疊の入っていた235・275が他に比べて大きい。これらの疊は他の遺構ではなく、この遺構特有の器形といえる。

小形皿は特殊埋設遺構では42点と最も出土数が多いが、口径90mm前後、底径40~50mm前後、器高が25mm前後とほぼ共通する測値をもつ。すべてロクロ整形・回転糸切り離しで切り離し後の調整は行われない。底部から短い段をつけて緩やかに立ち上がり、体部中央で「く」字状に段を形づくり口縁部にかけて緩やかに外反する形をとる。器形・法量ともに他の遺構から出土しているものと同じである。なお、230・250・262・270には口縁部に煤の付着が認められる(実測図中スクリーン部分)。煤の付着した小形皿はそれぞれE U 822・824・825・826からの出土であるが、小形皿にしか付着痕が認められず、いずれも1基より1個体のみの出土であるという共通点をもつ。これらは燈明皿として使用されたとも考えられるが、出土のないE U 823・1023の小形皿に破片資料が多いことを考慮すれば、埋設遺構1基に1個体ずつ入れられた可能性も否定できない。

坏は4個体出土している。回転糸切り無調整で、口径135~142mm、底径49~58mm、器高25mm前後と口径に比して底径が小さい。浅い角度で立ち上がり、ほぼ直線的に外傾し口縁が開き気味になり口唇部がやや外反する。器厚は薄手である。

高台付坏はE U 823から1個体出土したのみである。亞みが大きいが底径に比して口径が小さく立ち上がりもやや急である。体部中央の段のつき方が小形皿に似る。高台部は短かめで全体的に坏よりもひとまわり小形である。

特殊埋設遺構出土の土器はいずれもほぼ共通した特徴をもち、同時期に製作されたものと思われる。

表-4 特殊埋設遺構出土疊計測表 (E U 824のa~gは疊の外部からの出土で、隠Noを付していない)

出 場	土 器	No	大きさ(mm) 周 厚	重 量(kg)	出 場	土 器	No	大きさ(mm) 周 厚	重 量(kg)	出 場	土 器	No	大きさ(mm) 周 厚	重 量(kg)		
E U 822	1	43	26	21	30.7	E U 823	7	64	53	38	171.4	3	33	28	21	24.5
	2	26	26	19	17.3		8	46	37	32	103.4	4	30	24	22	29.8
	3	39	26	20	21.3		9	63	50	37	139.8	5	46	32	22	32.3
	4	36	30	26	32.4		10	55	56	42	88.6	6	37	22	22	24.5
	5	42	26	24	29.7		11	56	48	42	68.0	7	37	32	27	36.0
	6	34	26	26	34.3		12	54	38	33	94.3	8	33	23	15	12.9
	7	28	23	21	17.5		1	32	25	19	18.4	9	34	25	22	19.1
	8	38	26	24	35.5		8	41	24	20	21.5	10	36	28	22	29.4
	9	32	23	15	16.6		b	33	32	23	28.1	1	43	38	22	34.4
	10	35	24	21	25.0		c	34	26	20	23.4	2	35	25	19	23.3
E U 823	1	66	60	38	171.0		d	31	23	26	29.6	3	35	27	21	24.2
	2	62	44	36	147.8		e	40	28	21	29.0	4	36	31	21	28.3
	3	63	52	43	110.1		f	32	26	19	17.6	5	39	27	18	24.0
	4	47	42	34	119.0		g	36	25	20	21.2	6	35	25	21	26.6
	5	56	46	35	116.6		1	32	25	20	21.7	7	35	29	22	26.2
	6	49	36	34	108.6		2	38	27	18	24.7	8	40	22	15	19.9

土器埋設ピットの土器（第36～38 表一 9・10 図版20・21）

土器埋設ピットからは赤焼土器壺・高台付壺・小形皿・器台が出土している。すべて底部は回転糸切り離しで、切り離し後の調整は行われない。

S P 102 (第36図279～281)

壺3個体の出土で、器高が50mm前後でやや深く、内湾気味に立ち上がり、口唇部がわずかに外反する。中でも279は法量が大きい。

S P 140 (第36図282～285)

壺3個体・高台付壺1個体の出土である。壺は直線的に外傾するもの（282）と立ち上がりに丸味をもつて口唇部がわずかに外反するもの（283・285）がある。高台付壺（284）は口径153mm、付高台で壺に比べ口縁の開きがやや大きい。

S P 190 (第36図286～291)

出土した壺6個体ともほぼ共通した特徴をもつ。すなわち底部から低い段をつけて立ち上がり、体部にわずかに丸味をもたせて口縁が横に張り出す形である。内面に立ち上がりのラインが明瞭につく。器厚が薄く器高も34～36mmと低い。法量差もほとんどない。

S P 466 (第36図292～294)

壺2個体・高台付壺1個体の出土であるが、293はロクロ痕が明瞭に残り、法量に比して器厚の厚い壺である。292は底部を欠くが上半部は直線的に張り出す形となる。294は口径153mmで形態・法量とともに284に似る。

S P 930 (第37図295～297)

出土した壺3点はいずれも内湾気味に急角度で立ち上がり、口縁部でやや肥厚し外反する。法量は土器埋設ピットの中ではS P 102とともに最大である。

S P 976 (第37図298～302)

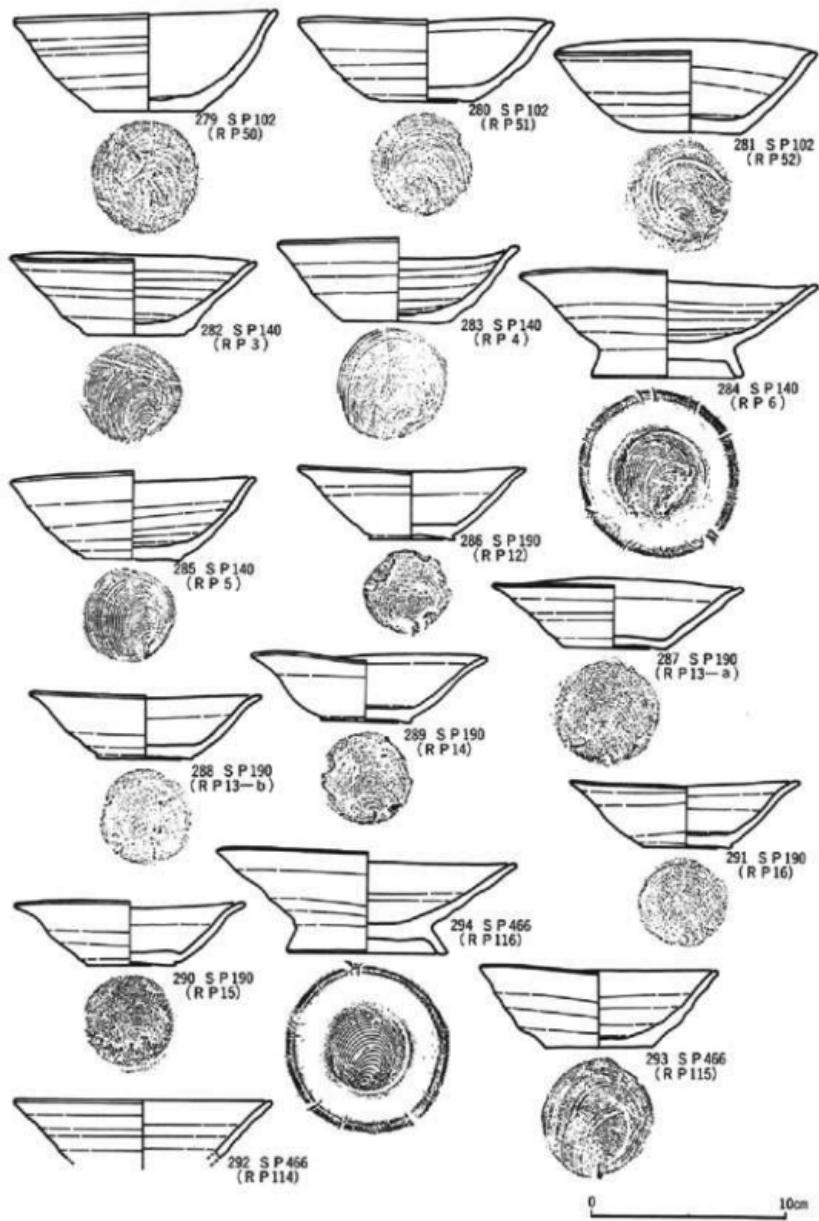
出土した壺5個体は口縁の開く角度がやや大きいが、形態・焼成・法量等の点ではS P 190出土のものと同じである。

S P 982 (第37図303～305)

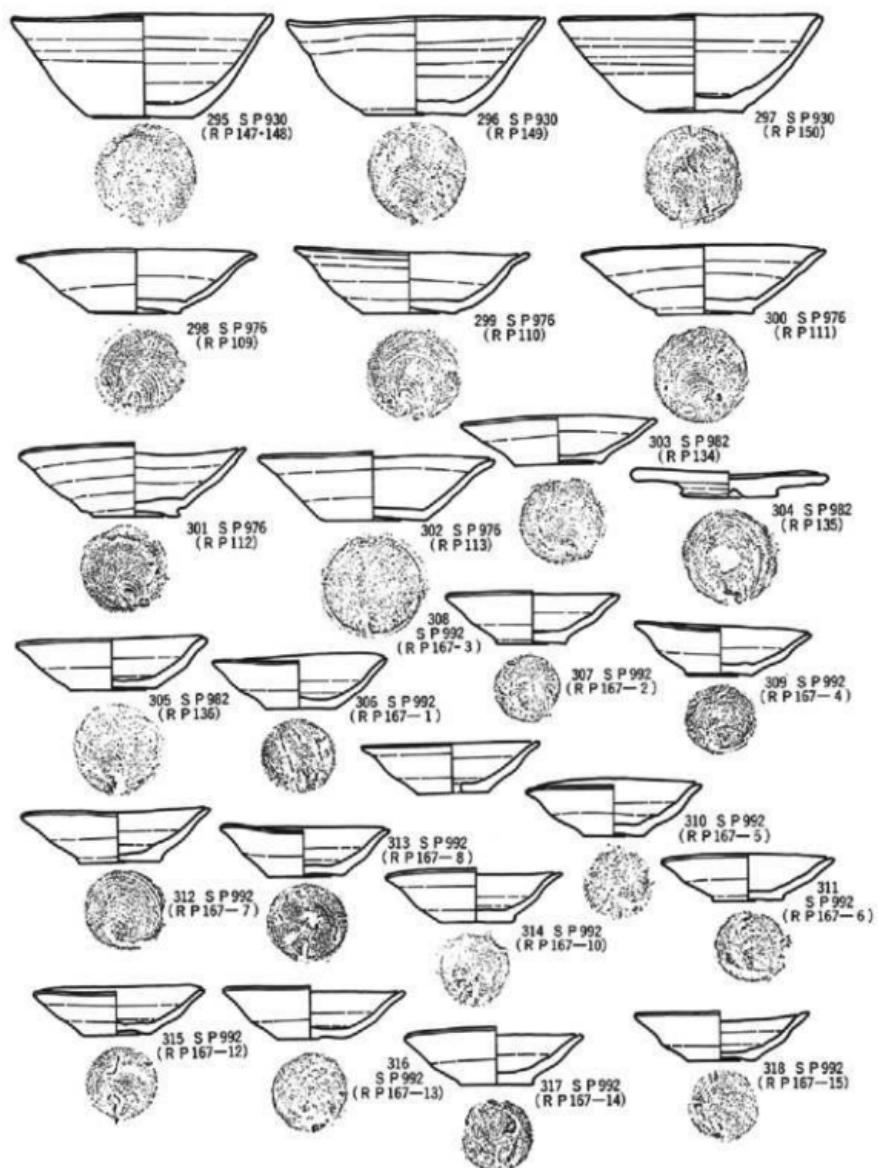
この遺構では器台1個体・小形皿2個体が出土している。304の内面はほぼ扁平だが中央部がやや窪み、張り出した扁平な底部を有する。303・305は口径約100mmと他の遺構出土の小形皿に比べると若干大きいが形態的には同じである。

S P 992 (第37・38図306～329)

小形皿のみ24個体の出土である。口径約90mm、器高約25mm前後と特殊埋設遺構出土のものと共通するが、底径が34～40mmとひとまわり小さい。破片資料が多いが出土土器の中で煤付着痕を有するものは認められなかった。

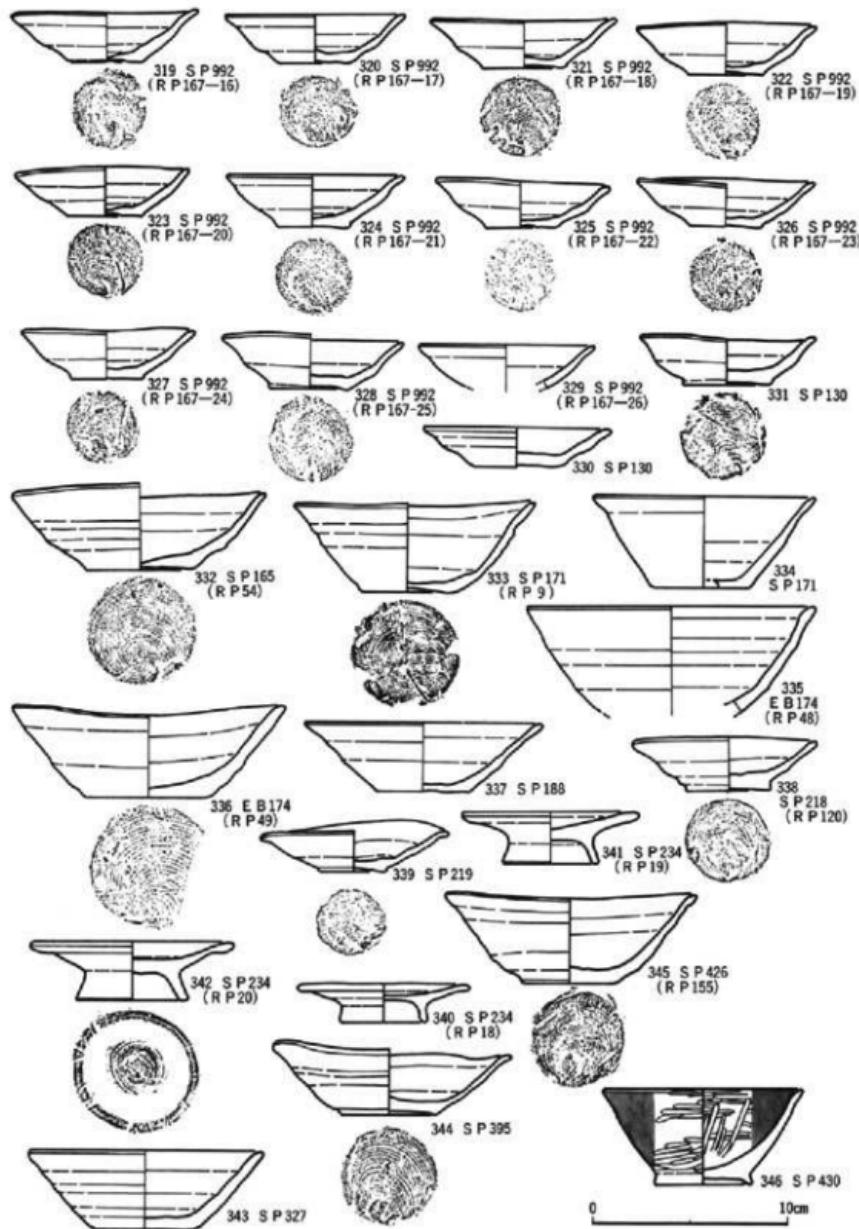


第36図 土器実測図14 土器埋設ビット

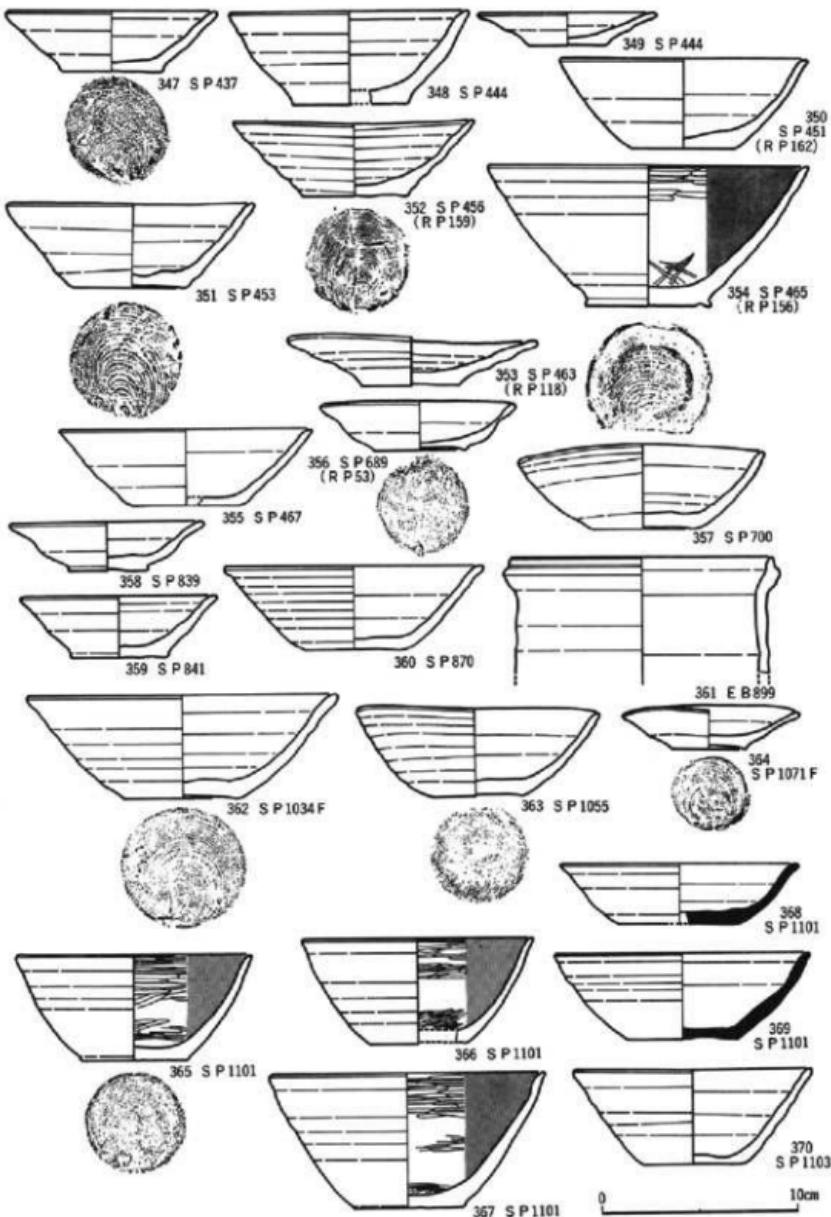


0 10cm

第37図 土器実測図15 土器埋設ピット



第38図 土器実測図10 土器埋設ピット・ピット



第39図 土器実測図(17) ピット

ピットの土器 (第38・39・51図 表-10・11・17 図版16・22・23)

遺物が出土したピットや、単独の掘り方は全部で935基であったが、そのうち、完形土器や実測可能な土器が出土したものは31基である。また、各ピットの破片の集計も行っているが紙数の関係で、割愛せざるを得なかった。図示した土器の多くは、建物跡の掘り方や土壤、溝状遺構跡から出土したものと、ほとんど変わるものではなく、破片の組成もほぼ同じであるため、個々の説明を省くが、S P 1101から出土した土器群はやや様相を異にしていると思われるので以下に記す。

S P 1101は34—7区で検出された直径38cm、深さ49cmのピットで、この中位から下位にかけて多くの土器が出土している。完全な形になるものはなく、埋設されたものではない。365～367、602、603は土師器の壺である。365・366は小形の、367・602は大形の壺で内面のミガキは中心部から放射状になるものはない。土師器の底部破片は3片であるが、高台の付いたものはない。368・369・605・606は須恵器の壺である。368はヘラ切り、他は回転糸切りである。607・608は赤焼土器の壺である。赤焼土器の壺の破片は105点の出土があるが、これらの口縁部資料や、底部の立ち上がり状況から判断すると、これらの器形は、口径が小さく、器高の高い身の深いものとなり、身の浅い壺や小形皿等は含まれていない。破片資料は174点で、その内訳は赤焼土器の供膳形態が63%、煮沸形態が7%、土師器が26%、須恵器が4%となっており、赤焼土器の比率は他の遺構に比べ低い。

落込みの土器 (第40～46・51図 表-11～13・17 図版16・17)

落込みは42基登録したが、このうち実測可能な土器が出土したものは19基である。

371はS X 184から出土した赤焼土器の壺である。このほか赤焼土器の壺の破片が出土している。372はS X 223から出土した赤焼土器の壺である。破片は赤焼土器の供膳形態が24点、土師器の供膳形態が5点である。373はS X 238から出土した大振りな赤焼土器の壺である。破片は26点であり、65%が赤焼土器の供膳形態である。374はS X 239から出土した平底の須恵器壺である。外面、底部とも平行タタキが認められ、底部の中央部はナデによってタタキが消されている。破片は87点の出土があり、赤焼土器の供膳形態が84%、煮沸形態が8%、土師器が7%、須恵器が1%である。

375～378はS X 631から出土した土器である。375の須恵器壺は体部外面に格子目タタキ、内面に平行アテが施され、強く外反する口頸部は短かい。376～378は赤焼土器の壺である。破片は486点が出土しており、87%が赤焼土器の供膳形態、6%が煮沸形態、土師器が6%、須恵器が1%である。379はS X 643から出土した身の浅い赤焼土器の壺である。破片は116点であり、赤焼土器の供膳形態が78%、煮沸形態が13%、土師器が6%、須恵器が3%となっている。380はS X 735から出土した身の浅い赤焼土器の壺である。破片は赤焼

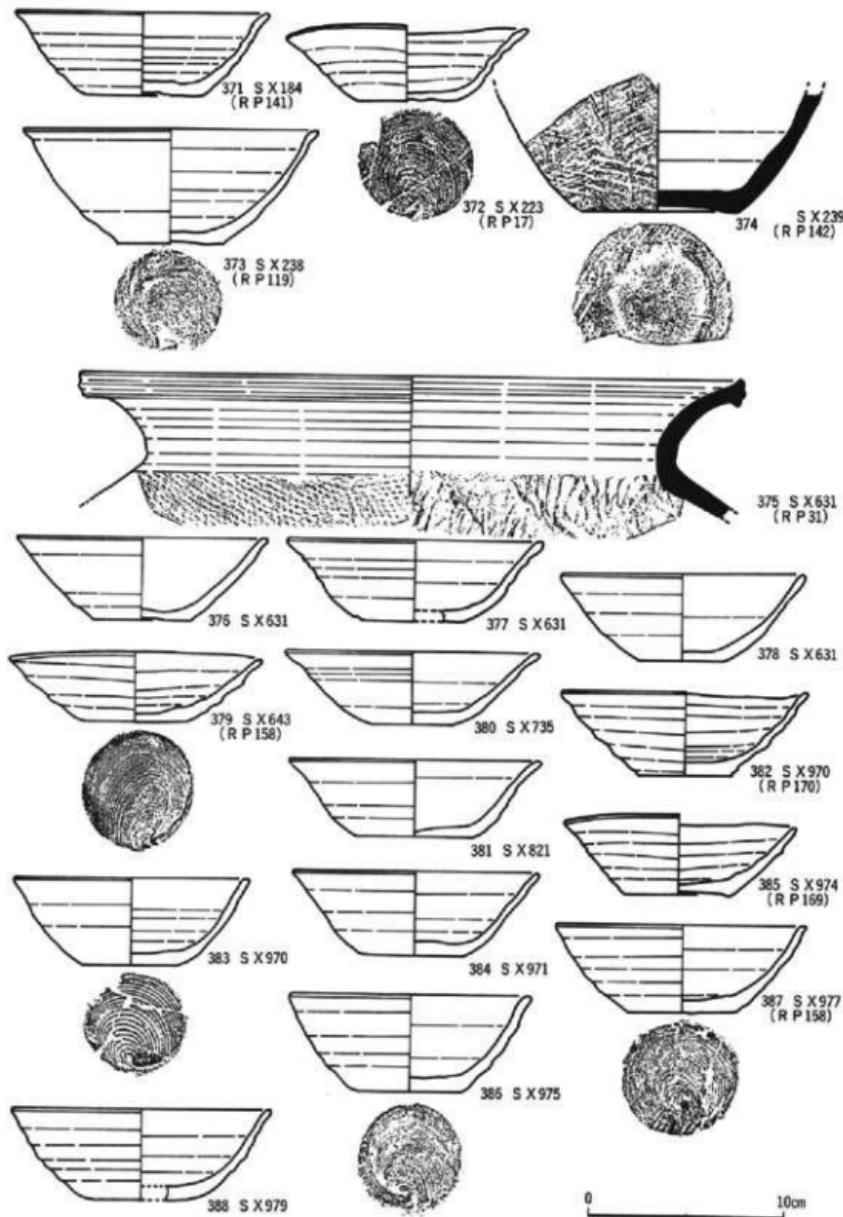
土器の坏が4点である。381はS X821から出土した赤烧土器の坏である。

382・383はS X970から出土した赤烧土器の坏で、破片総数166点のうち、95%が赤烧土器の供膳形態である。384はS X971から出土した赤烧土器の坏で、破片は54片で赤烧土器の供膳形態が82%を占めている。385はS X974出土の赤烧土器の坏で、破片は赤烧土器の坏が3点である。386はS X975出土の身の深い赤烧土器の坏で、破片総数78点の86%が赤烧土器の供膳形態である。387はS X977出土の赤烧土器の坏で、破片は2点である。388・389はS X979出土の赤烧土器の坏である。破片は144点の出土があり、84%が赤烧土器の供膳形態、9%が煮沸形態、土师器が4%、須恵器は3%である。

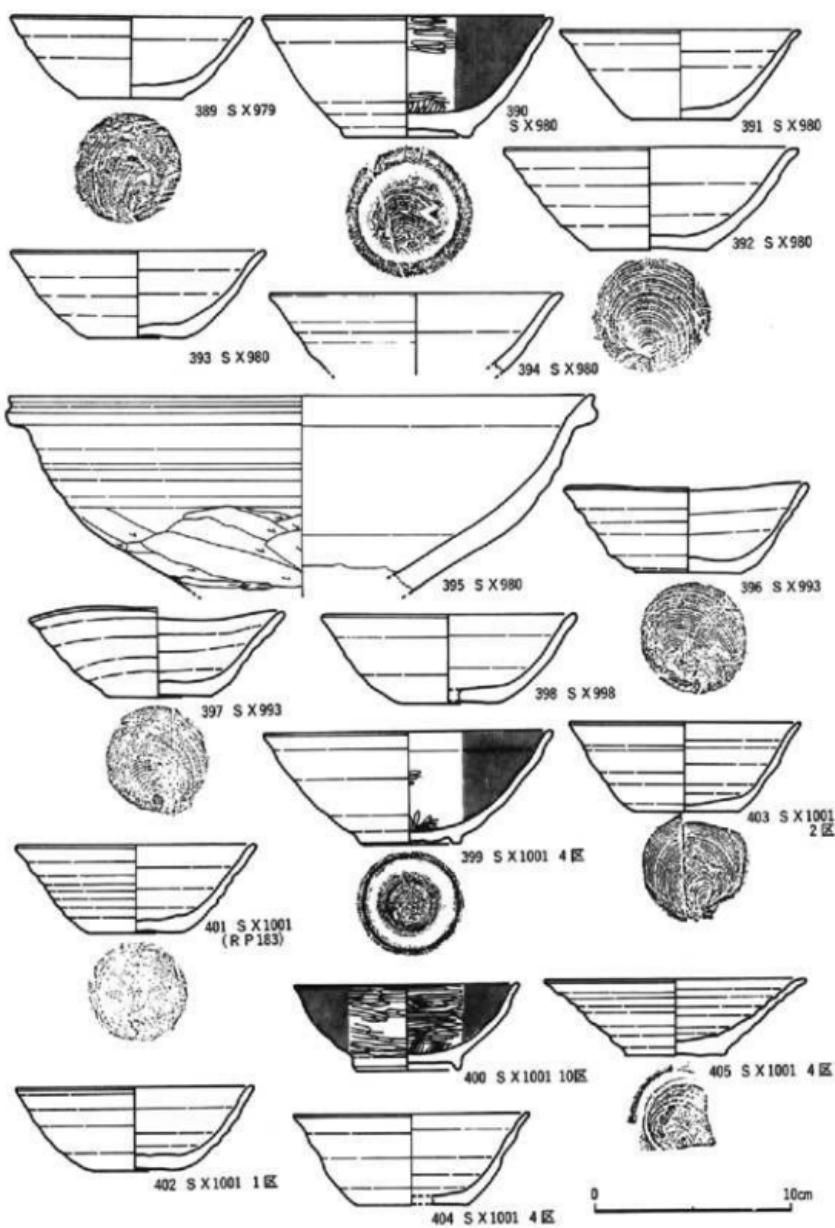
390～395はS X980a・b・c・dの各造構の土器であるが、土器を各々に分けることはできなかった。390は土师器の高台付坏、391～384は赤烧土器の坏で382・384は大振りである。395は赤烧土器の壺である。肥厚する口縁部が短かく外反し、体部下半にはヘラケズリが施されている。破片は1,090点の出土があり、83%が赤烧土器の供膳形態、10%が煮沸形態、4%が土师器、3%が須恵器となっている。396・397はS X993出土の赤烧土器の坏である。破片は234点で、赤烧土器の供膳形態が87%、煮沸形態が6%、土师器が6%、須恵器が1%である。398はS X989出土の赤烧土器の坏で、破片は10点である。

399～417はS X1001から出土した土器である。399は内面に、400は外外面に黒色処理の施された土师器の高台付坏である。402～413は赤烧土器の坏、414は高台付である。416は口縁部が短かく強く外反し、内側に明瞭な段を形成する中形の壺で、415は外反の度合が弱い。417は「ハ」の字形に開く高台をもつ鉢で、外面の体部下半にはヘラケズリが施されている。破片は9,965点の出土があり、内訳は赤烧土器の供膳形態が83%、煮沸形態が10%、土师器の供膳形態が5%、須恵器が2%となっている。

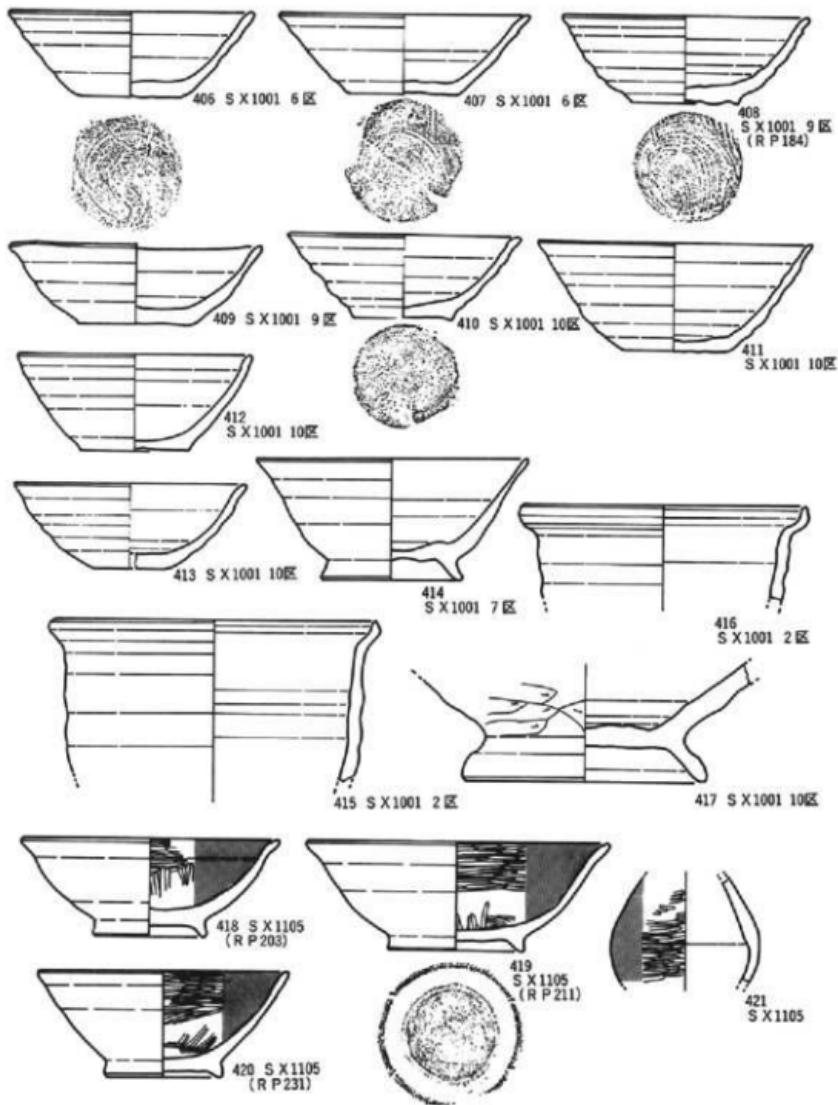
418～509はS X1105から出土した土器である。この造構は一部の調査にとどまったが、多量の土器が出土した。418～420は土师器の高台付坏で、法量はまちまちだが、いずれも壺状の形態となる。421は壺形となる土器の体部資料で、外面に丁寧なヘラミガキが施された後、黒色処理が施されている。422・423は須恵器大壺の口頭部資料である。422の頭部はタキ締めの後、ロクロ整形となり、423にはやや乱れた波状文が2段施されている。424～426、428～434は赤烧土器の坏で、ゆるい立ち上がりで、そのまま外傾する身の浅いものが多い。435～442は赤烧土器の高台付坏で、いずれも「ハ」の字形の高い高台を有し、ゆるく立ち上がって、そのまま外傾する身の浅いものが多い。427、443～497は小形皿で、これらは、外反しながら立ち上がって、そのまま口縁部に至るもの（470・483・492）、浅く立ち上がり、器高の低いもの（448・461・477・480・486）、底部が厚く、柱状高台付小形皿との中間形態となるもの（455・456・460）、特殊埋設造構や、S P992と同じタイプのも



第40図 土器実測図18 落込み



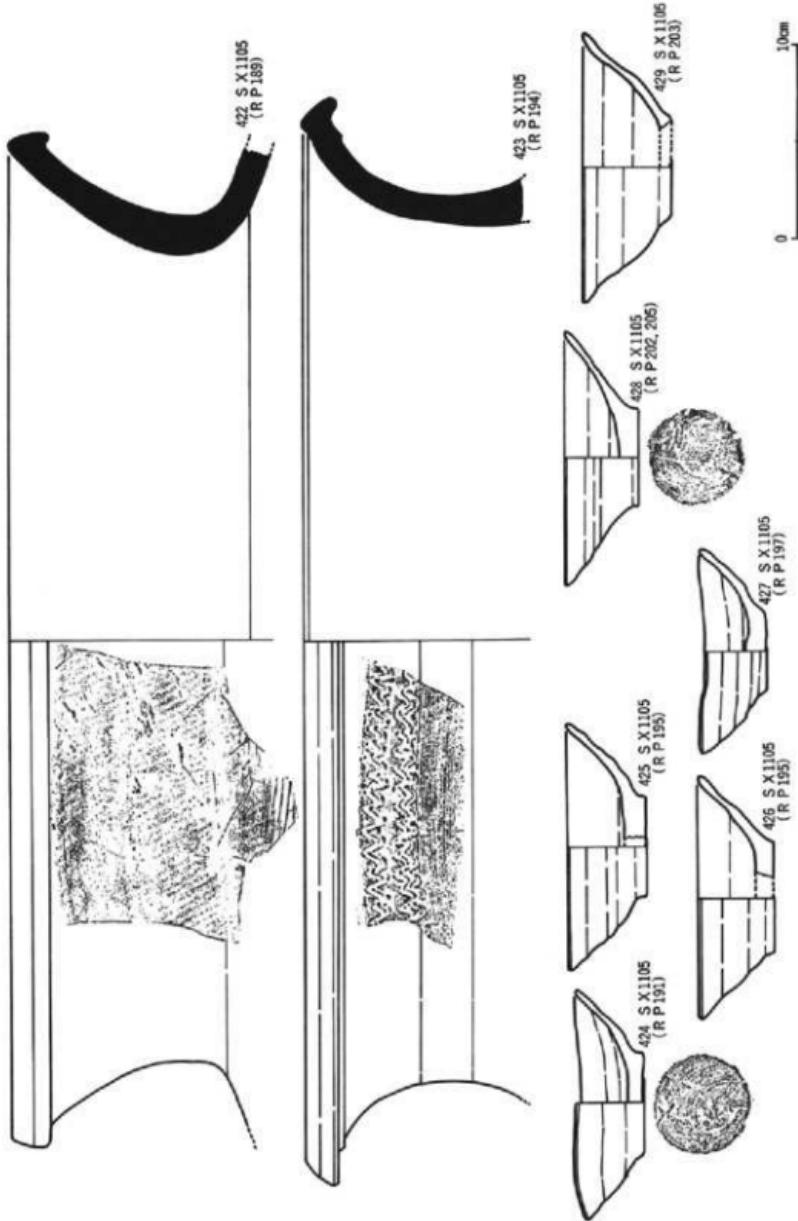
第41図 土器実測図19 落込み

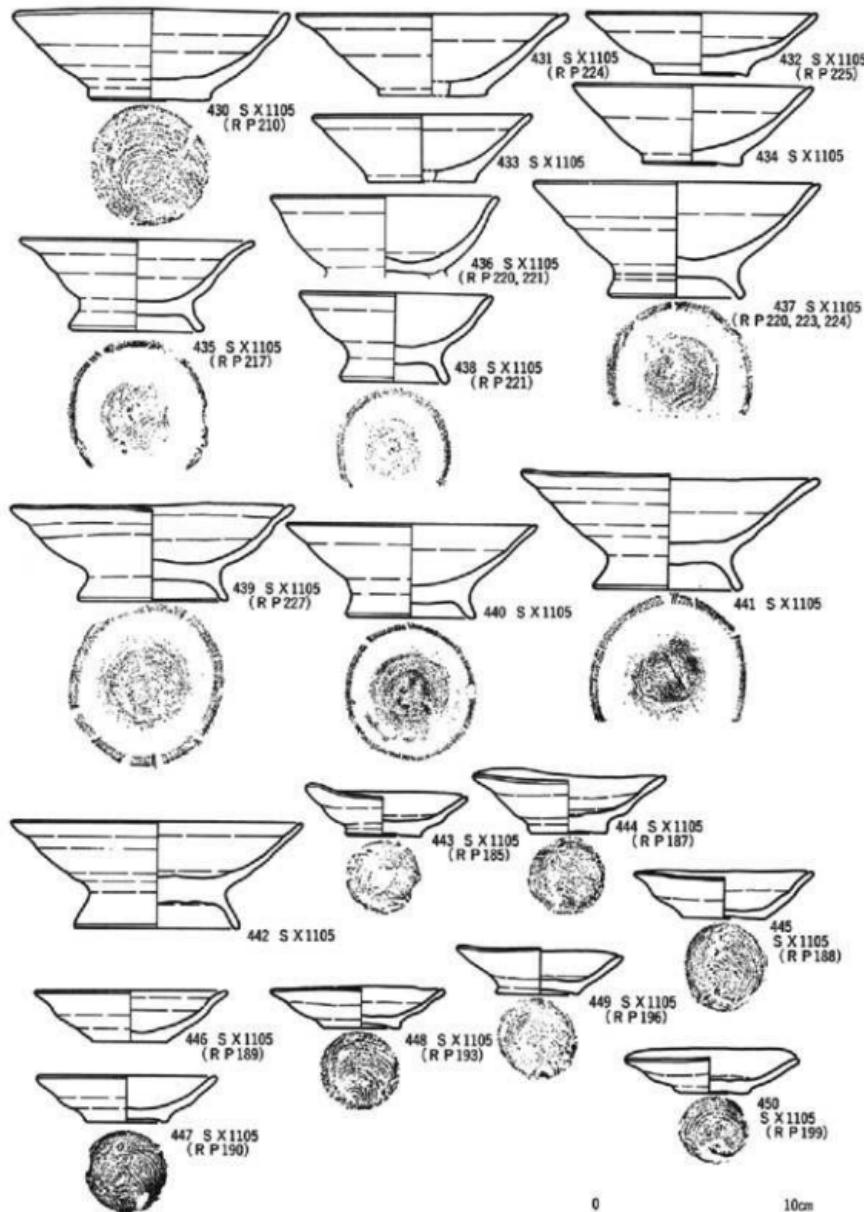


0 10cm

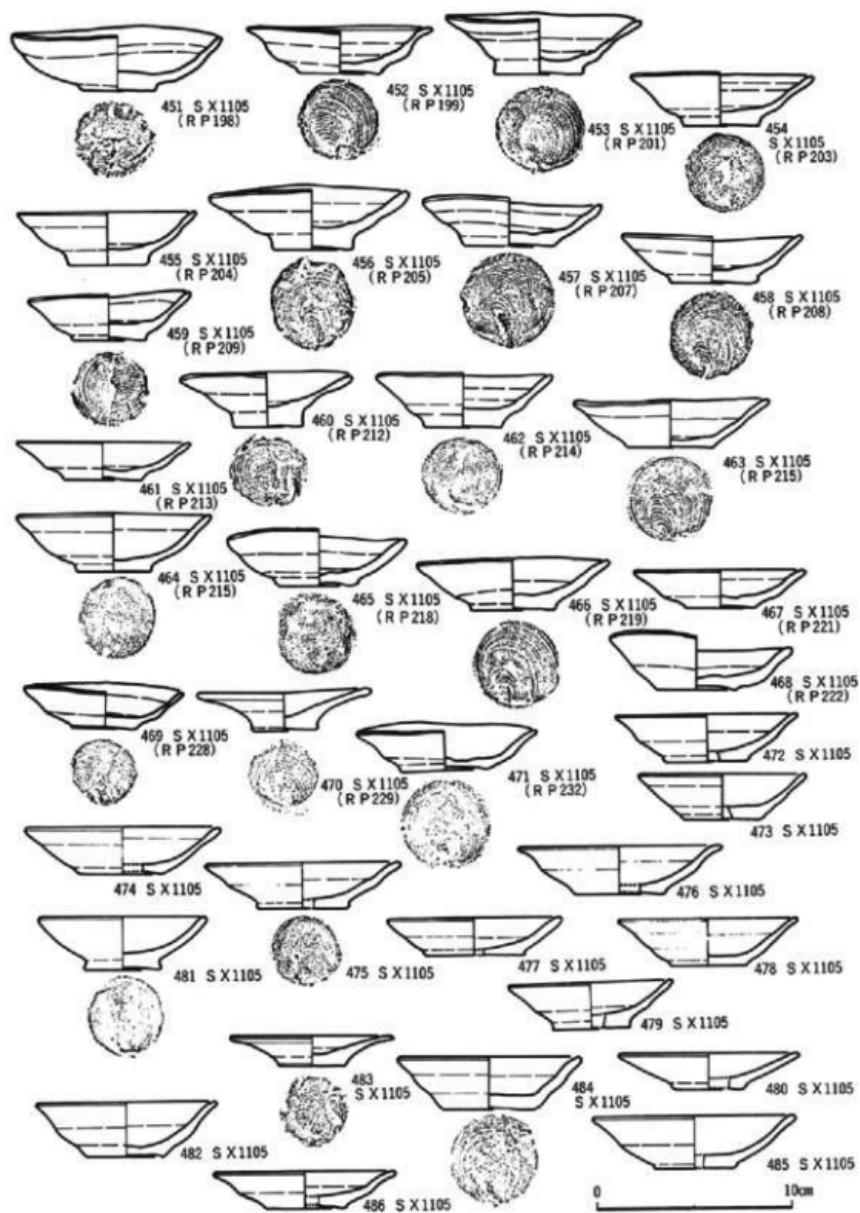
第42図 土器実測図(2) 落込み

第43図 土器実測図2 落込み

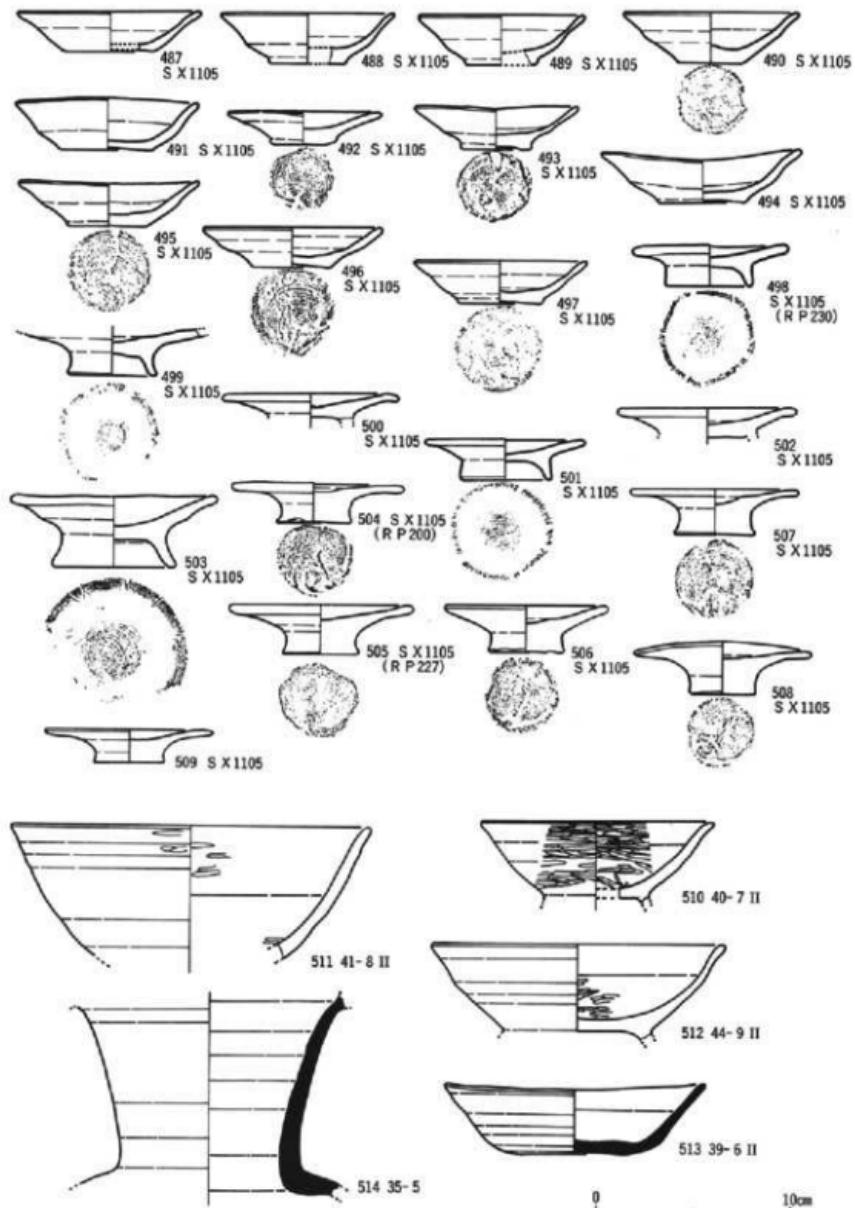




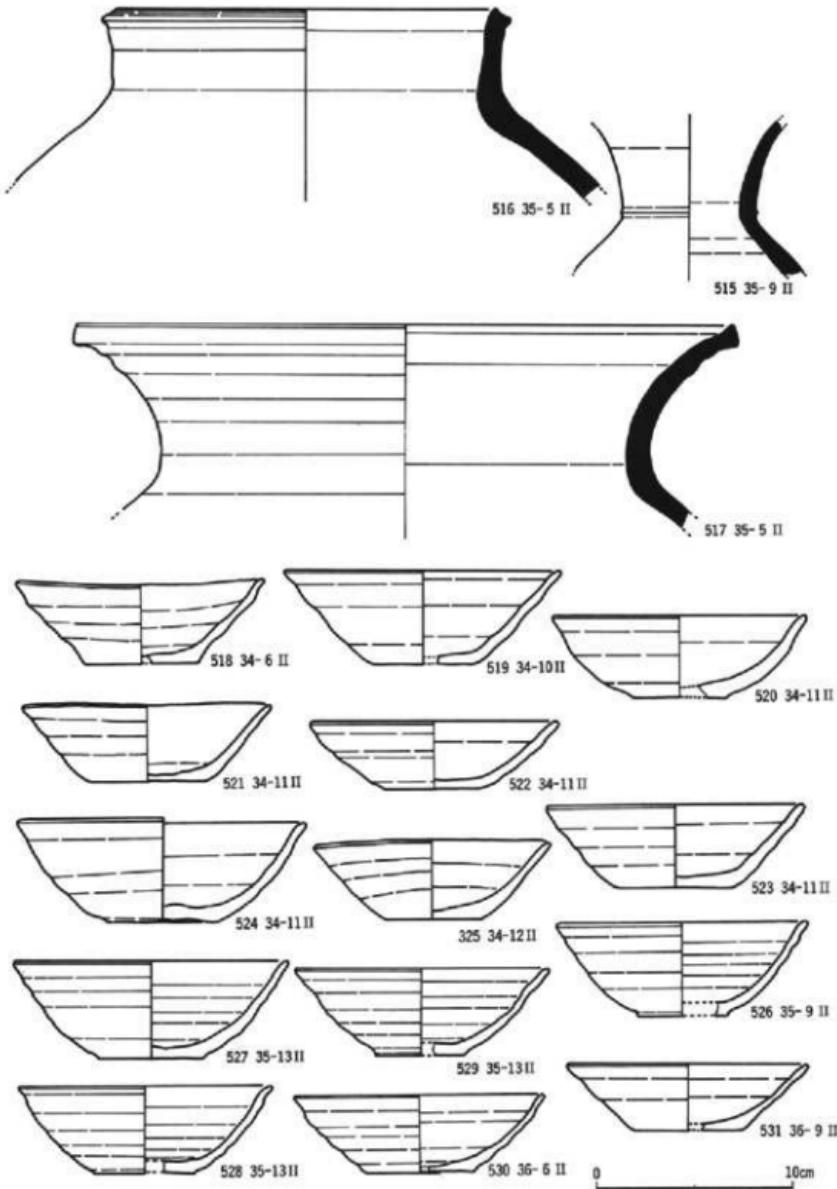
第44図 土器実測図(2) 落込み



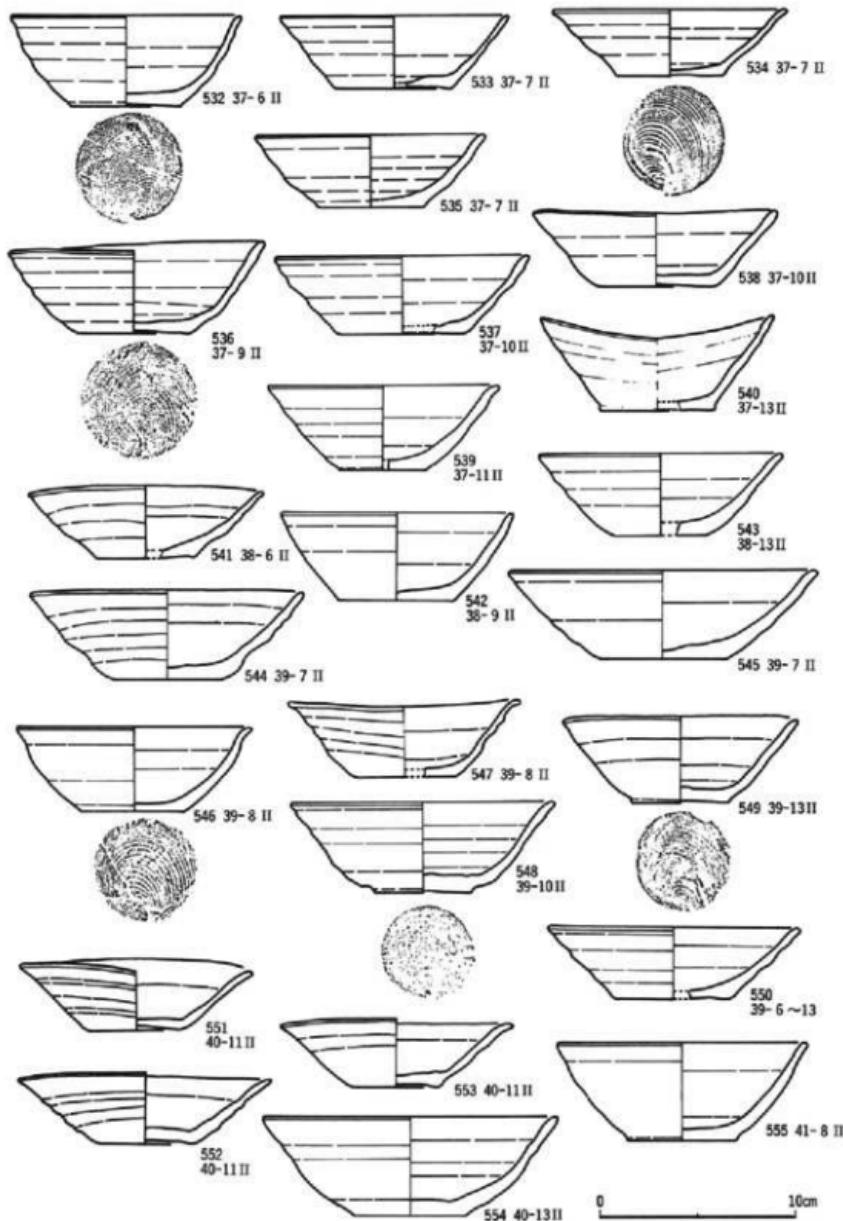
第45図 土器実測図(3) 落込み



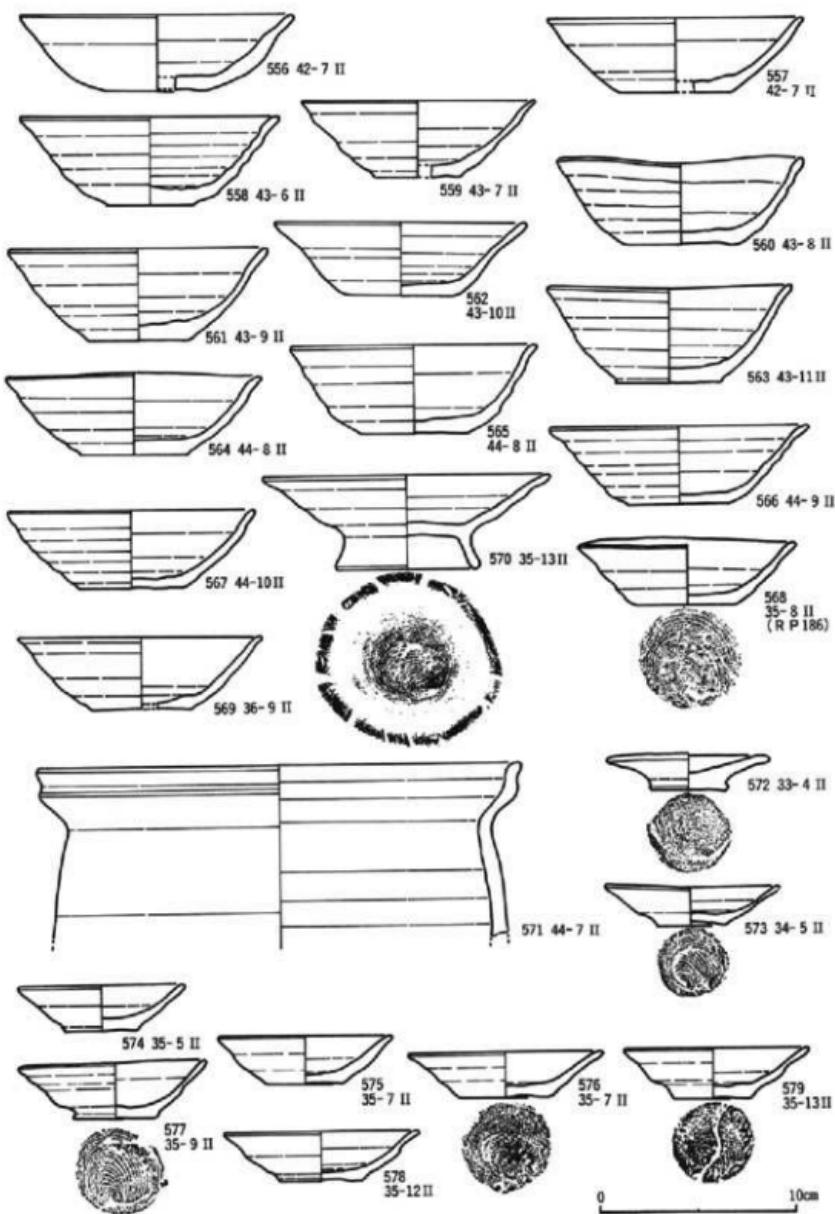
第46図 土器実測図24 落込み・遺構外



第47図 土器実測図(四) 遺構外



第48図 土器実測図(29) 遺構外



第49図 土器実測図(刀) 遺構外

の（上記以外）の四形態があり、前三者は本遺構特有のものである。498～503は高台付の小形皿、504～509は柱状高台付の小形皿である。柱状高台のつくものも、本遺構以外には出土していない。破片は2,110点の出土があり、85%が赤焼土器の供膳形態、8%が煮沸形態、土師器の供膳形態が4%、須恵器が3%である。

遺構外から出土した土器（第46～50図・51図 表一13・14・17 図版17・22）

東区での粗掘りや遺構確認作業で出土した土器のなかで実測できた土器は土師器3、須恵器5、赤焼土器73の合わせて81個体であり、このほか、墨書き土器10点についても図化を行った。

510は内外面にヘラミガキが施された土師器の高台付坏である。内面に赤色顔料の残片が確認され、あるいは赤彩があったかも知れない。511は器面の荒れが著しいが、内外面に部分的にヘラミガキが観察される。黒色処理はない。512は内面にだけヘラミガキが施された身の浅い高台付坏で、黒色処理はない。

513は回転糸切りによって切り離された底径の大きな須恵器坏である。514・515は須恵器の壺で、515の頸部と体部の境界には1条の凸帯が巡っている。516は口頸部が直立する。また、517は外反する須恵器の壺である。

518～569は赤焼土器の坏であるが、法量・形ともまちまちであり、多様性が認められる。570には「ハ」の字形の高い高台が付けられており、身は浅い。572～584は小形皿で口径は83～100mm、底径は35～45mm、器高は20～30mmを測る。585・586は高台付皿である。586は内面中央から一気に外反し、「ハ」の字形の高い高台が付けられており、菊花状のナデツケが観察される。587・588は高台付小形皿である。

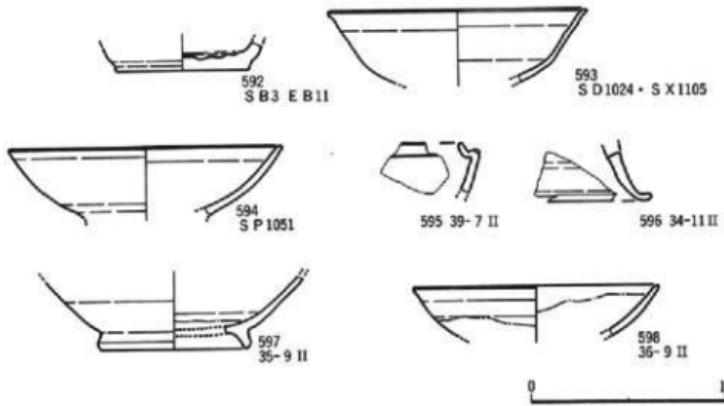
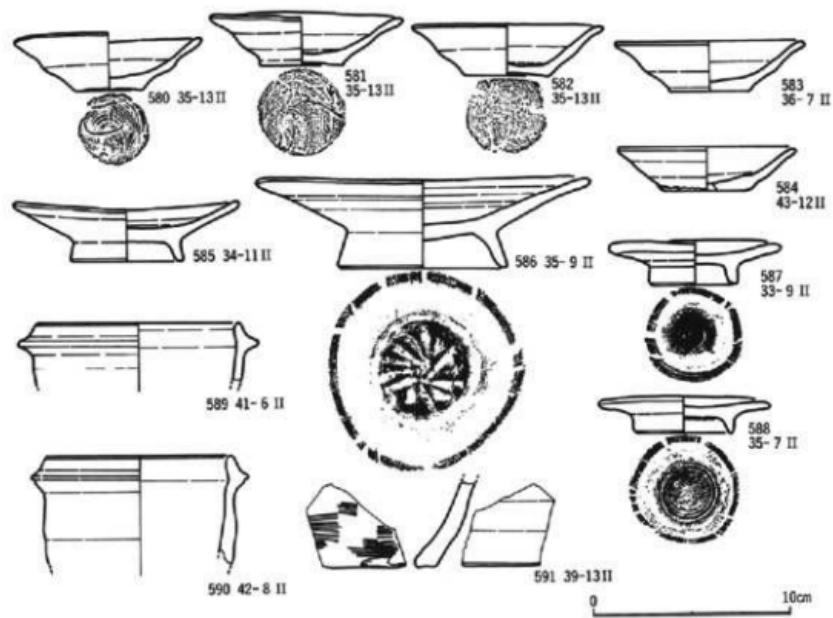
571は赤焼土器壺の口縁から体部上半にかけての破片資料である。「く」の字状にゆるく外反し、さらに上方に折り曲がる口縁を持つ。589・590はそれぞれ口径112mm、96mmを測る小形の羽釜である。羽釜と確認できたものはこの2点だけである。591は外面にカキメが観察される甌とみられる破片である。

破片資料は全部で35,039点で東区の破片の約半数を数える。このうち約74%が赤焼土器の供膳形態で、赤焼土器の煮沸形態が15%、土師器の供膳形態が5%、須恵器が6%となつており、須恵器の供膳形態は約1.2%にすぎない。

（2）施釉陶器・磁器（第50図 卷頭図版1・2 表一15）

東区からは施釉陶器が53点、越州窯産と考えられる青磁が4点出土している。これらのなかには遺構内から出土したものもあり、これらが出土した遺構の埋没年代も共伴する土器群も、原則としてこれらの製作年代を測ることはない。

施釉陶器は彦藤孝正氏の御教示によると、9世紀第4四半期に位置づけられるK-90号



第50図 土器実測図(2) 遺構外、施釉陶器

窯式から10世紀末葉の虎渓山1号窯式までのものがあり、緑釉陶器では、塊、皿、水注、香炉が、灰釉陶器では塊、瓶の各器種の存在が確認されている（表-15）。

猿投窯K-40号窯式のものは水注の底部（第50図592、巻頭図版の番号1）と香炉の口縁部（593、2）、同じく脚部（594、3）の3点であり、塊、皿はない。

尾北窯S-4号窯式のものは、9世紀の第4四半期に位置づけられる塊が1点（595、4）、10世紀の第2四半期の塊、皿が13点（5～17）出土している。同じく10世紀の末葉に位置づけられるS-27号窯式のものが1点（18）出土している。

美濃窯の緑釉陶器は10世紀末葉の虎渓山1号窯式に位置づけられる塊・皿が19点（19～37）出土している。

灰釉陶器はすべて美濃窯であり、10世紀の第2四半期の大原2号窯式の塊が6点（38～43）、瓶が1点（44）、10世紀の末葉に位置づけられる虎渓山1号窯式の塊が8点（596～598、45～53）出土している。

越州窯と考えられる青磁の器種は碗であり、4点のうち1点（54）がSX1001の堆積土からの出土であり、他の3点（55～57）は遺構外から出土した。

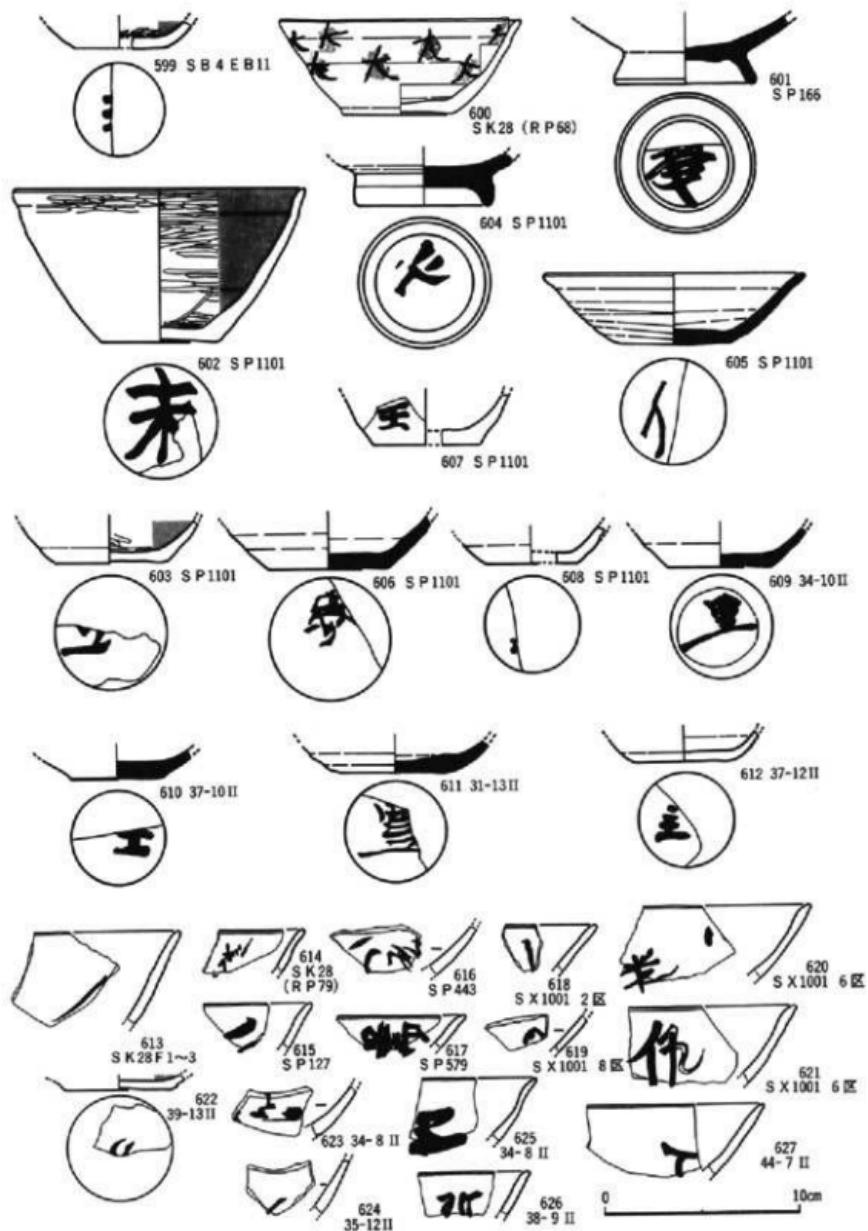
これらの年代的な位置づけにより、地震によって変形を受けた掘り方をもつSB3と、SB5は10世紀の第2四半期を離れず、小形皿や柱状高台のついた皿が多数出土したSX1105は10世紀末葉を通過することはできないと考えられる。

（3）墨書き土器（第51図 表-14 図版22・23）

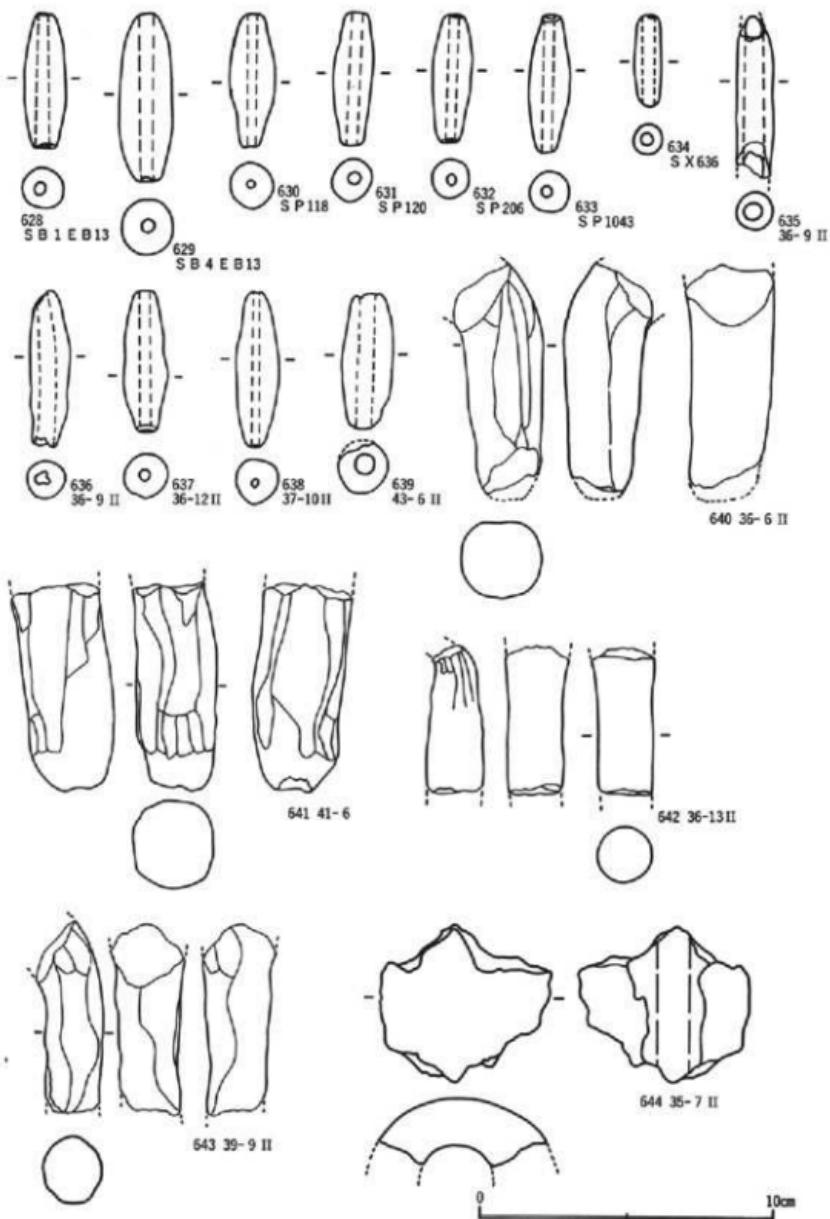
東区から出土した墨書き土器は29点である。すべて供膳形態の土器であり土師器が4点、須恵器が7点、赤焼土器が18点である。また、書かれている部位をみると、底部外面が13点、体部外面が16点となり、土師器、須恵器はすべて底部外面となる。

出土した場所は、掘立柱建物跡の掘り方（SB4E B11）から1点、土壤（SK28）から3点、ピットから11点（SP1101が7点、SP127・166・443・579から各1点）、落込み（SX1001）から4点、遺構外から10点となっており、特定の遺構に集中する傾向が認められる。

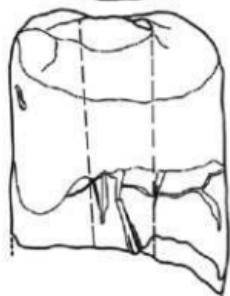
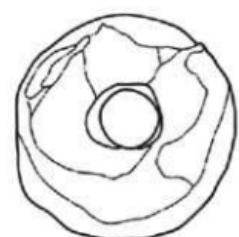
文字は判読できないものが多いが「大」（600）、「未」（602）、「王」（607）、「豊」（609、611）、「主」（612）があり、注目すべきことは二文字以上の文書の一部と考えられるものの存在である。614は図では逆転すれば「如件」と読みそうであり、616・617・620等も二文字の可能性がある。600は赤焼土器の体部上半部に「大」を7回書いており、うち、図の左端の一字を除き、墨が塗られて消されている。習書と考えられる。文書形式が認められること、習書したものがあることは、本遺跡が文書を作成する場所であったことを示唆している。



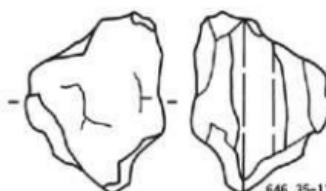
第51図 墨書き土器実測図



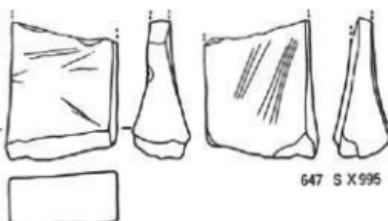
第52図 土製品実測図(1)



645 S X 1105 (R P 206)



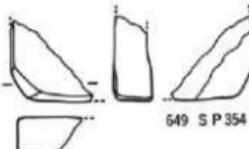
646 35-13II



647 S X 995



648 35-12II



649 S P 354



650 S D 59 (R Q 10)



第53図 土製品実測図(2)・石製品実測図(1)

(4) 土製品、石製品 (第52~54図 図版23・24)

東区で出土した土製品には土錘、土馬、フイゴの羽口、また、石製品には砥石、紡錘車石帶がある。

608~639は土錘である。長さは最小31mmから最大56mmであるが、45~55mmの間に集中する。また、重さも完形品で7.3~17.1gとなるが、629と634を除けば、7.3~10.6gと変異差は少ない。これらはいずれも棒に粘土を巻きつけて手指で整形したものと思われる。

640~643は土馬の足とみられる土製品である。胎土や焼成からみて4点とも別個体である。土馬は9世紀代には小形化して9世紀末~10世紀初頭には消滅するといわれている(小笠原1975)。しかし、後述するように東区の土器群の年代は10~11世紀と考えられ、9世紀代に遡れる可能性のあるものは少なく、これまでの研究成果と矛盾することになる。また、頭部、胴部、尾部の出土ではなく、土馬の足以外の土製品である可能性も否定できないが、現在までの知見による限り、土馬以外のものを想定することは困難である。

644~646はフイゴの羽口である。645は表面が高温によってガラス状に変質しており、直徑73~76mmで風孔径は21~24mmを測る。

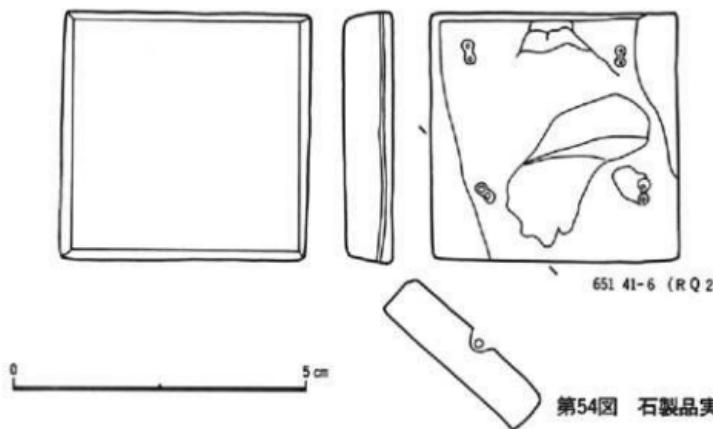
647~649は砥石である。3点とも肌理の細い石材であり、仕上砥の部類に入る。

650は紡錘車である。やわらかい泥岩製で直径104mmの円盤状を呈する。中央部の最も厚いところで、22mmを測る。中央の孔の内径は9~10mmである。

651は石帶である。粘板岩製で一辺41.8mmの正方形で厚さ7.7mmを測る。表面と側面は良く磨かれて光沢があり、裏面には四隅に2個1対の留穴が認められる。

(5) 人骨 (図版21)

図版21の最下段右はS X751、SD70(右端の1点)から出土した人骨片である。頭骨片もある。すべて焼けており、火葬骨と考えられる。



第54図 石製品実測図(2)

VI 西区の遺構と遺物

1 遺構 (第5図 図版2)

西区で検出した遺構は溝状遺構3基と、落込み1基、ピット16基である。溝状遺構は調査区の北半に、また、ピットは南半に分布している。

S D2001は幅40~100cm、深さ4~11cmの浅い溝で東部は調査区外へと延びている。

S D2002は幅30~70cm、深さ6~11cm、長さ13m 8cmを測り、西部では北側に張り出す。

S D2003は幅47~205cm、深さ6~10cm、長さ8m 30cmを測る。

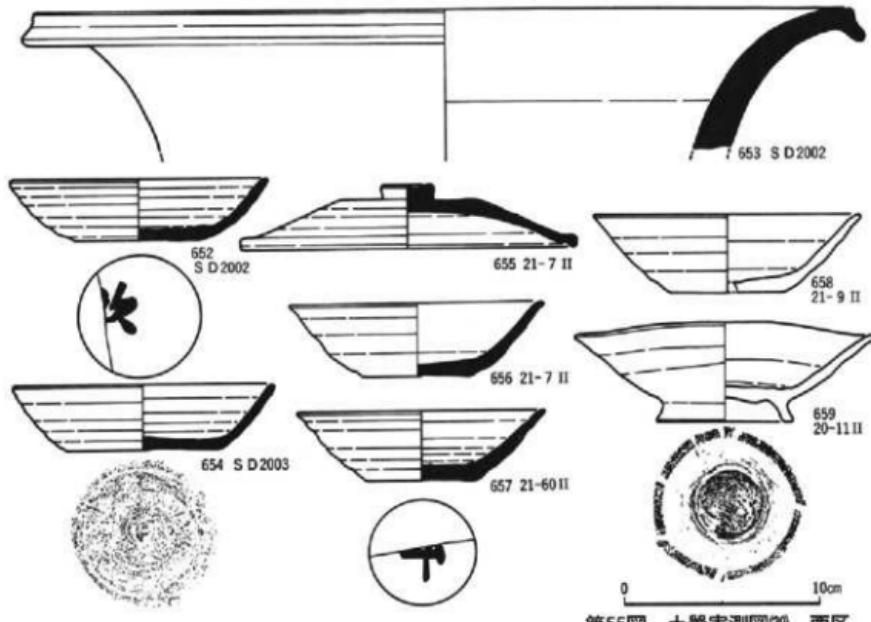
ピットは径15cm~50cm、深さは12~30cmの範囲内に入り、遺物は3基から出土した。

2 遺物 (第55図 表-14・17 図版23)

西区の遺物は図示可能な土器が8点、破片が1,318点と少ない。破片は表-17に示した。

652・653はS D2002から出土した須恵器である。652はヘラ切りの坏で底部に墨書があり、「炊」の可能性が高い。654はS D2003から出土したヘラ切りの須恵器坏である。

655~659は遺構外の土器である。655~657は須恵器の蓋・坏で、いずれも回転糸切り痕を残している。657には墨書が認められるが、判読はできない。658・659は赤焼土器の坏、高台付坏である。これらの多くは9世紀中頃の所産と考えられる。



第55図 土器実測図(2) 西区

VII 火山灰の分析

本遺区の東区の遺構内堆積物に灰白色ないしは灰褐色を呈する火山灰があることは第V章1の各遺構で述べたが、この火山灰についてパリノサーヴェイ株式会社および株式会社京都フィッショントラックによる分析結果があるので、以下に記載する。

1 鉱物組成分析結果（図版24）（パリノサーヴェイ株式会社による。）

下長橋遺跡 鉱物組成

試料番号	重鉱物組成						同定鉱物粒数	軽鉱物組成						同定鉱物粒数
	カルンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	不透明鉱物	その他		バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	石英	長石	その他	
1	1	91	89	2	44	23	250	15	13	55	27	36	104	250

2 考察（パリノサーヴェイ株式会社報告書抄）

灰白色の細粒火山灰である。火山ガラスに富む。含まれる重鉱物では、斜方輝石（36.4%）、普通輝石（35.6%）が多い。ほかにおもに磁鐵鉱からなる不透明鉱物が認められる（17.6%）。角閃石やカルンラン石も含まれてはいるが、ごく少量である。このテフラは、斜方輝石と単斜輝石に富む両輝石型のテフラと考えてよい。

一方、軽鉱物では、やはり火山ガラスの占める割合が大きい（33.2%）。火山ガラスのなかで最も大きい割合を占める形態は、軽石型のものである。軽石型のガラスには、纖維束状のものとスポンジ状のものが認められるが、前者の方が圧倒的に多い。ほかに分厚い中間型や平板状のバブル型火山ガラスが認められる。中間型ガラスには褐色がかったもの（黒曜石の破片）もある。

分析の結果、従来の研究の成果をもとにすると、庄内地方に分布する可能性がある完新世のガラス質テフラとしては、鬼界アカホヤ火山灰（6,300年前、町田・新井1978）、吾妻火山灰（5,300年前、早田ほか1988）、十和田a火山灰（915A.D.、町田ほか1981）、白頭山一苦小牧火山灰（11～12世紀、町田ほか1981、町田ほか1984）が挙げられよう。下長橋のテフラは、平安時代の遺構・遺物と関係しているとのことであるから、十和田a火山灰あるいは白頭山一苦小牧火山灰に関係すると考えられる。

下長橋のテフラは、両輝石などの重鉱物を多く含む。また、軽石型の火山ガラスに富み

黒曜石の破片も含む。このような鉱物組成や火山ガラスなどの特徴から、本資料は十和田
a 火山灰に由来している可能性が最も大きいと考えられる。

3 火山ガラス屈折率測定結果（株式会社京都フィッショントラックによる。）

火山ガラス屈折率測定結果一覧表

※ H : 扁平型
C : 中間型
T : 多孔質型
(吉川、1976)

No.	試料名 (sample name)	屈折率範囲 (range)		屈折率 平均値 (mean)	測定 個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	火山ガラス形態 (glass type)
		最小	最大				
1	YZ-S-1	1.5065	1.5094	1.5080	30	1.506 ≤ N d < 1.509	T型を主とする C型・H型を含む。

屈折率より、從来知られている白頭山火山灰（町田ほか1981）とは一致しない。

VIII 若干の考察

1 遺構群の変遷について

東区の遺構群に最低でも三期の重複があることは第IV章でも述べたが、掘立柱建物跡群の同時存在を検討すると、SB1・2・4はその可能性が高い。これら3棟の主軸方位はN-9°~11°30'-Eの範囲内に収まる。また、SB1の東面柱列とSB2の西面柱列の距離が5.25m、SB1の北面柱列とSB4の南面柱列の距離が6.15mとなり、SB1の南面柱列がSB2のEB16、4を結ぶ線上に、北面柱列が同じくEB14、6を結ぶ線上に一致し、SB4の東面柱列がSB1のEB10、6を結ぶ線上に、西面柱列が同じくEB14、2を結ぶ線上に一致する。以上のことから、これら3棟は計画性を持って配置されたものと理解される。

SB1・2・4が同時存在とすれば、SB2に附随する溝SD79を切るSB5は、この3棟より新しく、主軸方位がN-5°~7°-Eの範囲内にあるSB3、6との同時存在も想定し得る。SB3とSB5の距離が2.10mと近接することは、この両者の同時存在を困難にする要因となるが、両者の掘り方から尾北窓S-4窓式の縦軸陶器片が出土していることは、同時存在はないとしても、より近接した時期と考えるのが妥当であろう。SB6の出土遺物もSB1・2・4よりは後出のものと考えられることから、SB3・5・6の各建物跡は、同時存在ではないにしても、SB1・2・4の各建物跡よりは新しいと考えられる。

つぎに、建物以外では、火山灰が堆積土にはば純粋な層として含まれるSK27・28、SD78・91・92、SX979の各遺構は掘立柱建物跡群でも古いと考えられるSB1・2・4よ

りは古いことが、S B 4 の掘り方に S D92 が切られることと、S B 1 の掘り方の堆積土に火山灰ブロックが混入することから確実である。

また、特殊埋設遺構のうち E U822・826 の 2 基は S B 4 の掘り方を切っている。切り合ひ関係を持たない E U823～825、1023 もこの 2 基と同一時期と考えられ、これらは、地震によって変形を受けるべき地区にありながら、その痕跡が顕著にあらわれていない。出土遺物からみても、S B 3・6 より後出とみた方が自然であろう。特殊埋設遺構の土器は本遺跡で最も新しいと考えられる S X1105 の土器と一部共通性がある。

堆積土に火山灰粒を混入する遺構も多く、また、火山灰を全く含まない遺構もあるが、前者は火山灰降下後の遺構であるとは言えても、後者については火山灰降下前ときめつけるわけにはいかない。なぜなら、火山灰は最終的に当時の窪地にだけ溜ったものと考えられるからである。堆積土に火山灰を含まないもので、火山灰降下期の S K28 の土器群より、型式学的に古いと考えられるものは S P1101 の土器群だけである。

以上を整理すると東区の遺構群は、おおよそ、つぎのように変遷したと考えられる。

I 期……S P1101 (火山灰降下前)

II 期……S K27・28、S B78・91・92、S X979 (火山灰降下期)

III 期……S B1・2・4、S D74・75・79 (火山灰降下後)

IV 期……S B3・5・6

V 期……E U822～826・1023、S P992、S X1105 (地震後?)

これ以外の遺構では、出土遺物から判断して、S D94・97 が IV～V 期、S K24・34 が IV 期と推定されるが、遺物がある程度まとまって出土した土壤や溝状遺構はその大半が II～III 期に属するものと考えられる。

2 火山灰の降下年代について

平安時代の史書「扶桑略記」の延喜15年7月13日の条に「出羽国言上雨灰高二寸諸郷農桑枯損之由。」という記事がある。この時代の出羽国府は酒田市城輪か八幡町八森にあったかの議論はさておいても、山形県の庄内地方にあったことは確実であろう。とすれば、この降灰の原因が、もし、正二位勲三等の官位をもつ鳥海山の噴火によるものであったとしたら、その事が中央政府に言上されないのは極めて不自然であると言わざるを得ない。したがって、諸郷の農桑に被害をもたらした降灰の噴出源は出羽国府から相当の距離を隔てた場所と解するのが妥当であろう。また、出羽国においては鳥海山のたび重なる噴火の記録が残されているにもかかわらず、降灰による被害があったことは、この記事以外には全くないことを考えれば、本遺跡で検出された火山灰が、この記事に相当する蓋然性は極めて高いと言えるだろう。

十和田a火山灰については、十和田湖南部の湖底を噴出源として南は飯豊山まで分布する広域火山灰とする説（町田他1981）と、青森県と秋田・岩手の北部に限定する説（井上・山田1982）がある。井上・山田両氏は秋田・岩手の中・南部、および宮城県域に分布する十和田aと岩質の類似するいわゆる“粉状バミス”は秋田焼山および栗駒山を噴出源としたものと推定したが、その第一の根拠は、町田氏らの説によると、十和田aは噴出源の南側にのみ分布することになり、この降灰域が、わが国上空にある西風の卓越風向に一致しないということであった。

本遺跡の火山灰については十和田aの可能性が最も高いことが分析によって明らかになったが、出羽国内の秋田県南部、山形県域に十和田aが分布するとすれば、噴出源の南方向に分布の主軸があることの不自然さに対する合理的な説明が必要となる。すなわち、卓越風向の西風に対向する北東方向の強風があったとする以外に説明の方法はない。

扶桑略記によれば、降灰は延喜15年7月13日であり、これをユリウス暦に換算すると915年の8月26日となる。8月の後半に北東方向からの風が吹くとすれば、太平洋側の「やませ」が知られている。「やませ」は日本海側では「だし」と呼ばれる強風となり、庄内地方ではこの時期には数日間吹き荒れることも珍らしくはない。「やませ」は一年間を通じて発生するが、そのほとんどが5～9月に集中し、この5ヶ月間で70%に達するのである（内嶋1986）。十和田aの噴出時期が「やませ」の吹き荒れる時期でなければ、噴出源の南西方向にあたる庄内平野に降下することは考えられないである。

以上のことから、本遺跡で検出された火山灰は次のように結論づけることができる。

- ① 噴出源は十和田カルデラであり、町田 洋氏らによって広域火山灰とされた十和田a降下火山灰であること。
- ② 庄内地方に降下した日は延喜15年7月13日、すなわちユリウス暦の915年8月26日であること。

3 遺構群と土器の年代

本遺跡の遺構群の時期決定に有力な手がかりとなった火山灰の一次的な降下年が915年であることが明らかとなった。この事実と施釉陶器の編年を根拠とし、東区のI～V期の年代をおおよそ次のように考へることが可能である。

I期：915年以前—この時期の遺構はS P 1101が確認されただけである。供膳形態の土器は土師器壺、ヘラ切り、糸切りの須恵器壺、口径が小さく、身の深い赤焼土器の壺がある。この土器群は宅田遺跡（阿部他1983）、手藏田12遺跡SK 4（阿部他1985）の土器群に類似する。両者とも9世紀後半と考えられている。

II期：915年を前後する時期—SK 28に代表される土器群である。供膳形態の土器は比較

的身の深い赤焼土器の壺が主体となり、塊形を呈する土師器の高台付壺が伴う。須恵器の供膳形態はほとんどない。この土器群は手藏田12遺跡のS E 45、S K 118（阿部他1985）に併行するものと考えられる。

III期：10世紀中葉—供膳形態の土器は比較的身の深い赤焼土器の壺を中心に、身の浅い壺が伴い、若干の皿がある。赤焼土器の供膳形態が全体の80～88%を占めている。手藏田2遺跡S K 142（阿部他1986）や沼田遺跡S D 42（佐藤他1984）との共通性を指摘できる。

IV期：10世紀後半—供膳形態の土器は身の浅い赤焼土器を主体とし、身の深いものが若干伴い、小形皿、高台付小形皿が出現する。尾北窯S—4窯式の縁釉陶器が伴う。赤焼土器の供膳形態が全体の90%を越える。

V期：10世紀末葉～11世紀前半—S X 1105の土器に代表される土器群である。特殊埋設遺構の土器群は、やや古くなる可能性をもつが、ここではV期として一括する。供膳形態には土師器の塊状の高台付壺、身の深い赤焼土器の壺、高台付壺、小形皿、高台付小形皿、柱状高台付小形皿などがあり、量的には赤焼土器の小形品が多い。10世紀末葉に位置づけられる虎渓山1号窯式の灰釉陶器が伴っている。境興野遺跡S K 4、S K 26（川崎他1981）の土器群と同時期と考えられる。

4 地震の時期と特殊埋設遺構

本遺跡と隣接する浮橋遺跡（名和他1989）で発見された「地震跡」については阿子島功氏と筆者らの共同研究というかたちですでに報告した（阿子島他1988）。この報告において、地震によって動いた建物と、動いていない建物があるとしたが、その後の整理・検討の結果、大小の差はあっても掘立柱建物6棟のすべてに地震による掘り方の変形があることが明らかとなった。そして、これらの建物は東区のIII期、IV期に属するものであり、地震が起きた時期は少なくともIV期以降と考えられるに至った。したがって、掘り方の変形は上屋がなくなつてからも起こり得ることになり、同一建物でも変形のあった掘り方と、ない掘り方が共存することとも考え合わせれば、変形は極地的な地盤条件の差に起因すると理解せざるを得ない。

地震の起きた時期はIV期以降であることが明らかとなつたが、東区で建物跡と重複する位置にある特殊埋設遺構（V期）が地震の前か後かを結論づけるためには、なお、証拠不足の感は免れないが、以下の理由から、これらは地震後の所産、すなわち、地震はIV期とV期の間に起きたと考えたい。

第1の理由は特殊埋設遺構の掘り方に地震による変形が認められないことである。この点については、極地的な地盤条件で変形がなかつたと見ることも可能であるが、6基とも

変形がないことは、地震後の遺構の可能性が高いことを示唆する。

第2の理由は特殊埋設遺構の性格論にかかわる。これらの遺構は仏事による祭祀遺構の可能性が高いということであり(平川 南氏の御教示による)、地鎮に關係すると見て大きな誤りはないであろう。地鎮には、建築する地を浄化するという意味があると言われており(水野1985)、祭祀が行なわれた時には、これらの遺構の分布する範囲内は更地であったと考えられる。とすれば、その分布範囲からみて、東区には建物がなかったことになり、この事実は遺構群の変遷からみても肯首される。III期の企画性をもつ建物群の建築に際する地鎮祭祀がなく、IV期の建物群が廃絶されてから地鎮祭祀がとり行なわれたことはあまりにも不自然である。地震によるIV期建物群の崩壊という事実があつての地鎮祭祀とみてよいのではなかろうか。なお、V期の掘立柱建物跡は検出されていないが、礎石建物となつた可能性がある。1次調査で部分的ではあるが、根固め石のない径30~40cmの丸石を用いた礎石をもつ建物跡が検出されている(野尻他1988)。

5 遺跡の性格

検出した遺構・遺物の検討により、本遺跡の東区は一般集落とは異なった様相をもつものであることが明らかとなった。

- (1) III期の建物であるSB1・2・4は企画性を持って配置されたものであり、規模も大きく官衙の正殿、東脇殿、後殿の位置関係に類似すること。
- (2) 出土土器の組成をみると供膳形態が84%、煮沸形態が12.7%、貯蔵形態が3.3%となり、供膳形態の土器の割合が高い。庄内平野の集落遺跡では30~60%が煮沸形態の土器となるのが通例であり、多賀城政庁(白鳥1982)の98%には及ばないものの、集落遺跡に比べ、供膳形態の出現頻度がはるかに高いこと。
- (3) 墨書き器の中に文書形成をもつものや、習書と思われるものがあることから、本遺跡で文書が作成された可能性が高く、官人の帶に使われた石帶も出土したこと。
- (4) 地鎮の祭祀が一般集落で営まれたとは考えにくいこと。

以上により、東区が一般集落ではなく、官衙的な性格を持つ可能性が生じたが、もし、官衙であったとすれば、いったい何であったのか、今後に残された検討課題が多い。

引用・参考文献(抄)

- 町田 洋 斎井耕夫 齋藤 広(1981) : 「日本酒を酒ってきたテフラー」[科学] 51 pp562~569
川崎利夫 安部 実(1982) : 「坂野西遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第46号
井上克弘 山田一郎(1982) : 「東北地方における奈良~平安時代遺跡出土の粉状バースについて」[岩手県文化財調査報告書第68号] pp442~459
白鳥良一(1982) : 「第Ⅷ章考察 2 窯跡 (2) 土器」 [多賀城跡一政府認本文編] - pp387~393
阿部明彦 萩谷敬雄(1983) : 「宅地遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第72号
佐藤庄一 野尻 侃(1984) : 「沼田遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第78号
阿部明彦 大原俊彦(1985) : 「芋田遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第87号
水野正好(1985) : 「招福・除災その考古学史」 [国立歴史民俗博物館研究報告] 第7集 pp291~322
内崎勝兵衛(1986) : 「第2章5 やませに宿す東北地方」 [日本の自然5 日本の気候] pp93~101
阿部明彦 野尻 侃(1986) : 「手取田遺跡発掘調査報告書(2)」 山形県埋蔵文化財調査報告書第96号
阿子島 効 福谷孝雄・名和達明: 「山形県道佐町下長瀬遺跡・横溝跡にみられた噴砂・砂波現象」[地形] 10-1 pp19~20 (演旨)
名和達明 月山隆弘(1989) : 「浮磧跡 下長瀬遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第141号

表一5 土器計測表(1)

探査番号	遺物番号	器種	計測値(mm)			底切 幅	調整技法			出土地点・層位
			口径	底径	高さ		外面	内面		
	1	赤燒土器	136	66	41	回・系	口 ク	ロ ク	ロ	S B1, E B1
	2		130	60	45	回・系	口 ク	ロ ク	ロ	S B1, E B5 (R P168)
	3	須恵器					ロ ク	ロ ク	ロ	S B1, E B7
	4		140	70	41	回・系	ロ ク	ロ ロ ク	ロ	S B1, E B7
	5		124	56	37	回・系	ロ ク	ロ ク	ロ	S B1, E B8
	6		124				ロ ク	ロ ロ ク	ロ	S B1, E B8
	7		120	50	43	回・系	ロ ク	ロ ク	ロ	S B1, E B10
	8		120	54	44	回・系	ロ ク	ロ ロ ク	ロ	S B2, E B3
	9		122	54	38	回・系	ロ ク	ロ ロ ク	ロ	S B2, E B4
	10		85	54	43	回・系	ロ ク	ロ ク	ロ	S B2, E B5
	11		122	45	40	回・系	ロ ク	ロ ロ ク	ロ	S B2, E B10
23	12	小皿	104	48	19	回・系	ロ ク	ロ ク	ロ	S B2, E B16 (R P233)
	13		112	56	33	回・系	ロ ク	ロ ク	ロ	S B3, E B3
	14	高台付环				回・系	ロ ク	ロ ロ ク	ロ	S B3, E B4
	15		126	59	32	回・系	ロ ク	ロ ロ ク	ロ	S B3, E B4
	16	赤燒土器	129	25	39	回・系	ロ ク	ロ ロ ク	ロ	S B3, E B4
	17		146	64	41	回・系	ロ ク	ロ ロ ク	ロ	S B3, E B5
	18		124	50	36	回・系	ロ ク	ロ ロ ク	ロ	S B3, E B5
	19	小皿	108	62	31	回・系・付合	ロ ク	ロ ロ ク	ロ	S B3, E B5
	20		144	47	51	回・系	ロ ク	ロ ク	ロ	S B3, E B7 (R P152)
	21		124	56	45	回・系	ロ ク	ロ ロ ク	ロ	S B3, E B8
	22		124	60	40	回・系	ロ ク	ロ ロ ク	ロ	S B3, E B8
	23		132	40	40	回・系	ロ ク	ロ ロ ク	ロ	S B3, E B8
	24	高台付环				回・系・付合	ロ ク	ロ ロ ク	ロ	S B3, E B8
	25		124	56	37	回・系	ロ ク	ロ ロ ク	ロ	S B3, E B9
	26		142	66	41	回・系	ロ ク	ロ ロ ク	ロ	S B3, E B10
	27		116	50	35	回・系	ロ ク	ロ ク	ロ	S B3, E B11 (R P137)
	28		121	64	40	回・系	ロ ク	ロ ロ ク	ロ	S B3, E B11 (R P139)
	29		130	54	31	回・系	ロ ク	ロ ク	ロ	S B3, E B11 (R P140)
	30		128	56	33	回・系	ロ ク	ロ ロ ク	ロ	S B3, E B11
	31	土師器	高台付环	146	66	58	回・系・合付	ロ ク	ミガキ, 黒色處理	S B3, E B11 (R P138)
	32		壺	310			ロ ク	ロ ク	ロ	S B3, E B11
	33	赤燒土器	小盤	92	51	29	回・系・付合	ロ ク	ロ ロ ク	S B4, E B3
	34		壺	130	51	45	回・系	ロ ク	ロ ロ ク	S B4, E B5
	35		138	50	35.5	回・系	ロ ク	ロ ロ ク	S B4, E B5	
	36		高台付环	130	46	43	回・系	ロ ク	ロ ロ ク	S B4, E B5
	37		壺	130	50	39	回・系	ロ ク	ロ ロ ク	S B4, E B5
	38	土師器	高台付环	144				ロ ク	ミガキ, 黑色處理	S B4, E B6
24	39		片口							S B5, E B6
	40			90	48	25	回・系	ロ ク	ロ ク	S B6, E B1 a (R P21)
	41			90	40	26	回・系	ロ ク	ロ ク	S B6, E B1 a
	42	赤燒土器	小形皿	104	44	25	回・系	ロ ク	ロ ク	S B6, E B2 a (R P22)
	43			96	40	25	回・系	ロ ク	ロ ク	S B6, E B2 a
	44			108	50	29	回・系	ロ ク	ロ ク	S B6, E B2 b
	45	小盤	92	44	23	回・系・付合	ロ ク	ロ ク	ロ	S B6, E B3 a
	46	壺	126			回・系	ロ ク	ロ ク	ロ	S K21
	47	土師器	高台付环	146	70	55	回・系・付合	ロ ク	ミガキ, 黑色處理	S K22 (R P24)
	48			140	60	60	回・系・附台・菊花	ロ ク	ロ ロ ク	S K22 (R P25)
	49			124	50	48	回・系	ロ ク	ロ ク	S K22 (R P26)
	50			56			回・系	ロ ク	ロ ク	S K22 (R P28)
	51	赤燒土器	壺	50			回・系	ロ ク	ロ ク	S K22 (R P28)
	52			156	58	55	回・系	ロ ク	ロ ク	S K22 (R P29)
	53			124	50	47	回・系	ロ ク	ロ ク	S K22 (R P30)
	54			130	52	38	回・系	ロ ク	ロ ク	S K24 F
	55		小形皿	104	44	26	回・系	ロ ク	ロ ク	S K24 F
	56	土師器	壺	126	56	58	回・系	ロ ク	ミガキ, 黑色處理	S K26 (R P32)
	57		高台付环	126	76	55	回・系	ロ ク	ミガキ, 黑色處理	S K26 (R P36)
	58			130	48	43	回・系	ロ ク	ロ ク	S K26 (R P33)
	59	赤燒土器	壺	130	50	43	回・系	ロ ク	ロ ク	S K26 (R P36)
25	60			144	60	43	回・系	ロ ク	ロ ク	S K26 (R P37)

表-6 土器計測表(2)

擇回 番号	遺物 番号	器 種	計測値(mm)			底切 離	調整 技 法			出 土 地 点・層 位
			口径	底径	器高		外 面	内 面		
25	赤燒土器	环	130	56	45	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K26(R P38)
			128	52	43		口 ク	口 ク	口 ク	S K26(R P38-39)
			130	54	51	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K26(R P38 b-42)
			126	54	49	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K26(F 2~3 (R P39))
			150	60	65	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K26(R P44)
			130	50	44	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K26(R P46)
			128	54	48	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K26
			128	52	47	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K26
		高台付环	92	50	22	回・系・付台	口 ク	口 ク	口 ク	S K27
			96	48	22					S K27
26	土 師 器	环	138	59	55	回・系	口 ク	口 ク	ミガキ, 黒色処理	S K28(R P62-73)
			148			回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K28(R P74)
			150			回・系	口 ク	口 ク	ミガキ, 黑色処理	S K26(R P79)
			130			回・系	ミガキ, 黒色処理	ミガキ, 黒色処理	ミガキ, 黒色処理	S K26(R P58-82)
			150	76	55	回・系・付台	口 ク	口 ク	ミガキ, 黑色処理	S K28(R P56)
			140	70	57	回・系・付台・菊花	口 ク	口 ク	ミガキ, 黑色処理	S K28(R P57)
		高台付环	150			回・系・付台・菊花	口 ク	口 ク	ミガキ, 黑色処理	S K28(R P57-61)
			144	60	36	回・系・付台・ハナ	ミガキ, 黑色処理	ミガキ, 黑色処理	ミガキ, 黑色処理	S K28(R P59)
			116	58	46	回・系・付台	ミガキ, 黑色処理	ミガキ, 黑色処理	ミガキ, 黑色処理	S K28(R P61)
			138	60	59	回・系・付台	口 ク	口 ク	ミガキ, 黑色処理	S K28(R P69)
27	赤燒土器	高台付环	176	75	74	回・系・付台	口 ク	口 ク	ミガキ, 黑色処理	S K28(R P73)
			192			回・系・付台	口 ク	口 ク	ミガキ, 黑色処理	S K28(R P65-73)
			138			回・系・付台	口 ク, ミガキ	ミガキ	ミガキ, 黑色処理	S K28(R P74)
			185	70	78	回・系・付台	口 ク	口 ク	ミガキ, 黑色処理	S K28(R P78)
			120	60	65	回・系・付台	ミガキ	ミガキ	ミガキ, 黑色処理	S K28(R P82)
			130	50	56	回・系・付台	口 ク	口 ク	ミガキ, 黑色処理	S K28
		环	150	72	51	回・系・付台	口 ク	口 ク	ミガキ, 黑色処理	S K28, F 1~3
			132	52	49	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K28(R P55)
			126		45	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K28(R P58)
			140	58	48	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K28(R P55-60)
28		赤燒土器	128	50	49	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K28(R P60-87)
			127	50	48	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K28(R P61-62-63-84)
			124	44	43	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K28(R P62-63)
			130	54	54	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K28(R P64)
			132	50	47	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K28(R P67)
			130	58	45	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K28(R P62-67)
			121	45	50	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K28(R P70)
			130	54	46	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K28(R P70-71-72)
			128	52	50	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K28(R P71)
			123	52	51	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K28, F 3 (R P72)
29		环	135	50	42	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K28, F 3 (R P74)
			130	48	47	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K28(R P75)
			138	50	45	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K28(R P76)
			128	52	50	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K28(R P77)
			128	54	45	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K28, F 1~3 (R P79)
30		赤燒土器	150	54	59	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K28, F 3 (R P80)
			130	48	53	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K28(R P81)
			146	60	54	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K28(R P82-83)
			140	56	47	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K28(R P61-63)
			132	52	48	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K28(R P84)
			128	52	44	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K28(R P85)
			130	50	43	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K28(R P84-86)
			135	55	47	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K28, F 3
			130	55	44	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K28
			132	52	40	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K28, F 3
31		赤燒土器	130	46	52	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K29
			130	52	50	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K29
			120	50	48	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K31(R P121)
			120	54	50	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K31(R P123)
			134	54	42	回・系	口 ク	口 ク	口 ク	S K31(R P123)

表一7 土器計測表(3)

坪区番号	遺物番号	器種	計測値(mm)			底切 部 離	調整技法			出土地点・層位	
			口径	底径	器高		外面	内面			
28	121	壺	120	46	47	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K31(R P 123)	
	122		138	50	48	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K31(R P 124)	
	123		132	58	46	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K31(R P 125)	
	124		126	48	44	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K31(R P 126)	
	125		126	48	44	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K31(R P 127)	
	126		124	46	38	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K31(R P 127)	
	127		140	54	47	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K31(R P 129)	
	128		124	56	45	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K31(R P 130)	
	129		144	55	57	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K31(R P 131)	
	130		120	46	47	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K31(R P 131)	
	131		124	45	47	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K31(R P 132)	
	132		120	50	40	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K31	
	133		130	52	40	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K31	
	134		300				ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K31(R P 123)	
	135		124		39	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K32	
	136	赤燒土器	高台付壺	154	70	58	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K32F
	137			126	56	43	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K34(R P 98)
	138			124	50	40	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K34(R P 99)
	139			127	60	40	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K34(R P 100)
	140			126	48	42	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K34(R P 101)
	141			118	55	38	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K34(R P 102)
	142			137	60	48	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K34(R P 104)
	143			120	45	35	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K34(R P 106)
	144			124	58	38	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K34(R P 106)
	145			130	60	40	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K34(R P 107)
	146			122	52	41	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K34(R P 108)
	147			124	50	38	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K34(R P 105)
	148			124	54	42	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K36(R P 181)
	149			129	50	48	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K36(R P 182)
	150			130	45	47	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K36
	151			130	50	41	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K36
	152		要	200			ロ ク	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K36
	153	土器	高台付壺	280	105	134	回・糸・付台	羅 車 ツ ベ	ミガキ、黒色施釉		S K37(R P 173)
	154			117	55	49	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K37(R P 174)
	155			140	60	40	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K37
	156			122	50	38	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K37
	157			142	50	47	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S K37
	158			92	44	25	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S D53(R P 8)
	159			90	40	30	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S D58(R P 7)
	160	赤燒土器		124	50	43	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S D60(R P 11)
	161			123	60	40	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S D63(R P 117)
	162			118	50	47	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S D66(R P 88)
	163			124	52	44	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S D66(R P 90)
	164			160	70	57	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S D66(R P 91)
	165			128	50	42	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S D66(R P 92)
	166			126	46	51	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S D66(R P 157)
	167			132	52	49	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S D74(R P 164)
	168	須恵器		135	50	38	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S D75
	169			128	50	48	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S D75(R P 163)
	170		土器	130	50	47	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S D76(R P 161)
	171			140	56	35	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S D76(R P 160)
	172			130	56	43	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S D78
	173	素焼土器	壺	400			回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S D78
	174		壺	136	50	38	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S D79
	175		須恵器	90			ナデ	ケ ズ リ	ロ ク	ロ ク	S D82
	176	赤燒土器		130	56	45	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S D82
	177			132	50	52	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S D82
	178			130	50	45	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S D82, F 2・3
	179			134	50	42	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S D82, F 2・3
	180			122	50	30	回・糸	ロ ク	ロ ク	ロ ク	S D90

表一 土器計測表(4)

地図番号	遺物番号	器種	計測値(mm)			底切	部題	調整技法		出土地点・層位
			口径	底径	蓋高			外面	内面	
31	181	赤燒土器	130	60	42	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D92(R P151)	
	182		130	56	49	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D92(R P154)	
	183		130	50	52	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D92(R P154)	
	184		124	50	43	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D92	
	185		130	50	48	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D92	
	186		130	50	47	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D92	
	187		124	—	—	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D92	
	188		93	46	25	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D94(R P143)	
	189		90	34	22	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D94(R P144)	
	190		95	42	26	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D94(R P145)	
32	191	土師器	156	64	55	圓・糸	ロ ク ロ	ミガキ, 黒色斑痕	S O96 F	
	192		146	—	52	ケズリ	ナデケズリ	刷毛	目 S D97(R P172)	
	193		120	50	38	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D97	
	194		134	50	43	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D97	
	195		130	50	42	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D97	
	196		80	34	21	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D97	
	197		80	44	23	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D97	
	198		87	38	22	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D97	
	199		89	40	25	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D97	
	200		86	40	27	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D97	
33	201	赤燒土器	86	40	20	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D97	
	202		90	40	22	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D97	
	203		125	56	47	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D1002(R P175)	
	204		135	50	48	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D1002(R P176)	
	205		129	45	53	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D1002(R P177)	
	206		130	50	50	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D1002(R P178)	
	207		132	60	45	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D1002(R P179)	
	208		125	60	45	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D1002(R P180)	
	209		106	38	40	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D1002	
	210		136	54	50	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D1002	
34	211	土師器	140	50	34	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D1002	
	212		132	46	38	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D1004	
	213		124	54	47	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D1004	
	214		128	56	44	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D1004	
	215		124	50	43	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D1004	
	216		120	56	50	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D1004	
	217		150	60	49	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D1004	
	218		148	60	47	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D1004	
	219		124	40	44	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D1004	
	220		280	—	—	—	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D1004	
35	221	赤燒土器	280	—	—	—	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D1004	
	222		280	—	—	—	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D1004	
	223		114	—	—	—	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D1024 F	
	224		158	60	47	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	S D1024 F	
	225		160	30	28	圓・糸	ロクロ, ケズリ	ロ ク ロ	S D1026	
	226	赤燒土器	187	110	146	ナデ	ロクロ, ケズリ	ロクロ, 刷毛	E U822(R P93-1)	
	227		86	38	24	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	E U822(R P93-2)	
	228		91	41	24	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	E U822(R P93-3)	
	229		86	39	24	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	E U822(R P93-4)	
	230		86	44	24.5	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	E U822(R P93-5)	
	231		86	39	23.5	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	E U822(R P93-6)	
	232		91	46	24.5	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	E U822(R P93-7)	
	233		92	41	25.5	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	E U822(R P93-8)	
	234		138	49	46	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	E U822(R P93-9)	
	235		222	120	167	ナデ	ロクロ, ケズリ	ロクロ, ナデ	E U823(R P94-1)	
36	236	小形皿	95	48	26	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	E U823(R P94-2)	
	237		94	50	24	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	E U823(R P94-3 a)	
	238		96	50	24	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	E U823(R P94-3 b)	
	239		100	50	24	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	E U823(R P94-3 c)	
	240		102	53	28	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	E U823(R P94-4)	

表一 9 土器計測表(5)

押因 番号	遺物 番号	器 種	計測値(mm)			底 部 切 離	調整 技 法		出土地点・層位
			口径	底径	高		外 面	内 面	
34	241	小形皿 高台付坏 壺	97	46	26	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ EU823(R P94-5)
	242		98	44	24	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ EU823(R P94-6 a)
	243		96	43	24	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ EU823(R P94-6 b)
	244		120	66	43	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ EU823(R P94-7)
	245		177	90	144	ナデ刷毛目	ロクロ、ケズリ	ロクロ、刷毛目	ロ EU824(R P95-1)
	246		87	43	25	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ EU824(R P95-2)
	247		90	42	25	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ EU824(R P95-3)
	248		92	47	27	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ EU824(R P95-4)
	249		90	42	27	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ EU824(R P95-5)
	250		88	45	24.5	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ EU824(R P95-6)
35	251	赤燒土器 壺	86	42	25	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ EU824(R P95-7)
	252		88	44	26	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ EU824(R P95-8)
	253		92	42	24.5	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ EU824(R P95-9)
	254		90	44	23	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ EU824(R P95-10)
	255		86	45	26.5	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ EU824(R P95-11)
	256		140	52	45	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ EU824(R P95-12)
	257		177	100	143	ナデ	ロクロ、ケズリ	刷毛目	ロ EU825(R P96-1)
	258		90	41	25	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ EU825(R P96-2)
	259		93	46	27	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ EU825(R P96-3)
	260		90	44	27.5	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ EU825(R P96-4)
36	261	赤燒土器 壺	93	44	26	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ EU825(R P96-5)
	262		86	42	27	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ EU825(R P96-6)
	263		87	47	24	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ EU825(R P96-7)
	264		90	42	26	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ EU825(R P96-8)
	265		135	50	44	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ EU825(R P96-9)
	266		179	118	145	ナデ	ロクロ、ケズリ	ロクロ、刷毛目	ロ EU826(R P97-1)
	267		88	42	23	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ EU826(R P97-2)
	268		89	38	22	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ EU826(R P97-3)
	269		86	39	25	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ EU826(R P97-4 ①)
	270		90	40	25	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ EU826(R P97-4 ②)
37	271	赤燒土器 壺	88	45	24	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ EU826(R P97-5)
	272		86	40	25.5	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ EU826(R P97-6)
	273		142	58	47	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ EU826(R P97-7)
	274		90	40	24	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ EU826(R P97-8)
	275		240	124	149	ナデ	ロクロ、ケズリ	ロクロ、ナデ	ロ EU1023(R P171壺の中)
	276		134				ロ ク	ロ ク	ロ EU1023(R P171壺の中)
	277		94				ロ ク	ロ ク	ロ EU1023(R P171壺の中)
	278		92				ロ ク	ロ ク	ロ EU1023(R P171壺の中)
	279		136	55	53	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ SP102(R P50)
	280		131	50	43	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ SP102(R P51)
38	281	壺	135	50	48	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ SP102(R P52)
	282		126	50	42	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ SP140(R P 3)
	283		124	55	43	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ SP140(R P 4)
	284		153	78	56	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ SP140(R P 5)
	285		126	50	45	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ SP140(R P 6)
	286		116	44	36	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ SP190(R P12)
	287		128	52	36	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ SP190(R P13-a)
	288		118	49	34	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ SP190(R P13-b)
	289		120	46	36	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ SP190(R P14)
	290		118	44	33.5	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ SP190(R P15)
39	291	壺	118	45	35	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ SP190(R P16)
	292		132			圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ SP466(R P114)
	293		122	56	42	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ SP466(R P115)
	294		153	82	54	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ SP466(R P116)
	295		133	50	53	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ SP930(R P147-148)
	296		132	50	50	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ SP930(R P149)
	297		134	50	50	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ SP930(R P150)
	298		123	42	33	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ SP976(R P109)
	299		120	47	34	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ SP976(R P110)
	300		124	49	35	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ SP976(R P111)
40	301	高台付壺	115	45	37	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ SP976(R P112)
	302		121	50	35	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ SP976(R P113)

表-10 土器計測表(6)

部番 番号	遺物 番号	器種	計測値(mm)			底 切 離	調整 指法		出土地点・層位
			口径	底径	器高		外 面	内 面	
37	303	小形皿 器台	100	44	25	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P982(R P134)
	304		100	50	15	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P982(R P135)
	305		98	45	28	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P982(R P136)
	306		90	36	28	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P992(R P167-1)
	307		90	36	27	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P992(R P167-2)
	308		90	36	25	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P992(R P167-3)
	309		90	34	28	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P992(R P167-4)
	310		90	32	29	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P992(R P167-5)
	311		80	34	24	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P992(R P167-6)
	312		96	40	26	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P992(R P167-7)
	313		87	39	27	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P992(R P167-8)
	314		90	36	28	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P992(R P167-10)
	315		87	34	25	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P992(R P167-12)
	316		93	35	27	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P992(R P167-13)
	317		91	34	29	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P992(R P167-14)
	318		89	35	25	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P992(R P167-15)
	319	赤燒土器	96	36	27	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P992(R P167-16)
	320		92	36	25	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P992(R P167-17)
	321		94	40	26	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P992(R P167-18)
	322		92	38	27	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P992(R P167-19)
	323		88	38	25	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P992(R P167-20)
	324		91	36	27	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P992(R P167-21)
	325		90	36	25	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P992(R P167-22)
	326		90	36	24	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P992(R P167-23)
	327		88	36	26	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P992(R P167-24)
	328		93	40	28	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P992(R P167-25)
	329		90	42	20	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P992(R P167-26)
	330		96	42	20	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P130
	331		90	45	25	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P130
38	332	环	130	56	44	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P165(R F54)
	333		123	46	48	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P171(R F9)
	334		112	50	47	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P171
	335		148			口 ク	口 ク	口 E B174(R P48)	
	336		140	60	47	圓・糸	口 ク	口 ク	口 E B174(R P49)
	337		122	48	35	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P188
	338	小形皿	94	42	37	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P218(R P120)
	339		96	34	27	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P219
	340		88	45	20	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P234(R P18)
	341		92	48	27	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P234(R P19)
	342		104	57	30	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P234(R P20)
	343		120	50	41	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P327
	344		122	48	38	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P395
	345		130	50	47	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P426(R P155)
	346	土師器 高台付环	102	50	49	圓・糸	ミガキ, 黒色處理	ミガキ, 黑色處理	口 S P430
	347		110	50	31	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P437
	348		122	60	47	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P444
	349		92	40	17	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P444
	350	赤燒土器	126	50	46	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P451(R P162)
	351		126	58	44	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P453
	352		124	54	40	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P456(R P159)
	353		128	50	26	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P463(R P118)
	354		164	64	73	圓・糸	口 ク	ミガキ, 黑色處理	口 S P465(R P156)
39	355		130	60	40	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P467
	356		100	46	25	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P689(R P53)
	357		125	33	45	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P700
	358		100	40	25	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P839
	359		102	48	31	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P841
	360		134	50	43	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P870
	361		134			口 ク	口 ク	口 E B899	
	362		160	60	53	圓・糸	口 ク	口 ク	口 S P1034 F

表-11 土器計測表(7)

擇回 番号	遺物 番号	器 種	計測値(mm)			底 部 切 離	調整 技 法		出土地点・層位
			口径	底径	高さ		外 面	内 面	
39	363	赤燒土器 小形壺	125	46	48	圓・糸	口 ク	口 ク	S P1055
	364		100	28	23	圓・糸	口 ク	口 ク	S P1071 F
	365		120	54	45	圓・糸	口 ク	口 ク	ミガキ, 黒色處理 S P1101
	366		118	50	54	圓・糸	口 ク	口 ク	ミガキ, 黑色處理 S P1101
	367		140	58	70	圓・糸	口 ク	口 ク	ミガキ, 黑色處理 S P1101
	368		122	60	31	圓・ヘラ	口 ク	口 ク	S P1101
	369		130	56	43	圓・糸	口 ク	口 ク	S P1101
	370		122	50	50	圓・糸	口 ク	口 ク	S P1103
	371		130	60	43	圓・糸	口 ク	口 ク	S X184(R P141)
	372		124	52	39	圓・糸	口 ク	口 ク	S X223(R P17)
	373		150	54	59	圓・糸	口 ク	口 ク	S X238(R P119)
40	374	須恵器 壺	80			平行タタキ, ナデ	平行 タタキ	口 ク	S X239(R P142)
	375		454			桔子目タタキ	平行	アテ	S X631(R P31)
	376		128	50	42	圓・糸	口 ク	口 ク	平行 アテ S X631
	377		130	50	41	圓・糸	口 ク	口 ク	平行 アテ S X631
	378		124	44	45	圓・糸	口 ク	口 ク	平行 アテ S X631
	379		128	56	36	圓・糸	口 ク	口 ク	平行 アテ S X643(R P158)
	380		130	44	37	圓・糸	口 ク	口 ク	平行 アテ S X735
	381		128	60	39	圓・糸	口 ク	口 ク	平行 アテ S X821
	382		126	50	43	圓・糸	口 ク	口 ク	平行 アテ S X970(R P170)
	383		120	50	45	圓・糸	口 ク	口 ク	S X970
41	384	赤燒土器 壺	126	50	43	圓・糸	口 ク	口 ク	平行 アテ S X971
	385		120	56	40	圓・糸	口 ク	口 ク	平行 アテ S X974(R P169)
	386		126	56	50	圓・糸	口 ク	口 ク	平行 アテ S X975 F
	387		128	56	45	圓・糸	口 ク	口 ク	平行 アテ S X977(R P185)
	388		132	50	46	圓・糸	口 ク	口 ク	S X979
	389		122	52	42	圓・糸	口 ク	口 ク	平行 アテ S X979
	390	土器 壺	146	68	62	圓・糸	口 ク	口 ク	ミガキ, 黑色處理 S X980
	391		122	50	46	圓・糸	口 ク	口 ク	S X980
	392		150	60	51	圓・糸	口 ク	口 ク	S X980 F 2
	393		130	50	45	圓・糸	口 ク	口 ク	S X980
	394		150			口 ク	口 ク	口 ク	S X980
42	395		300			口 ク	口 ケ	ズリ	S X980 F
	396		125	56	46	圓・糸	口 ク	口 ク	S X993 F
	397		131	56	47	圓・糸	口 ク	口 ク	S X993 F
	398		130	50	46	圓・糸	口 ク	口 ク	S X989 F
	399	土器 高台付壺	148	50	57	圓・糸・付台	口 ク	口 ク	ミガキ, 黑色處理 S X1001, 4区
	400		114	52	43	圓・糸・付台	ミガキ, 黑色處理	ミガキ, 黑色處理	S X1001, 10区
	401		122	50	46	圓・糸	口 ク	口 ク	S X1001(R P183)
	402		122	48	43	圓・糸	口 ク	口 ク	S X1001, 1区
	403		118	54	45	圓・糸	口 ク	口 ク	S X1001, 2区
	404		120	58	48	圓・糸	口 ク	口 ク	S X1001, 4区
	405		134	52	38	圓・糸	口 ク	口 ク	S X1001, 4区
43	406	赤燒土器 壺	126	52	44	圓・糸	口 ク	口 ク	S X1001, 6区
	407		128	56	41	圓・糸	口 ク	口 ク	S X1001, 6区
	408		126	45	45	圓・糸	口 ク	口 ク	S X1001, 9区 (R P184)
	409		129	58	41	圓・糸	口 ク	口 ク	S X1001, 9区
	410		118	52	42	圓・糸	口 ク	口 ク	S X1001, 10区
	411		140	55	56	圓・糸	口 ク	口 ク	S X1001, 10区
	412		120	56	50	圓・糸	口 ク	口 ク	S X1001, 10区
	413		120	46	43	圓・糸	口 ク	口 ク	S X1001, 10区
	414		138	72	61	圓・糸・付台	口 ク	口 ク	S X1001, 7区
44	415		166				口 ク	口 ク	S X1001, 2区
	416		150				口 ク	口 ク	S X1001, 2区
	417		126			ナデ	ロクロ, ケズリ	口 ク	S X1001, 10区
	418	土器 高台付壺	132	58	50	圓・糸・付台	口 ク	口 ク	ミガキ, 黑色處理 S X1105 (R P203)
	419		156	70	57	圓・糸・付台	口 ク	口 ク	ミガキ, 黑色處理 S X1105 (R P211)
	420		128	60	55	圓・糸・付台	口 ク	口 ク	ミガキ, 黑色處理 S X1105 (R P231)
45	421	須恵器 壺					ミガキ, 黑色處理	口 ク	S X1105
	422		510				桔子目ふうタタキ	青海波アテ	S X1105 (R P189)

表-12 土器計測表(8)

排回 番号	遺物 番号	器種	計測値(mm)			底切 部 縫	調整 技法		出土 地點・層位
			口径	底径	器高		外圓	内圓	
43	423	漁窓器	530			波伏文、ロクロ	ロ ク	ロ	S XI105(R P 194)
	424		117	50	36	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 191)
	425		125	50	41	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 195)
	426		124	58	39	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 196)
	427	小形環	104	40	31	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 197)
	428		130	50	38	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 202-205)
	429		138	50	45	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 203)
	430		142	62	47	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 210)
	431	環	140	56	42	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 224)
	432		118	48	32	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 225)
44	433		112	56	34	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105
	434		123	50	40	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105
	435		120	70	48	回・糸・付台	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 217)
	436		114	回・糸・付台		ロ ク	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 220-221)
	437	高台付环	146	70	60	回・糸・付台	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 220-223-224)
	438		98	54	46	回・糸・付台	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 221)
	439		144	76	51	回・糸・付台	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 227)
	440		128	66	49	ヘラ切り・付台	ロ ク	ロ ク	S XI105
	441		153	76	62	ヘラ切り・付台	ロ ク	ロ ク	S XI105
	442		148	84	56	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105
45	443		82	39	27	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 185)
	444		98	38	33	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 187)
	445		92	42	26	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 188)
	446		98	38	26	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 189)
	447		92	42	24	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 190)
	448		89	40	21	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 193)
	449		84	43	24	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 196)
	450		89	35	23	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 197)
	451		107	37	33	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 198)
	452		94	40	25	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 199)
	453	赤燒土器	100	45	31	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 201)
	454		94	40	28	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 203)
	455		92	42	27	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 204)
	456		103	41	33	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 205)
	457		91	46	26	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 207)
	458		92	45	28	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 208)
	459		83	38	25	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 209)
	460		88	34	28	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 212)
	461		89	40	20	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 213)
	462		90	40	28	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 214)
	463		100	44	25	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 215)
	464		100	38	30	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 215)
	465		92	40	39	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 218)
	466		100	44	26	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 219)
	467		88	36	19	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 221)
	468		94	40	30	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 222)
	469		82	32	24	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 228)
	470		88	34	21	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 229)
	471		92	44	26	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105(R P 232)
	472		94	42	25	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105
	473		86	40	24	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105
	474		100	40	24	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105
	475		100	48	23	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105
	476		104	44	24	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105
	477		90	50	19	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105
	478		98	40	24	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105
	479		84	40	24	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105
	480		92	35	19	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105
	481		86	40	27	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105
	482		94	40	28	回・糸	ロ ク	ロ ク	S XI105

表一十三 土器計測表(9)

押出番号	遺物番号	器種	計測値(mm)			底切端	調整技法		出土地点・層位
			口径	底径	高さ		外面	内面	
45	483	小形皿	84	34	16	圓・糸	口 ク	口 ク	口 SX1105
	484		95	46	27	圓・糸	口 ク	口 ク	口 SX1105
	485		104	40	27	圓・糸	口 ク	口 ク	口 SX1105
	486		94	40	19	圓・糸	口 ク	口 ク	口 SX1105
	487		94	46	20	圓・糸	口 ク	口 ク	口 SX1105
	488		99	39	25	圓・糸	口 ク	口 ク	口 SX1105
	489		85	36	25	圓・糸	口 ク	口 ク	口 SX1105
	490		90	35	25	圓・糸	口 ク	口 ク	口 SX1105
	491		94	46	27	圓・糸	口 ク	口 ク	口 SX1105
	492		79	33	18	圓・糸	口 ク	口 ク	口 SX1105
46	493	小形皿付盤	84	36	22	圓・糸	口 ク	口 ク	口 SX1105
	494		102	44	27	圓・糸	口 ク	口 ク	口 SX1105
	495		93	41	23	圓・糸	口 ク	口 ク	口 SX1105
	496		92	40	21	圓・糸	口 ク	口 ク	口 SX1105
	497		89	42	22	圓・糸	口 ク	口 ク	口 SX1105
	498		80	44	22	圓・糸	口 ク	口 ク	口 SX1105(R P230)
	499		45			圓・糸	口 ク	口 ク	口 SX1105
	500		90	42		圓・糸	口 ク	口 ク	口 SX1105
	501		82	46	22	圓・糸	口 ク	口 ク	口 SX1105
	502		92			圓・糸	口 ク	口 ク	口 SX1105
47	503	柱状高台付盤	106	64	37	圓・糸	口 ク	口 ク	口 SX1105
	504		88	38	21	圓・糸	口 ク	口 ク	口 SX1105(R P200)
	505		94	38	25	圓・糸	口 ク	口 ク	口 SX1105(R P227)
	506		84	38	24	圓・糸	口 ク	口 ク	口 SX1105
	507		86	40	24	圓・糸	口 ク	口 ク	口 SX1105
	508		92	34	27	圓・糸	口 ク	口 ク	口 SX1105
	509		86	35	17	圓・糸	口 ク	口 ク	口 SX1105
	510		120	65	40	圓・糸	ミ ガ キ	ミ ガ キ	40-7 II
	511	土師器	184			圓・糸	ミ ガ キ	ミ ガ キ	41-8 II
	512		150			圓・糸	口 ク		44-9 II
	513		134	70	36	圓・糸	口 ク	口 ク	口 39-6 II
	514		140			圓・糸	口 ク	口 ク	口 35-5
48	515	甕				圓・糸	口 ク	口 ク	口 35-9 II
	516		194			圓・糸	口 ク	青海波アテ	35-5 II
	517		335			圓・糸	口 ク	青海波アテ	35-5 II
47	518	赤焼土器	128	60	43	圓・糸	口 ク	青海波アテ	34-6 II
	519		142	52	48	圓・糸	口 ク	青海波アテ	34-10 II
	520		131	47	42	圓・糸	口 ク	青海波アテ	34-11 II
	521		128	60	40	圓・糸	口 ク	青海波アテ	34-11 II
	522		128	50	35	圓・糸	口 ク	青海波アテ	34-11 II
	523		132	60	43	圓・糸	口 ク	青海波アテ	34-11 II
	524		153	54	53	圓・糸	口 ク	青海波アテ	34-11 II
	525		120	50	40	圓・糸	口 ク	青海波アテ	34-12 II
	526		128	46	48	圓・糸	口 ク	青海波アテ	35-9 II
	527		140	54	50	圓・糸	口 ク	青海波アテ	35-13 II
	528		129	50	45	圓・糸	口 ク	青海波アテ	35-13 II
	529		130	46	45	圓・糸	口 ク	青海波アテ	35-13 II
	530		128	58	40	圓・糸	口 ク	青海波アテ	36-6 II
	531		124	54	35	圓・糸	口 ク	青海波アテ	36-9 II
	532		118	56	46	圓・糸	口 ク	青海波アテ	37-6 II
	533		116	60	37	圓・糸	口 ク	青海波アテ	37-7 II
	534		129	55	33	圓・糸	口 ク	青海波アテ	37-7 II
	535		118	55	38	圓・糸	口 ク	青海波アテ	37-7 II
	536		131	58	46	圓・糸	口 ク	青海波アテ	37-9 II
	537		130	64	39	圓・糸	口 ク	青海波アテ	37-10 II
	538		126	60	39	圓・糸	口 ク	青海波アテ	37-10 II
	539		118	45	44	圓・糸	口 ク	青海波アテ	37-11 II
	540		120	60	48	圓・糸	口 ク	青海波アテ	37-13 II
	541		120	50	37	圓・糸	口 ク	青海波アテ	38-6 II
	542		118	60	45	圓・糸	口 ク	青海波アテ	38-9 II

表-14 土器計測表(10)

押出番号	遺物番号	器種	計測値(mm)			底切離	調整技法		出土地点・層位
			口径	底径	器高		外面	内面	
48	543	环	124	50	42	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 38-13 II
	544		140	54	45	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 39-7 II
	545		158	66	45	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 39-7 II
	546		120	52	44	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 39-8 II
	547		116	52	40	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 39-8 II
	548		134	50	46	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 39-10 II
	549		120	50	45	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 39-13 II
	550		130	60	37	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 39-6 ~ 13
	551		118	49	37	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 46-11 II
	552		129	50	35	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 46-11 II
	553		118	44	35	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 46-11 II
	554		150	60	50	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 46-13 II
	555		128	56	50	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 41-8 II
	556		140	52	39	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 42-7 II
	557		130	56	38	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 42-7 II
	558		132	44	45	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 43-6 II
	559		118	44	40	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 43-7 II
	560		126	54	45	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 43-8 II
	561		132	50	46	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 43-9 II
	562		128	56	37	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 43-10 II
	563		124	54	50	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 43-11 II
	564		130	54	42	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 44-8 II
	565		126	56	45	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 44-8 II
	566		132	52	39	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 44-9 II
49	567	赤燒土器	126	54	40	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 44-10 II
	568		110	48	34	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 35-8 II (R P 186)
	569		124	50	37	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 36-9 II
	570		146	74	48	西・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 35-13 II
	571		250				ロ ク	ロ ク	ロ 44-7 II
	572		83	40	19	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 33-9 II
	573		90	35		圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 34-5 II
	574		86	38	23	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 35-5 II
	575		90	40	24	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 35-7 II
	576		100	45	23	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 35-7 II
50	577	小形皿	96	44	29	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 35-9 II
	578		100	42	30	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 35-12 II
	579		95	40	26	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 35-13 II
	580		96	35	30	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 35-13 II
	581		99	44	28	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 35-13 II
	582		98	44	27	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 35-13 II
	583		96	42	26	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 36-7 II
	584		90	44	22	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 43-12 II
	585		116	58	30		ロ ク	ロ ク	ロ 34-11 II
	586		168	80	45	圓・糸・付台・薄花	ロ ク	ロ ク	ロ 35-9 II
51	587	土器	88	45	22	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 33-9 II
	588		88	50	18	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 35-7 II
	589		112				ロ ク	ロ ク	ロ 41-6 II
	590		96						ロ 42-8 II
	591						カ キ メ	ロ ク	ロ 39-13 II
	600		122	58	48	圓・糸	ロ ク	ロ ク	S K28 (R P 68)
	602		(150)	(60)	(79)	圓・糸	ロ ク ロ ク ミガキ	ミガキ、黒色處理	S P110I
	605		(134)	(56)	(37)	圓・糸	ロ ク	ロ ク	S P110I
55	652	須恵器	(132)	(64)	(32)	圓・糸	ロ ク	ロ ク	S D2002 F
	653		(420)			タ タ キ	ロ ク	ロ ク	S D2002 F
	654		(134)	(76)	(33)	回転ヘラ切り	ロ ク	ロ ク	S D2003
	655		(170)		(33)	回転、ケズリ	ロ ク	ロ ク	ロ 21-7 II
	656		(130)	(54)	(37)	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 21-7 II
	657		(126)	(55)	(35)	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 21-6 II
	658		(136)	(58)	(41)	圓・糸	ロ ク	ロ ク	ロ 21-9 II
	659		高台付环	(154)	(70)	(50)	圓・糸	ロ ク	ロ ク

表-15 施釉陶器一覧

時 期	施 釉 陶 器				灰 釉 陶 器	
	武 沢 室		尾 北 室		美 游 室	
	器種・出土地区	式	器種・出土地区	式	器種・出土地区	式
9C 第4四半期	K 水注 SB3EB11(1) 香炉 34-11II(3) 90 39-7II(2)	S 檻 	SX1105(4) 4			
10C 第2四半期		椀 S 23	S B 3 E B 5 (5) S B 3 E B 6 (8) S B 5 E B 14 (7,9) S P 633(11) (S X 631)(13) (S X 827)(14) 37-10II(15) 39-8II(12) (41-6II)(17) S B 3 E B 11 (6) S P 339(16) S P 379(18)	元 ケ 丘 一 2	大 原 2	35-5(38) 35-7(40) 35-9II(43) 36-10II(39) 38-7II(42) (39-7II)(41) S P 1103(44)
10C 末葉	古 久 手 C 3	椀 S 27	椀 33-10II(18) 虎 溝 山 1 三 椀	(S P 456)(30) S P 572(25) S P 1098(23) 35-5(33) 35-6(28) (35-9II)(34) 35-13II(27) 36-6II(24) 38-6II(19,36) 38-10II(21) 39-9II(26) 40-13II(22,29) 41-7II(20) 43-9II(32) 43-10II(31) S P 251(37) S P 1026(35)	楕 虎 溝 山 1 三 椀	S P 1051(45) S X 1001(48) S X 1105(47) 35-13II(49) 36-5(50) 36-9II(51,52) 39-12II(53) 43-7II(46)

■ 時期区分・器式名は、齊藤孝正氏のもの。
 ()つき器式のものは出土していない。
 ()内数字は、巻頭図版の番号
 ()つきのものは、小破片のため器種を判別しにくいもの

表-16 破片資料一覽(1)

表-17 破片資料一覽(2)

図 版





遺跡近景 東→



西区造構検出状況 南東→



SB 1検出状況 東→



SB 1 E B11土層セクション 南→



SB 1 E B13土層セクション 南→

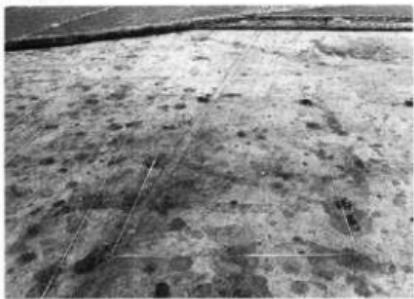


SB 1完掘 北東→

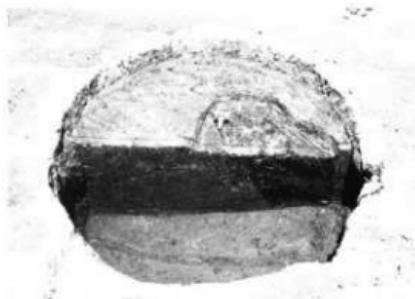


SB 1完掘 西→

図版4



SB 2 検出状況 南→



SB 2 EB 4 土層セクション 南→



SB 2 EB 8 土層セクション 南→



SB 2 完掘 北→



SB 2 完掘 北→



SB 3 検出状況 東→



SB 3 E B11出土状況 北西→



SB 3 E B12土層セクション 東→



SB 3 完掘 南→



SB 3 完掘 南→



SB 4 EB 10 土層セクション 南→



SB 4 EB 11 土層セクション 南→



SB 4 EB 12 土層セクション 南→



SB 4 完掘 南→



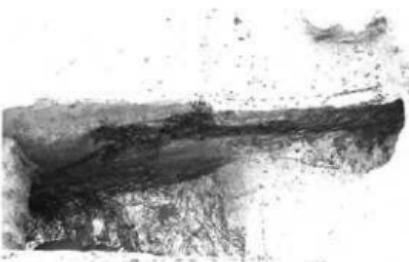
SB 4 完掘 南→



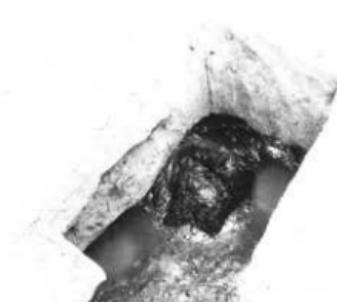
SB 5 E B 14 土層セクション 西→



SB 5 E B 7 土層セクション 北西→



SB 6 E B 3 a 土層セクション 北→



SB 6 E B 3 a 柱根出土状況 南西→



SB 5 完掘 北→



S K 22土器出土状況 南西→



S K 26土器出土状況



S K 28全景 南東→



S K 28土層セクション 南→



S K 28土器出土状況 東→



S K 31土器出土状況 南→



S K 34土器出土状況 南→



S K 37土層セクション 南→



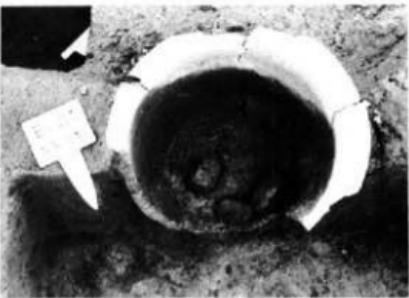
E U 822検出状況 南西→



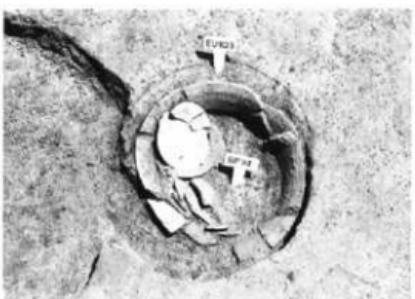
E U 822壺内・外部の土器 東→



E U 822土層セクション・ピット内の石 東→



E U 822壺底部の石 東→



E U 823検出状況 西→



E U 823土層セクション 南→



E U 823壺内部の土器 南→



E U 823壺内部の石 南→



E U 824検出状況 西→



E U 824土層セクション 西→



E U 824壺内・外部の土器 西→



E U 824掘り方完掘 西→



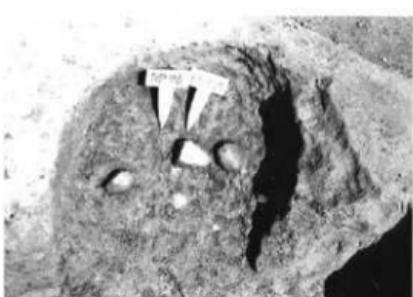
E U 825検出状況 西→



E U 825土層セクション 西→



E U 825壺内・外部の土器 西→



E U 825完掘 西→



E U 826検出状況 南西→



E U 826土層セクション 北→



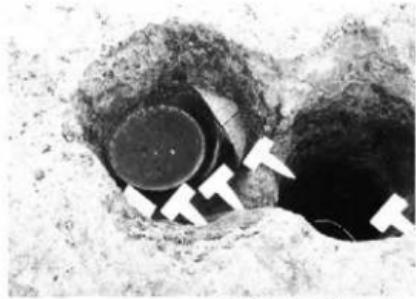
E U 826壺内部 北→



E U 826壺底部の石 北→



E U 1023壺底部の石 北→



S P 102土器出土状況 北→



S P 140土器出土状況 南→



S P 190土器出土状況 東→



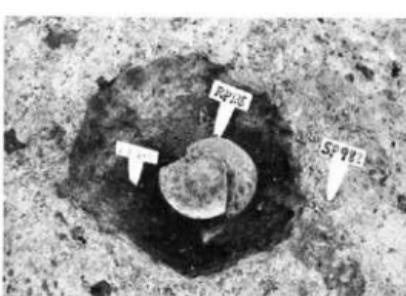
S P 466土器出土状況 東→



S P 930土器出土状況 南→



S P 976土器出土状況 東→



S P 982土器出土状況 北西→



S P 992土器出土状況（1回目） 東→



S P 992土器出土状況（2回目） 東→



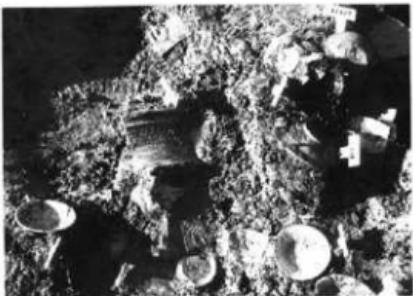
S P 992土器出土状況（3回目） 東→



S P 992土器出土状況（4回目） 東→



S X1105全景 東→



S X1105土器出土状況 東→



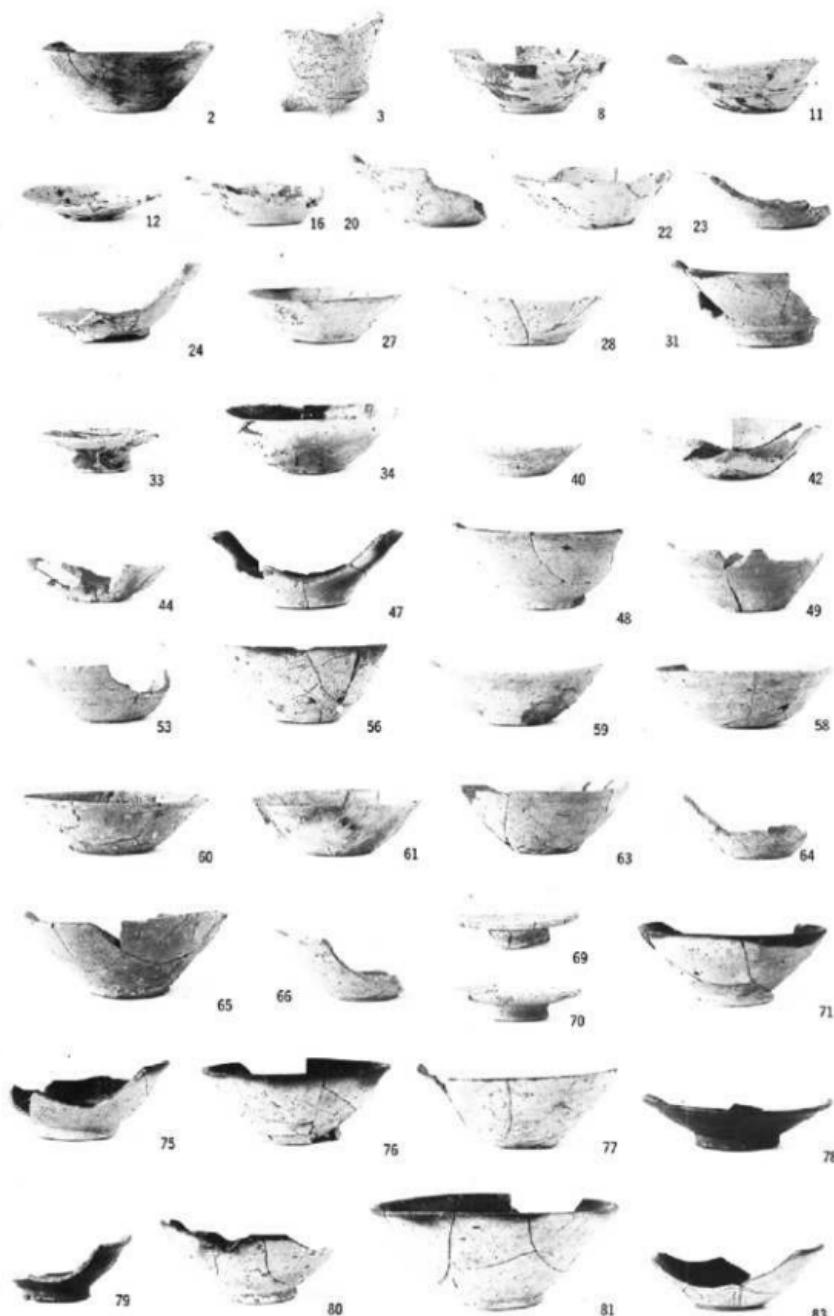
S X1105土器出土状況 南東→

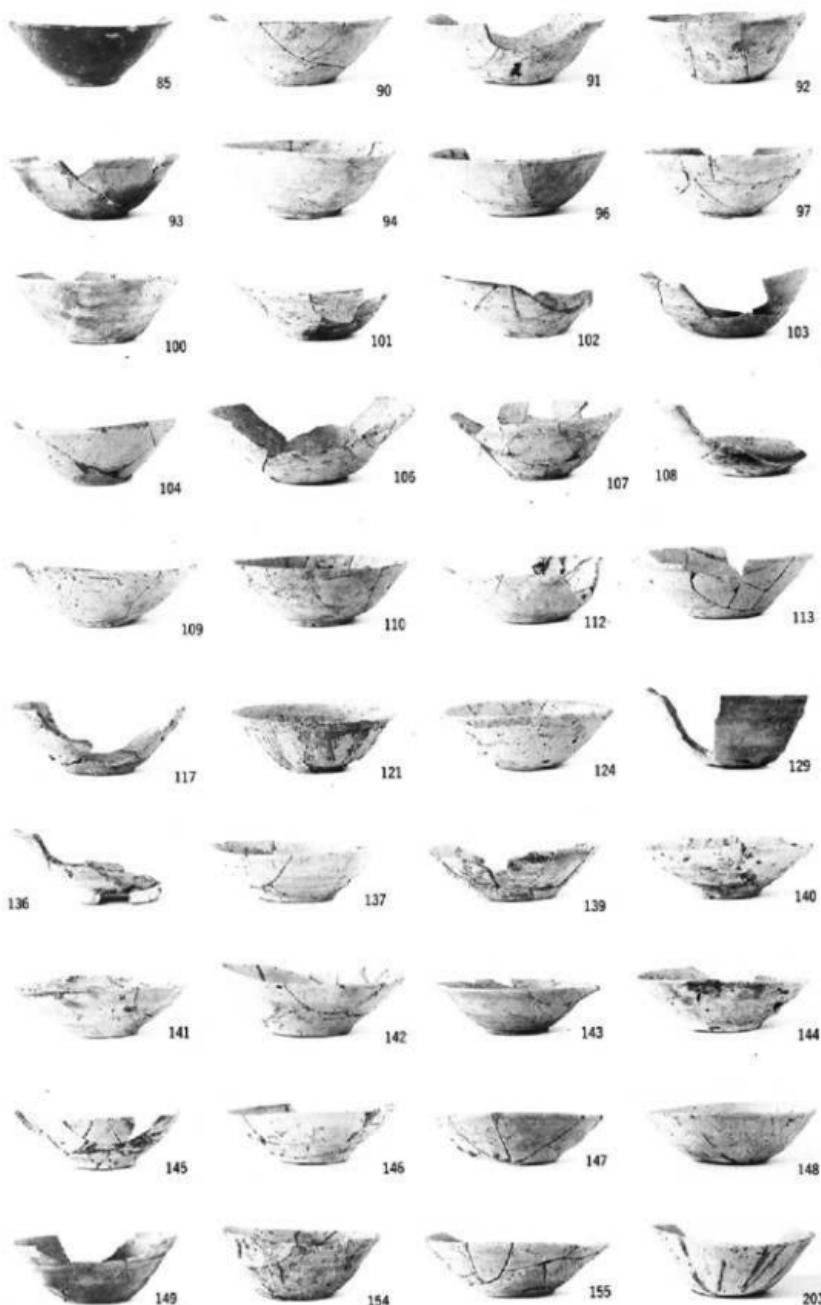


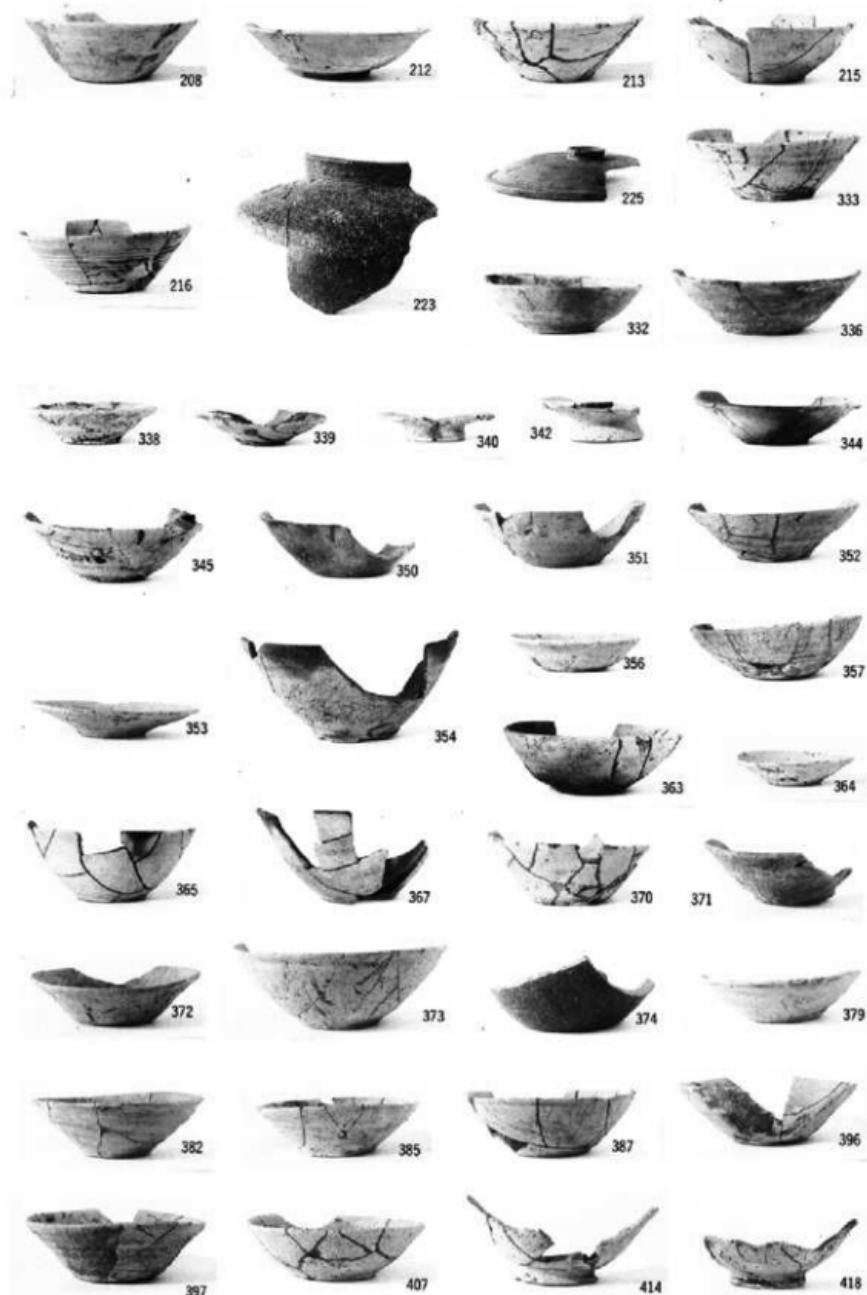
S X1105土器出土状況 南東→

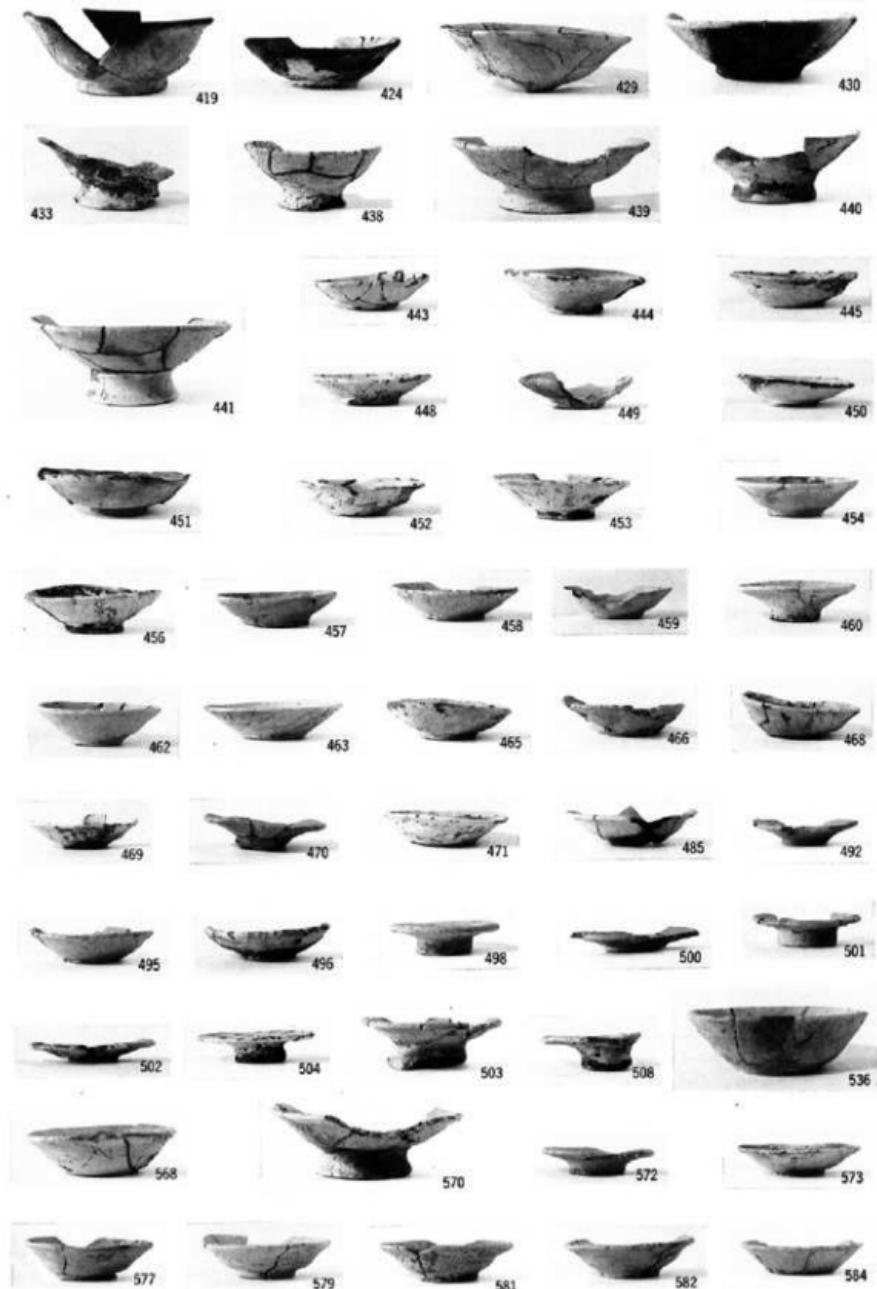


11月調査区全景 南西→











E U822



E U823



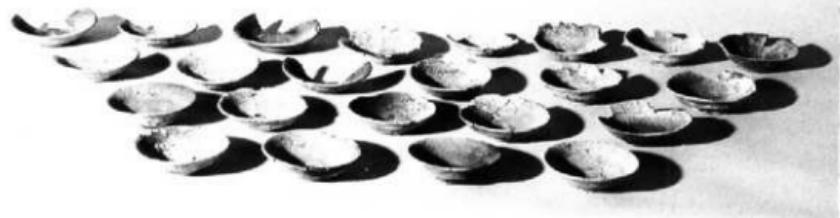
E U 825



E U 826



E U1023



S P992



S P 102



S P 140



S P 190



S P 466



S P 930



S P 976



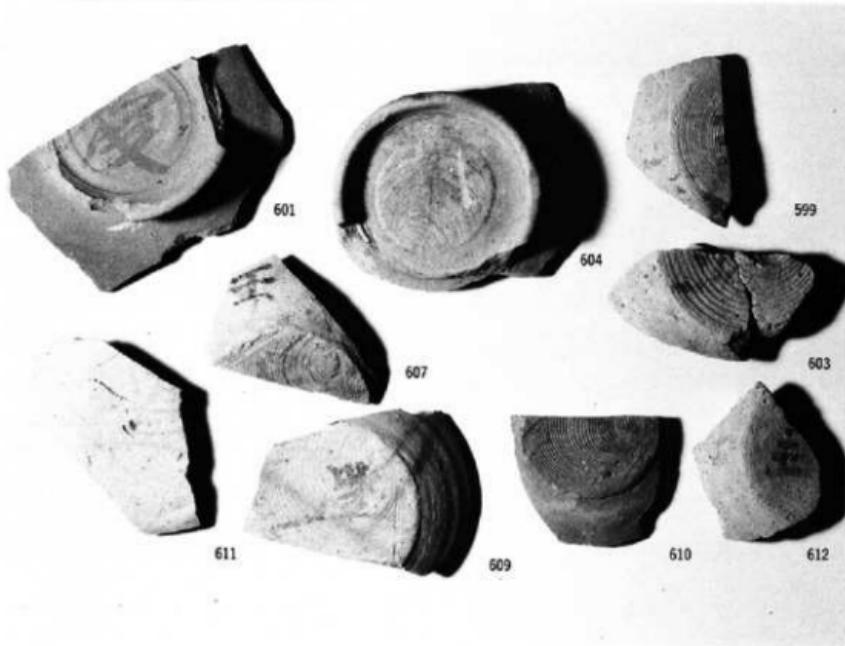
S P 982

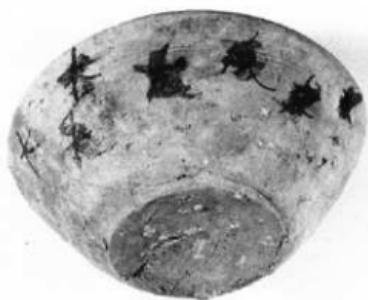


S X751人骨

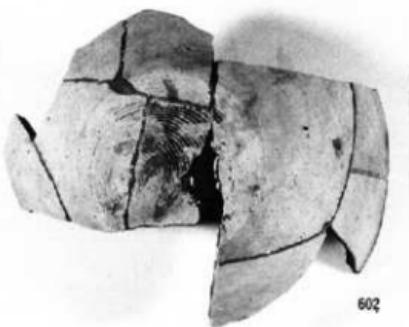
土器埋設ビット付

図版22





600



602



605



652

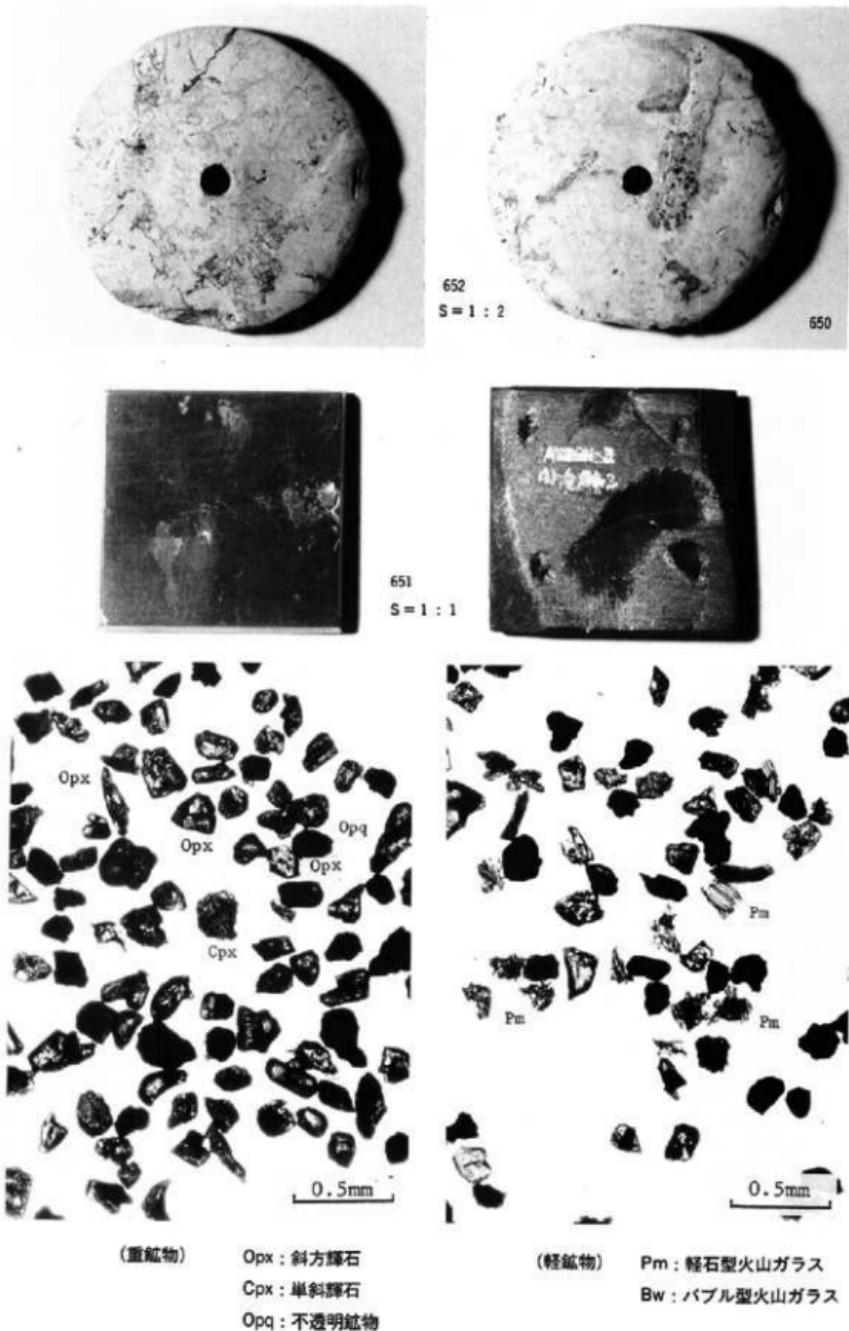


657



645

図版24



山形県埋蔵文化財調査報告書第145集

県道遊佐（停）藤崎線

下 長 橋 遺 跡

発掘調査報告書

平成元年3月25日 印刷

平成元年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 大場印刷株式会社